札幌国際大学

地域連携センター年報

第１号

札幌国際大学
地域連携センター

札幌国際大学

札幌国際大学 地域連携センター年報
第１号

目　　次

＜事業報告＞

１． 音楽交流による地域づくり
～美唄市における試み～最終報告書 …… 河本 洋一 … pp1-55

２． 地域資源を活用したまちづくりに関する研究
今金町フットパスの活用方策について …… 佐久間 章・丹治 和典・千葉 里美・新井 貢・朝地 信介・本多 理紗…[p1], pp1-25, [pp1-16]

３．高齢者の運動を通じた健康の維持・増進　～清田区と美唄市を対象に～ ……
国田 賢治・清田 岳臣・後藤 ゆり・阿南 浩司
藤原 勝夫（金沢学院大学人）・矢口 智恵（北海道文教大学）・清田 直恵（日本医療大学）
…… pp1-36

＜論文・研究報告＞

１． 浦河町を事例としたSWOT分析を用いた観光による地域振興に関する研究
…… 丹治 和典 … pp1-33

札幌国際大学奨励研究（平成 26～28 年度）

音楽交流による地域づくり～美唄市における試み～
最終報告書

平成29年3月31日

はじめに

本研究は、〈新型アウトリーチ〉という考え方の下、美唄サテライト・キャンパス運営協議会との協働事業の展開を通じて、音楽交流による地域づくりの新たなモデルの構築に取り組んだ実践研究である。その要となる〈新型アウトリーチ〉という考え方は、1990 年代の後半以降、芸術家を教育や福祉施設に派遣してワークショップなどの事業を行う活動の総称として定着してきたこれまでのアウトリーチの代わる考え方である。これまでのアウトリーチは、普段、芸術に触れることが少ない地域や住民に対して、体験の機会を提供することで芸術の普及や地域の文化施設の役割を拡大させてきた。しかし、官製興行化、エビデンス測定の不足、他の政策領域との関連付けの不足、人材を招くコストの増大等が課題として指摘されており（財団法人地域創造　『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書』2010 年）、これらの課題を抜本的に解決するためには、〈従来型アウトリーチ〉に代わる新たな発想が必要であると考えた。

そこで本研究では、これまでのアウトリーチの課題を解消するための新たな発想として、〈新型アウトリーチ〉という考え方を提唱している。この考え方は、プロではないが高度な芸術性をもった人々を活用することによって、官製興行化する音楽演奏や人材招聘のコストの拡大、地域づくりとの関連不足などの課題を解決していくための仕組みの基礎をなす考え方である。

この考え方に基づき、本研究では、札幌国際大学シアターオーケストラの学生、札幌交響楽団定年退職者、地元のハイパー・アマチュア（後述）らを有機的に関連づけ、①キャンプ（演奏者間の宿泊型技術交流）、②デリバリー（出前演奏会）、③ワークショップ（参加型演奏会）等の活動を実施し、これまでのアウトリーチが抱えてきた問題を解決していくという試みを実践してきた。

研究は 3 カ年計画で実施し、 1 年目の平成 26 年度には、キャンプ（演奏者の宿泊型技術交流）や美唄市内の保育所や幼稚園でのデリバリー（出前演奏会）、市内の中高生や大人によるワークショップ（参加型演奏会）に取り組んだ。2 年目の平成 27 年度は、平成 26 年度に引き続き、未就学児童（市内保育所・幼稚園）を対象に、デリバリー（出前演奏会）とワークショップ（参加型演奏会）の展開した。これにより、美唄市内の全ての保育所と幼稚園でのデリバリー（出前演奏会）の実施が完了した。さらに、3 年目の平成 28 年度は、美唄市内の高齢者施設や知的障がい者授産施設などでもデリバリー（出前演奏会）をおこない、参加型演奏会は、美唄市内の小中高生と大人が一同に介した単独の合同演奏会を実施するまでに至った。

本研究は、美唄市との連携協力の下で展開されたこれらの取り組みを基に、〈新型アウトリーチ〉という考え方の有効性を実践を通して検証し、地域づくりに活用していくという試みである。

第1章　研究の構想

第１節　全国的に展開されるようになったアウトリーチの現状と課題

一般財団法人地域創造は、平成22年3月に『新・アウトリーチのすすめ～文化・芸術が地域に活力をもたらすために～』という報告書をまとめている。この報告書は、本財団が、平成10年度から継続してきた公立ホールや学校などへのアウトリーチとコンサート〈音楽活性化事業（おんかつ）〉の事業成果を踏まえ、単にアーティストを派遣するという形式的なものに留まっているアウトリーチを、教育や福祉などの幅広い行政分野と連携することで、新たな可能性を検討することを目的に書かれている。

本報告書では、独自に実施した調査[1]に基づき、アウトリーチの現状と課題について、次のように指摘している。

(1)現状

1990年代の後半以降、芸術家を教育や福祉施設に派遣してワークショップなどの事業を行うこれまでのアウトリーチは、普段、芸術に触れることが少ない地域や住民に対して体験の機会を提供することで、芸術の普及や地域の文化施設の役割を拡大させてきた。

(2)課題

ア：官製興行化：〈民〉の事業を〈官〉が肩代わりしている例が散見される。
イ：エビデンス（効果）測定不足：効果測定が不十分で演奏会等が単なる興行で終わっている。
ウ：他の政策領域との関連不足：実施することのみが目的として語られてきた。
エ：人材を招くコストの増大：プロの演奏家の場合、謝礼や交通費等のコスト負担が大きい。

このような調査結果を踏まえ、本報告書では、新たなアウトリーチの方向性として、次の4つを提言している。

①劇場・ホール内での鑑賞・体験サポート
②派遣型アウトリーチ（単発・集中型）
③派遣型アウトリーチ（継続・長期型）
④連携・協働型アウトリーチ

1　2008年～2009年度にかけて実施。当財団の事業でアーティストを派遣した学校や福祉施設で教員や児童にアンケートを実施し、アウトリーチの効果を定量的に把握したもの。

さらに、このような分類を基に、アウトリーチの活動の目的を明確化し、幅広い関係者と連携し、長期的な展望と振り返りをすることの重要性を指摘している。つまり、公立ホールが単体で実施するのではなく、文化部局以外の行政部局や市民、大学といった官民の垣根を超えた連携・協働により、まちづくりとして政策の一部を担うまでにその価値を高めていこうとするねらいが本報告書には込められていると言えよう。

第2節　美唄市におけるハイパー･アマチュアを活用した〈新型アウトリーチ〉の実践構想

本報告書で述べられているアウトリーチの4つの方向性は、あくまでも方向性であり、これらに基づく具体的な取り組みについては、地域の実態を考慮した様々な展開例が想定される。そこで、本研究では、一般財団法人地域創造の先行研究を踏まえ、新たなアウトリーチの姿を実践的に研究するためのフィールドが必要であると考え、本学と連携協定を調印している美唄市を選定した。美唄市を実践フィールドとして選定した理由は、次の三つである。

①美唄サテライト・キャンパス運営協議会という組織があり、教育や福祉などの幅広い行政分野との横断的な連携が期待できること

②公立ホール（美唄市民会館）での既存の音楽的事業があり、その発展が期待できること

③学校関係者や一般市民の協働による新たな音楽活動に取り組むための核となる団体や人材が確保できること

以上、三つの理由から、本研究では美唄市との協働事業の中で、新しいアウトリーチの型の具体例を〈新型アウトリーチ〉として提言することを構想した。

(1)〈新型アウトリーチ〉の定義

本研究で構想では、〈新型アウトリーチ〉の条件として、次の五つ掲げることとした。

【ア】地域外の人材（札響OBやセミプロ等、本学学生）による様々な活動がいわば〈触媒〉となって、地域住民の芸術文化活動を活性化させる。

【イ】美唄市のハイパー・アマチュア（後述）と一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。

【ウ】実施後の効果測定の項目や方法が予め設定されており、エビデンスの明確化の仕組みがある。

【エ】提供だけでなく、提供を通してまちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定されている。

【オ】コスト削減とハイパー・アマチュアの演奏機会の増大の二つの課題を一気に解消する場を設定する。

(2)〈新型アウトリーチ〉で重要な〈ハイパー・アマチュア〉という考え方

〈ハイパー・アマチュア〉とは、本研究における造語である。プロと一般住民の間に位置する、プロではないが高度な芸術性をもった市民を意味する。これらの人々は、活動することそのものに喜びを感じ、発表する場を必要としているが、活動することを生業とはしていない点が重要である。これらの人々を活用することで、謝礼や交通費などのコスト面での負担軽減や、生涯学習の発表機会の提供、人々の交流人口を促進することによる、地域の活性化などのメリットが期待できる。

第 3 節　研究の基本計画(3年計画)

(1)平成 26 年度:ワークショップ型演奏会及び体験型演奏会の社会実験モデル化

札幌国際大学シアターオーケストラの学生、札幌交響楽団定年退職者、地元のハイパー・アマチュア（美唄市民吹奏楽団員）を核としたウインド・オーケストラを組織し、①ワークショップ型演奏会（前述条件：ア、イ、ウ、エ、オ）、②体験型演奏会（前述条件：ア、ウ、エ、オ）を実施した。エビデンスの明確化のために、期待される効果について想定し、その都度参加者（演奏者、聴衆）にアンケート調査を実施すると共に、一定期間経過後に追跡調査を実施し、音楽による新型アウトリーチによる地域づくりの有効性について検証することとした。

(2)平成 27 年度:市内の保育所と幼稚園での体験型演奏会の実施によるデータ抽出

前年度の実施内容のうち、美唄市内の保育所と幼稚園を全て訪問することにより、エビデンス測定の基盤を整備することを想定した。さらに、「エ：提供を通してまちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定されている。」を念頭に置き、保育所と幼稚園の教職員に対する意識調査を実施し、エビデンスの明確化の仕組みづくりに資するデータを抽出することとした。

(3)平成 28 年度:音楽をする人や音楽そのものが触媒となるまちづくりのモデルの構築

音楽を演奏すること、音楽を聴くこと、そして音楽と共にする様々な活動が、地域づくりとどのような関係にあるのかをモデル化し、意識調査によるエビデンスを測定することとした。また、音楽が人を育てるという側面を検証し、〈新型アウトリーチ〉による地域づくりの有効性を明確化することとした。

第２章　平成26年度の研究実績

第1節　ワークショップ型演奏会及び体験型演奏会の社会実験

(1)ワークショップ型演奏会の取り組み:美唄市民音楽祭へ向けたワークショップと合同演奏

【ワークショップ】

日　　時：平成 26 年 11 月 8 日（土）13 時 00 分～15 時 00 分

場　　所：東中学校

主　　催：美唄サテライト・キャンパス運営協議会

札幌国際大学短期大学部（担当：河本洋一　教授）

内　　容：札幌交響楽団（首席奏者）ＯＢの真弓先生や、美唄市民吹奏楽団指揮者の石井先生、美唄中学校の橋本先生のほか、河本教授が率いる札幌国際大学シアターオーケストラの学生、美唄市民吹奏楽団のパートリーダーを中心に演奏指導を交え、演奏練習をおこなった。

効　　果：各団体とも初顔合わせにも関わらず、楽器演奏を通じて参加団体間の交流が深まり、合わせて各パートに分かれての演奏指導により、技術の向上も図られた。

参加者数：77 名　札幌国際大学シアターオーケストラの学生 7 名・河本教授・札幌交響楽団ＯＢ（元トロンボーン首席奏者　真弓基教氏）1 名、美唄市民吹奏楽団 19 名、美唄聖華高校吹奏楽部 10 名、美唄中学校吹奏楽部 19 名、東中学校吹奏楽部 20 名

札幌交響楽団 OB の真弓先生による呼吸法の指導

札幌交響楽団ＯＢの真弓先生によるグループレッスン

札幌国際大学の学生によるアドバイス

美唄市民吹奏楽団の石井先生による指導による指導

【合同演奏】

美唄市民文化祭・音楽祭で『美唄サテライト・キャンパスｗｉｔｈ札幌国際大学

◇日　　時　平成 26 年 11 月 9 日（日）9 時 30 分～16 時 40 分

◇時　　間　13 時 00 分～16 時 40 分（音楽祭）、16 時 15 分～16 時 40 分（出演時間）

◇場　　所　美唄市民会館「大ホール」

◇主　　催　美唄サテライト・キャンパス運営協議会

　　札幌国際大学短期大学部　河本洋一　教授

◇内　　容

『美唄市民文化祭・音楽祭』（最終演者）に『美唄サテライト・キャンパスｗｉｔｈ札幌国際大学』として出演。札幌国際大学シアターオーケストラの学生、河本教授、札幌交響楽団ＯＢの真弓先生、美唄市民吹奏楽団、美唄聖華高校吹奏楽部、美唄中学校吹奏楽部、東中学校吹奏楽部の総勢７７名により、「７６本のトロンボーン」「サンバベアー」「アフリカンシンフォニー」を演奏した。

【リハーサルと本番での合奏練習の様子】

◇効　果

本番当日の全体リハーサルで、初めての合同練習をおこなったが、前日の各パート練習も含め、楽器演奏を通じて参加団体間の交流や世代間の交流が深まるとともに、普段は行うことのない大人数での合同演奏により、吹奏楽の魅力を高めることができた。また、『美唄市民文化祭・音楽祭』に出演することにより、同音楽祭を盛大に盛り上げる内容の濃い出演で、市民等に音楽の魅力をより一層高めることができた。また、本学の学生にとっては、自分たちが主役ではなく「触媒」となって地域の音楽活動の活性化に貢献するという役割を体験したことは、社会に貢献する人材育成という観点から、極めて有益な教育効果をもたらした。

【出演者数】総勢 77 名　内訳：札幌国際大学シアターオーケストラの学生 7 名・河本教授・札幌交響楽団ＯＢ 1 名、美唄市民吹奏楽団 19 名、美唄聖華高校吹奏楽部 10 名、美唄中学校吹奏楽部 19 名、東中学校吹奏楽部 20 名

来場者数：240 名

(2)体験演奏会の取り組み:ふれあいコンサート

◇日時・場所

1日目　平成27年3月9日（月）　①アカシア幼稚園　10:00開演（45分間）

②美唄市児童館　15:00開演（1時間）

2日目　平成27年3月10日（火）③栄幼稚園　12:30開演（45分間）

◇主　催

美唄サテライト・キャンパス運営協議会

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科（河本洋一 教授・学生9名）

◇内　容

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科の学生による人気アニメソングや幼稚園等よく歌われている歌の音楽演奏と、簡単な楽器を使った子どもたちとの演奏を行う親子参加型のふれあいコンサートを開催する。

＜曲目＞

【①アカシア幼稚園】

1　春が来た（歌）　2　思い出のアルバム　3　おもちゃのチャチャチャ

4　演奏楽器の紹介　5　山の音楽家　6　Let it go

7　ようかい体操第一　8さんぽ

園児の前で子どもの歌の演奏する学生

演奏楽器の紹介。『バリトンサックス』について説明する学生

演奏楽器の紹介。『バリトンサックス』について説明する学生

【②美唄市児童館／③栄幼稚園】

1　春が来た（歌）　2　思い出のアルバム　3　さんぽ

4　演奏楽器の紹介　5　山の音楽家　6　おもちゃのチャチャチャ

7　Let it go　8　ようかい体操第一

◇効　果

園児や小学校低学年の児童に対し、本物の楽器を使った芸術鑑賞等の機会を創出することにより、音楽を愛する心を育て、豊かな情操を養う一助にすることができた。また、幼児教育を履修する学生たちに対し、卒業後の進路を視野に入れた生きた教育の場を提供することができた。また、本学の学生にとっても実習以外で子どもとふれあい、自らが役立つ体験を得る機会となり、導入教育としての可能性が示唆された。

◇参加者数（演奏者含む）

①アカシア幼稚園	園児・保護者等	約 110 名
②美唄市児童館	児童等	約 50 名
③栄幼稚園	園児・保護者等	約 60 名

◇市長への表敬訪問

日時　平成 27 年 3 月 10 日（火）　10 時 30 分～10 時 50 分

場所　美唄市役所 2 階「市長応接室」

第2節　平成26年度の取組の考察

美唄市との連携協定の中で実施された様々な事業は、本学にとっては地域貢献の一環として、美唄市としては、まちづくりの一環として二つの枠組みの中で一つの事業を実施している、いわば「融合事業」である。

「融合事業」とは、どちらか一方の事業に他者が連携・協力するという考え方ではなく、両者にとって利益があり、かつ両者が協働して取り組めるという状態を意味する。いわば互恵関係が成立している事業が、美唄サテライト・キャンパス協働事業と特別教育プロジェクト推進経費による「音楽交流」である。

これらの事業が本学と美唄市にとって互恵関係を築きながら発展していくためには、以下の点が今後の課題となった。

(1)経費負担の情報共有と見通しを持った互恵関係の確立

「音楽交流」は、美唄市と本学がそれぞれ予算を有し、その予算を互いに出し合う中で一つの事業が形成されている。しかしながら、平成 26 年度は経費の殆どを本学が負担しており、この経費が確保できなくなった場合は、現状の取り組みは不可能となることが懸念された。

したがって、美唄市と本学の両者にとって、経費負担の情報を共有することはもとより、このような事業展開をどのような目標で継続あるいは終了していくのかといった計画性のある展開が必要となった。

(2)効果測定の方法及び効果のエビデンスの明確化

美唄市は税金、本学も私学助成という公的資金で実施されているという性格上、美唄市民や学生にとってどのような効果があるか、また、その効果測定の方法やエビデンスは、市民や学生だけではなく、広く社会全体に発信されなければならないと考えられる。現在は、この点に関しては、ほぼ美唄市の担当者に依存しているというのが実状であるため、大学側としても研究教育機関としての地域貢献のポリシーを明確にし、適切な方法で効果測定及びその広報に務めていくことが必要となった。

(3)事業内容の教育課程への位置づけの検討

「音楽交流」は、多くの学生の参加があって成立している。これらの学生は、現在はサークル活動の一環として関わっているが、学生にとって自分たちが地域の担い手となり、地域を活性化するというフィールドワークとしても位置付けられる可能性がある。そして、「音楽交流」の事業に同行した美唄市の職員は、指導する教員と共に外部講師としての機能も果たしており、PBL (project based learning) 型のフィールドワークとしての位置付けも示唆された。

継続的な事業展開と双方のメリットを考えると、教育課程への位置付けは組織的な取組として位置づけるための工夫となり得る。

第3章　平成 27 年度の研究実績

第1節　体験型演奏会とワークショップ型演奏会の定型化

(1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」の実施

美唄市内の保育所と幼稚園を対象にした演奏会を想定した。本学シアターオーケストラの学生が企画運営し、学生が触媒となり、子どもたちの音楽活動を活性化させると共に、エビデンス測定のための基盤の整備を目的として計画された。また、実施先の教職員の皆様の声を聴取し、本格的なエビデンス測定のための基礎資料を収集することを目指した。

(2)ワークショップ型演奏会「美唄市民音楽祭」での合同演奏の実施

前年度に引き続き、平成 27 年度も市民音楽祭におけるワークショップ及び演奏会を計画した。ワークショップについては、地元のハイパー・アマチュアによる指導をコーディネートし、演奏会の指揮を地元の音楽家に委ねるような仕組みを作り、本学の学生が触媒となって地域の音楽文化や人材活用の活性化を図ることを目指した。

(3)美唄サテライト･キャンパス成果発表会における意見聴取の実施

美唄サテライト・キャンパス運営協議会の主催による、成果報告会に参加し、サテライト・キャンパス推進事業の一つである本研究の活動成果の発表を行い、参加者から広く意見を聴取することを目指した。

第2節　取組の実施日程

（１）体験型演奏会「ふれあいコンサート」

◇平成 27 年 8 月 10 日（月）

10：15～11：15　進徳保育園

15：15～16：15　茶志内双葉保育園

20：00～20：30　温泉宿泊施設　美唄ゆ～りん館

◇平成 27 年 8 月 11 日（火）

11：15～12：15　峰延保育所

15：00～16：00　アルテピアッツア美唄アートスペース

（２）ワークショップ型演奏会「美唄市民音楽祭」

◇平成27年11月７日（土）・８日（日）

美唄市立中央小学校（ワークショップ）、美唄市民会館大ホール（演奏会）

（３）成果発表及び意見聴取

◇平成28年1月23日（土）15：00～17：00

美唄市民会館大会議室

第3節　各取り組みの内容

(1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」

◇目的

これまでの従来型（派遣型・提案型）アウトリーチの音楽交流ではなく、官製興行化、効果測定不足、まちの政策との関連不足、コスト増大の４つの課題解決が見込まれる〈新型アウトリーチ〉を構築する。体験型演奏会「ふれあいコンサート」では、幼稚園・保育所等に音楽鑑賞などの芸術鑑賞の機会を創出することと、幼児教育を学ぶ学生の活動の場を確保することを目的に、札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科が中心となって、〈新型アウトリーチ〉の具体的な活動を企画する。

◇主催

札幌国際大学短期大学部、美唄市サテライト・キャンパス運営協議会

◇日時

【第1期】1泊2日

平成27年8月10日（月）

10：15～11：15　進徳保育園

15：15～16：15　茶志内双葉保育園

20：00～20：30　温泉宿泊施設　美唄ゆ～りん館

平成27年8月11日（火）

11：15～12：15　峰延保育所

15：00～16：00　アルテピアッツア美唄アートスペース

【第2期】2泊3日

平成28年2月15日（月）

10:30～11:10　認定こども園ひまわり

15:40～16:10　中央保育所

20:00～20:30　ゆ～りん館

平成28年2月16日（火）

10:30～11:10　めぐみ幼稚園

15:40～16:10　西保育所

20:00～20:30　ゆ～りん館

平成28年2月17日（水）

10:30～11:10　東保育所

◇概要

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科の学生を中心とするSIUシアターオーケストラのメンバー（10名程度）による人気アニメソングや幼稚園・保育所などでよく歌われている歌の演奏と、簡単な楽器を使った子どもたちとの演奏、楽器遊びなどを行うことを通じて、音・音楽によるコミュニケーションを図り、音楽活動の楽しいエピソードを形成する。

◇演奏曲

さんぽ、おもちゃのチャチャチャ、うみ、ミックスジュース、アイスクリーム、山の音楽家、おばけなんてないさ、しゃぼんだま

◇備考

アルテピアッツア美唄アートスペースは公開演奏とし、美唄市広報紙「メロディ」及び美唄市ホームページやサテライト・キャンパスのフェイスブックにて周知する。

①進徳保育園

本園は美唄市内の保育所統廃合に伴い、平成27年度をもって閉園する。子どもの人数は20名足らずの小規模保育施設である。演奏会場となった遊戯室は演奏する学生が収まりきらないほどの小さなステージで、子どもたちとの音楽交流を実施した。

◇当日の行程

8:25～ 9:00　札幌から美唄へ移動　スーパーカムイ５号

9:00～ 9:15　JR 美唄駅から美唄市借り上げバスで進徳保育園へ移動

9:15～10:15　会場準備

10:15～11:00　ふれあいコンサート

11:00～11:15　後片付け

11:15～11:40　昼食会場「しらかば茶屋」へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

平成 27 年度の研究経費の増額により、学生が使用する楽器の移動は軽貨物車に外部委託することとなった。したがって、学生は楽器を持たずに身ひとつでの移動が可能となったため、朝早くからの演奏が可能となった。

進徳保育園では、日頃から中学生のインターンシップによる訪問や、小編成の訪問演奏などを体験しており、外部からの訪問者に対しては比較的慣れた様子ではあった。しかしながら、初めは学生の問いかけに対する反応に躊躇する場面もあり、このことを想定していた幼児教育保育学科の学生が、アイスブレイク的な導入を図り、スムーズな展開を可能とした。

演奏曲はどれも子どもたちに馴染み深いものばかりで、歌ったり、身体を動かしたり、時にはペープサートにじっくりと見入りながら音楽だけが流れていくといった様々なかたちでの音楽とのふれあいが行われた。

また、保育園の先生たちは子どもに対して一方的な指示を与えることなく、子どもたちの興味関心を学生の司会者へと向けさせ、それを受けた司会者が子どもと対話していく形でコンサートが展開された。

②茶志内双葉保育園

本園は前述の進徳保育園よりもさらに小規模の保育所で、市内中心部の子どもたちよりも生演奏の音楽に触れる機会が少ない環境下にある。ただ、茶志内小学校と至近距離の立地にあるため、日頃から年長者との交流も多い。

◇当日の行程

12:40～12:50　茶志内小学校へ移動

※茶志内双葉保育園が午睡時間のため、音出し準備を小学校で実施。

12:50～14:55　茶志内小学校で音出し

14:55～15:15　移動

15:15～16:00　ふれあいコンサート

16:00～16:15　後片付け

16:15～16:40　宿泊先（ゆ～りん館）へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

前述の進徳保育園よりも小規模ながらも、演奏に対する反応は決して小さくなかった。また、子どもたちと共に、保育士の先生たちが一緒に声を出して歌ったり、一緒に身体を動かしたりする場面が見られた。このことは、演奏者側のアプローチだけではなく、子どもたちと共に鑑賞する身の回りの大人（保育士、幼稚園教諭、保護者など）の反応の重要性を示唆しており、今後のふれあいコンサートの展開において、重要なポイントを投げかけていると考えられる。

また、本園ではステージ設備がなかったため、同じフロアを共有しての展開となった。このことは二つの点において重要性をもっていると考えられる。１つめは、演奏者と子どもたちとの距離を縮め、移動をスムーズにすることができることである。これにより、演奏者が演奏しながら子どもたちの近くへ寄っていくことをよりスムーズに実現することが可能となる。２つめは、子どもたちが無理に上を向かなくても演奏者が見えるという点である。小学校などの学校教育施設では、体育館にステージが設置されていることが多く、どうしても目線が上に向きがちである。同じ高さの場合は、比較的目線が真横を向きやすく、子どもたちも安定した姿勢で鑑賞できる。

③峰延保育所

本保育所は、美唄市から岩見沢よりに約 10 キロほど離れた場所に位置している。中心部から離れていることもあり、本来は幼稚園に入園したかったものの、近所に幼稚園がないために保育園に来ているという子どももいるという地域性をもった保育所である。

◇当日の行程

10:00～10:30　宿泊先から峰延保育所へ移動

10:30～11:15　準備

11:15～12:00　ふれあいコンサート

12:00～12:15　後片付け

12:15～12:45　ゆ～りん館へ移動

12:45～13:30　昼食

◇ふれあいコンサートの様子

前述の２園よりも３歳未満児の比率が高く、音楽の演奏に対する反応が期待したものとなるか心配されたが、子どもの発達心理学的な見地からみると、３才児は音に対する反応が活発に現れる年齢であり、心配は杞憂で終わった。このことには、前述の茶志内双葉保育園と同様、周囲の保育士の支援が重要なポイントとなっていると考えられる。さらに、保護者の参観が多かったこともこれを後押ししていると考えられる。

このことは、その集団に属する子どもたちの性格や気質にも依るが、保育士が学生の問いかけに対して雰囲気を盛り上げるように反応したり、子どもたちをうまく乗せて、発言しやすい環境を形成していることが大きな要因として考えられる。

また、本保育所も茶志内双葉保育園と同様、ステージがないフラットな位置関係で演奏することができ、終了後は上記の写真にあるように、誰から勧められるともなく〈ハイタッチ〉で退場していくなど、終始、音楽を通した双方向のコミュニケーションが円滑に行われやすい環境下での演奏ができた。

④認定こども園ひまわり

本園は旧三井美唄炭鉱の下に広がる南美唄地区にあった保育所を改組転換し、認定こども園として再スタートした園である。市内中心部から３キロほど南に位置し、地域の保育の拠点として子育て支援機能を有する施設として稼働している。（写真不掲載）

◇当日の行程

9:00～ 9:35　札幌から美唄へスーパーカムイ７号で移動

9:45～10:00　JR 美唄駅より公用車で移動

10:00～10:30　準備

10:30～11:10　ふれあいコンサート

11:10～11:30　後片付け

11:30～11:55　移動（ゆ～りん館）

11:55～13:00　昼食

◇ふれあいコンサートの様子

これまで訪問してきた保育所で確認できた点が追認される結果となった。

１つめは、ステージの有無で子どもたちの反応の傾向が異なるという点である。本園での演奏はステージに上がってだった。すると、以前の訪問先で示唆された「子どもたちの動線の自由さ」「子どもたちの目線のフラット化」という点において、やはり動線が小さくなったり、目線が上方向のため後ろの方に座っている子どもたちが見づらくなったりする傾向が見られた。

２つめは、保育者の先生たちの関わり方によって、子どもたちの反応が異なるという点である。本園は比較的子どもたちの反応が小さかった。これは、ステージと客席という一線を画した位置関係の維持に努めようとする先生たちの動きに影響を受けていると考えられる。勿論、子どもたちの性格や気質も要因として考えられるが、もし音楽を「黙って静かに聴きましょう」といった規範的な面だけで捉えていたとするならば、本研究が目指しているふれあいコンサートの趣旨は半減することが予想される。

子どもたちは、自主的に聞こうとすると結果として静かになるし、積極的参加して音楽に入り込もうとすると、当然身体が動いたり歌が出てきたりする。このような自然で主体的な音楽活動をうまく引き出しつつ、単なる規範的な面だけを取り上げることにならないための重要なポイントを本園の子どもたちは示してくれたと言えよう。

⑤中央保育所

前述の進徳保育園と同様、平成 27 年度末をもって統廃合による閉所が決定している中央保育所は、開所以来 46 年間同じ園舎を使用していたこともあり、至るところに時代を感じさせる様子を感じ取れる。ちょうど、閉園行事の直前ということもあり、卒園を控えた子どもたちにとっては、思い出作りの一環としても位置づけられていた。

◇当日の行程

13:00～14:55　自由時間　※午睡時間にかかるため長めの休憩時間

14:55～15:15　中央保育所へ移動

15:15～15:40　準備

15:40～16:10　ふれあいコンサート

16:10～16:30　後片付け

16:30～16:50　宿泊先（ゆ～りん館）へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

美唄市の中心部に位置する中央保育所は、地域の高齢化と過疎化により子どもの人数が激減し、かつ風邪が流行っていた時期と重なったため、参加した子ども数は20名足らずであった。演奏者はステージに上がったが、司会者は子どもたちと同じフロアに降り、子どもたちとの距離を縮めようと努力した。また、全員ござの上に座っての鑑賞だったため、自由に足を動かすことが難しく、音楽に合わせて自由に身体を動かせるような演奏の時には、子どもたちを立ち上がらせるなどの工夫をした。

この回になると、学生たちも子どもたちとのコミュニケーションに慣れ始め、保育士の先生たちが何もしなくても、学生たちがうまく子どもたちを音楽の世界に引き込み、集中して聴いたり、積極的に歌ったりといった子どもたちの自主的な音楽活動を引き出すことができるようになった。

：

⑥美唄めぐみ幼稚園

美唄市内に位置する私立幼稚園２園のうちの一つが「美唄めぐみ幼稚園」である。昨年度訪問した「美唄アカシヤ幼稚園」と共に、美唄市の幼児教育を私学の面から支えてきた園である。園舎は新しく、音がよく響く講堂での演奏となった。

◇当日の行程

9:40～10:00　移動

10:00～10:30　準備

10:30～11:10　ふれあいコンサート

11:10～11:30　後片付け

11:30～11:50　移動（ゆ～りん館へ）

11:50～13:00　昼食

◇ふれあいコンサートの様子

今年度初めての幼稚園での演奏である。年齢構成が保育園と異なることから、子どもたちからは明確な反応が多く返ってきた。また、先生たちからの言葉による指示が多く見られた。園によって様々な教育理念や教育目標があり、音楽活動の位置づけも様々である。学生の発案により、本園では初の試みとして、子どもたちが手作りの楽器（ペットボトル）によって演奏に参加することに挑戦した。この試みは、子どもたちとの音によるコミュニケーションを図るための方策として考えだされた。子どもたちは音楽（おもちゃのチャチャチャ）に合わせて手作り楽器を鳴ら

したが、子どもの人数分の楽器が用意できなかったり、合わせて演奏するのが1曲で物足りなさを感じたりしている様子が伺えた。

一方、本園でもステージと客席の境目がないフラットな位置関係で演奏したが、やはりこの位置関係の方が子どもたちが動きやすいのではないかと考えられる。さらに、本園では子どもたちが全員椅子に座って鑑賞しており、状況に応じて直ぐに立ったり座ったりできることも、音楽の特性を活かした活動に寄与するものと考えられる。

なお、本園での演奏は音がよく響く講堂での演奏であった。全てが管楽器で構成される演奏であるため、当初は響き過ぎにより音量が大きすぎるのではないかという問題が懸念されたが、10名前後の演奏者による演奏ではその問題が生じることが殆ど無く、演奏する学生も子どもたちも快適に音楽を楽しめたと考えられる。

⑦西保育所

本保育所も平成27年度末をもって統廃合による閉所となる保育所である。これまで訪問してきた保育所の中では唯一、全ての子どもが椅子に座って鑑賞するというスタイルの演奏ができた。子どもの人数は最も少なく、14名であった。

◇当日の行程

13:00～14:55　自由時間　※午睡時間にかかるため長めの休憩時間

14:55～15:15　西保育所へ移動

15:15～15:40　準備

15:40～16:10　ふれあいコンサート

16:10～16:30　後片付け

16:30～16:50　宿泊先（ゆ～りん館）へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

最も小規模な演奏環境であること、また子どもの人数が14名と最も少ないという条件であることから、当初は子どもたちと音楽を通してうまく交流ができるかどうか心配されたが、司会者の学生の手腕と、会場に合わせた演奏により問題なく終了できた。

まず、司会者の学生は、マイクロフォンを使って拡声することなく、会場の広さに合わせた声の大きさまた、子どもたちに語りかけるような口調を心がけた。このことは楽器の音量にも通じる大切なことであり、会場の広さや音の響き具合に合わせた音の調整は、子どもたちの音楽への関心や司会者への集中度へと直結すると考えられる。

「叫ばない」「怒鳴らない」「張り上げない」という司会者の学生の声の使い方は、保育士の先生たちからの絶賛されるほど素晴らしい使い方であり、音・音楽による交流を趣旨としている本研究に於いて再認識されるべき点であった。

また、写真からもわかるように演奏する学生と子どもたちの距離は、すぐ手の届くような位置関係にあり、また全員が椅子に座っていることから手足を動かしやすく、一体感を感じながら音楽交流ができるという環境が整っていた。楽器の音量さえ問題にならなければ、このような環境での音楽交流は、小規模園ならではの交流の方法として大切にしていく必要があろう。

⑧東保育所

本保育所も平成27年度末をもって統廃合による閉所となる保育所である。演奏環境は、前述の西保育所とは異なり、演奏者と子どもたちの距離があり天井も高く、比較的大音量であってもうるさくならない環境である。

◇当日の行程

9:50～10:00　東保育所へ移動

10:00～10:30　準備

10:30～11:10　ふれあいコンサート

11:10～11:30　後片付け

11:30～11:50　JR 美唄駅へ移動

◇ふれあいコンサートの様子

本保育所の訪問をもって、美唄市内の全ての幼稚園と保育所を訪問したことになる。ふれあいコンサートは、子どもたちに音楽の楽しさ素晴らしさを一方的に伝えようとするのでなく、音・音楽を通したコミュニケーションを重視することを大切にしてきた。このことは、次年度統廃合で新しく生まれる「ピパの子保育園」での演奏を視野に入れての取組である。

本保育所でも他の演奏と同様にアイスブレイク的な司会の学生の一言から始まり、参加型の演奏、ペープサートを使った付随音楽的な演奏、身体を動かす音楽あそび的な演奏と、多岐多様な演奏を盛り込んで実施した。環境が毎回異なるものの、回を重ねる毎に学生の司会や演奏での働きかけに余裕が生まれ、子どもたちの様子に合わせたアプローチができるようになってきた。これは、〈新型アウトリーチ〉の実践の副産物であるが、子どもたちだけでなく「触媒」となった学生たちも成長できるという互恵関係が認められたという点で、継続的事業化の可能性が示唆されると言える。

(2)ワークショップ型演奏会「美唄市民文化祭音楽祭」

美唄市民文化祭音楽祭（以下、市民音楽祭）は、美唄市が炭鉱町として栄えていた頃から続いている、平成27年で63回を迎える伝統行事の一つである。演奏される音楽のジャンルは邦楽から洋楽、クラシックギターや合唱、吹奏楽に至るまで幅広く、ジャンルを超えた様々な演奏が行われている。

しかしながら、自分の関係者の演奏を聴いたら直ぐに帰ってしまうという観客が後を絶たず、主催者や教育委員会の関係者からは、音楽祭の最後を締めくくるような演奏が必要という指摘がなされていた。

そこで、昨年度（平成26年度）より、市民音楽祭の最後を締めくくるステージとして、小学生、中学生、高校生、一般成人による合同演奏を本学の学生や札幌交響楽団OBなどが触媒役となって構築し、観客が最後まで残り拍手を送るという新たな流れが生まれた。今年度はその2回目の取組となる。

◇参加団体

美唄市民吹奏楽団、Pipa!トロンボーンアンサンブル、美唄尚栄高等学校吹奏楽部、美唄中学校吹奏楽部、美唄東中学校吹奏楽部、中央小学校スクールバンド、SIUシアターオーケストラの計7団体総勢96名

◇指揮・全体指導

石井邦紀氏（美唄市民吹奏楽団常任指揮者）

◇演奏曲

マーチブルースカイ（高木登古）、陽はまた登る（スパーク）、祝典行進曲（團伊玖磨）、希空（澤野弘之）

◇日程

平成27年11月7日（土）

9：10　美中　楽器等搬出

9：25　中央小　楽器等搬入、搬出

9：50　市民会館大ホール　楽器等搬入、国際大学学生合流

（10：20）集合時間　　木管グループ　中央小

　　金管グループ　市民会館大ホール

10：30　　練習開始

12：00頃　　金管グループ　中央小へ移動

12：15　昼食　中央小　　体育館、家庭科室、図書室

13：00　市民会館大ホールへ移動

13：15　場所決め

　　全体練習開始　　市民会館大ホール

15：30　全体練習終了・後片付け

平成27年11月8日（日）

（9：20）集合時間　（中央小児童以外）　　市民会館大ホール

9：30　準備音だし

10：00　リハーサル

11：30　控え室（大会議室）へ移動

11：30～12：30　昼食　　各自

13：00　音楽祭開始

（14：50）集合　市民会館大会議室

15：00～15：40　音だし　準備　大会議室　出場準備　中央小児童合流

16：05～16：15　準備

16：15～16：30　演奏会

16：30～17：00　後片付け

17：30 頃　中央小　楽器等搬入

17：45 頃　美中　　楽器等搬入

◇ワークショップ及び合同演奏の様子

昨年度（平成 26 年度）、本学からの呼びかけによって始まったこの合同演奏は、年齢構成、活動場所、活動時間がそれぞれ異なることから、それぞれの団体の意思疎通をいかに効果的に形成していくかが当初からの課題であった。

そこで、今年度は各団体の代表者の打ち合わせ会議に加え、メーリングリストを活用しての情報共有が行われた。また、昨年度は各楽器ごとにレッスンを兼ねてパート練習を実施したが、楽器によって内容に違いがあり過ぎる、楽器によっては指導者を確保できないなどの問題点が指摘されたため、今年度は、合奏を念頭に置いた木管楽器、金管・打楽器という大きな二つの括りでワークショップを実施することになった。

また、今回の指揮者は、〈新型アウトリーチ〉の定義に掲げた「イ：美唄地域のハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。」という観点から、美唄市民吹奏楽団の常任指揮者である石井邦紀氏に依頼することになった。また、1 日目の木管楽器と金管・打楽器の分奏の指導者として、木管楽器は、昨年度の合同演奏の指揮者を務めた美唄中学校の橋本均氏に指導を依頼し、金管・打楽器は今回の指揮者である石井邦紀氏が務めた。

1 日目の午前中に分奏を終えた参加者は、午後から全体合奏の練習に参加した。事前に楽譜が配布され演奏するパートも確定したうえでの練習参加ではあったが、日頃からコミュニケーションを取り慣れている指導者以外の指揮で演奏することは、アマチュアにとっては難しく、最初は指揮の見方がわかりづらい様子が伺えた。また、指揮者が要求する音がどのような音であるかについても、日頃から慣れている伝え方ではないため、なかなか指揮者の要求に応えられない様子も見られた。

しかし、見慣れていない指揮と初めて演奏する演奏仲間であるからこそ、短時間でいかにコミュニケーションを図るかということをお互いに意識する結果となり、僅か数時間の合同合奏練習とは思えないほどの緻密で迫力のある演奏が展開された。

また、小学生にとっては経験豊富な大人が演奏する中で演奏する機会は皆無に等しく、音楽を通した異年齢交流が図られ、演奏面での刺激も大きかったとする顧問からの感想も寄せられた。

一方で、合同演奏ならではの苦労もあった。例えば、大型の楽器の準備はどの団体がするのか、児童生徒の引率の仕方、総勢96名という演奏者の待機場所や楽器の配置、舞台転換等々、大人数でしかも複数団体によって構成される運営面での難しさは、今年度も散見された。

しかしながら、演奏終了後の客席からの大きな拍手、大人数の演奏の楽しさ、異年齢交流の楽しさ等、この合同演奏でしか得られないメリットは大きく、運営面の難しさがあったとしても、次年度以降も継続したいという意志が団体間で確認された。

札幌交響楽団OBや札幌国際大学の学生が「触媒役」となって始まったこの合同演奏は、地元住民が音楽活動の主役であることを再認識させる〈新型アウトリーチ〉の一つのスタイルとして、平成27年度も終了した。

(3)成果発表及び意見聴取

本研究による種々の取組は、美唄サテライト・キャンパスとの協働事業の一つとして位置づけられており、本学と美唄市との互恵関係を約束した連携協定の下で展開されている。その成果は、毎年度「美唄サテライト・キャンパス成果発表会」で広く市民及び大学関係者に公開されている。

①美唄サテライト・キャンパス成果発表会

◇日時

平成28年1月23日（土）15：00～17：30

◇場所

美唄市民会館大会議室

◇参加団体

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

学長　越塚　宗孝

短期大学部　幼児教育保育学科長　教授　河本　洋一

スポーツ人間学部長　教授　国田　賢治

札幌大学

副学長　本間　雅美

札幌大谷大学

学長　巌城　孝憲

芸術学部長　教授　森田　克己

社会学部長　教授　平岡　祥孝

◇成果発表の概要

13 講座、参加人数延べ 222 名にのぼる「美唄サテライト・キャンパス」は、美唄サテライト・キャンパス運営協議会（会長：髙橋幹夫市長　副会長：岸本邦宏美唄商工会議所会頭・早瀬公平美唄市教育長）によって運営されており、年度ごとにその取組成果を発表し、広く市民や大学関係者から意見を聴取している。

本研究『音楽交流による地域づくり～美唄市における試み～』は、美唄サテライト・キャンパスにおける「地域と大学の連携による協働事業」の一つとして位置づけられており、主に「市内の小中学生などが専門的な技術指導や本物の美術作品に触れ、また、市内の音楽団体や小中高校生と大学生との音楽交流により、技術の向上や今後の音楽活動の大きな支援」（７．付録資料参照）として美唄市民に認識されている。

一方、本学としては、地域連携協定に基づく研究フィールドとして美唄市を捉えており、美唄市と本学の相互にメリットがある互恵関係の下で事業が展開されている。音楽交流によるまちづくりへの貢献以外には、札幌国際大学卓球部によるレッスンや交流試合、札幌大谷大学によるアートキャラバン、札幌大学による出前授業などがある。

さて、成果発表会では、本取組を担当した河本洋一から、『アウトリーチの現状と課題』と称して成果報告が行われた。（７．付録資料参照）この中で河本は、これまでのアウトリーチの主流は、「派遣・提供型」であったことを指摘し、その問題点として、「官製興行化」「エビデンス（効果）測定不足」「他の政策領域との関連不足」「人材を招くコストの増大」を指摘した。これらの指摘は、財団法人地域創造によって、平成 22 年 3 月に報告があった『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書』に基づいた指摘である。

そこで河本は、これらの問題を解決する鍵は、〈ハイパー・アマチュア〉の活用にあると提言した。〈ハイパー・アマチュア〉とは、プロと一般住民との間に位置する、プロではないが高度な芸術性をもった人々のことを指すと定義している。そして、これらの人々は、活動することそのものに喜びを感じ、発表する場を必要としているが、活動することを生業とはしていないと述

べた。そして、アウトリーチを、「派遣・提供型」から「人の仕組み構築型」へと転換する必要があることを強調した。

続いて河本は、従来のアウトリーチに代わる考え方として、〈新型アウトリーチ〉を提唱した。〈新型アウトリーチ〉の条件としては、「プロよりもハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐイニシエーター（活性化させる人材）を育成すること。」「実施後の効果測定の項目や方法が予め設定されており、エビデンスの明確化の仕組みがあること。」「提供だけでなく、提供を通してまちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定されていること。」「コスト削減とハイパー・アマチュアの演奏機会の増大の二つの課題を一気に解消する場を設定すること。」という 4 つの条件を提示した。

これら上記 4 つの条件を満たす事業を社会実験する場として、連携協定が結ばれている美唄市を選定し、体験型演奏会のふれあいコンサートやワークショップ型演奏会の市民音楽祭の合同演奏が実施された。そして、今後のキーポイントとして、〈イニシエーター〉（活性化させる人材）の育成を挙げ、今後は「キャンプ（演奏者間の音楽交流）」「デリバリー（演奏会の主催または指導によるイニシエーター養成）」「ワークショップ（参加型演奏会）」を実施し、期待される効果の事前明示、参加者や観客への意識調査や追跡調査による効果測定をする計画であることが発表された。

特に、美唄市内の幼稚園・保育所の全てを訪問演奏で巡回できたことは、追跡調査の実施基盤として大きな価値があり、今後展開が予想される音楽活動の発展性への寄与が期待された。

また河本は、効果測定の一つの指標として費用対効果を指摘した。音楽文化の普及啓発のために無料で演奏会が開催されることがあるが、アマチュアであろうとプロであろうと、必ず経費が発生しており、その経費を正しく認識すること無くして活動の発展性や永続性は考えられないという指摘である。

最後に、合同演奏に参加した小学校のスクールバンドの顧問菅谷先生から、「子どもたちが大きな刺激を受けている。是非、本校の演奏会に賛助出演してくれる方を募集したい。」という声があったことが紹介された。これについて河本は、「演奏会の観客のみなさんは、演奏という結果のみしか共有できない。これはこれで素晴らしい体験なのですが、演奏者の皆さんはその音楽を創り上げていく過程も共有している。この過程にこそ音楽を愛好する心情を育てていくという機会が隠されている。」と述べた。そして、部活動で音楽活動をしている子どもたちが、卒業後はその音楽活動を捨ててしまうという残念な現実と絡め、「異年齢間での音楽交流は、音楽を通したコミュニティの形成に効果的であり、音楽活動が部活動という場だけの出来事ではなく、一生の活動としてその人の人生を潤してくれる。」という言葉で成果発表を締めくくった。

この発表に対して参加者からは、「次代を担う若者や地域で活動する市民活動団体等が、地元でこうした経験ができることにより、美唄に愛着を持つ契機となり、市民との協働によるまちづくりを進めることができると考えています。」「大学及び学生に多様な形での実践的な教育活動の場を提供できたものと考えています。」「今後とも小中学生や高校生、市民活動団体等との協働による事業展開を進めていくとともに、高齢者や地域住民との協働による事業を展開していきたいと考えています。」（美唄サテライト・キャンパス運営協議会総会資料より）という発言が寄せられた。

なお、この成果発表会は、ふれあいコンサートの第２期が完了する前に開催されたため、成果発表の内容にふれあいコンサートに関するものが全く含まれていないという不完全な形での発表となった。したがって、ふれあいコンサートに関する一般市民からの意見聴取は行われなかった。

第4節　平成27年度の取組の考察

平成 27 年度の研究目標は、「市内の保育所と幼稚園での体験型演奏会の実施によるデータ抽出」であった。この目標に基づき美唄市内の保育所と幼稚園全園をふれあいコンサートで巡り、演奏を通じて先生方や子どもたちの生の声に触れることができた。しかし、第２期の実施日程が２月であった関係上、その成果を「美唄サテライト・キャンパス成果発表会（１月２３日）」で報告することができず、報告できたのはワークショップ型演奏会のみという不完全な結果報告に終わってしまった。

このことは、仮説→実践→検証→報告という研究の流れに不足を生じることから、平成 28 年度において早急に改善しなければならない。この改善点を念頭に置いた上で、それぞれの取組から読み取れる成果や今後の課題について整理しておきたい。

(1) 体験型演奏会「ふれあいコンサート」

①市内の全保育所･幼稚園の訪問完了で今後の聞き取り調査の基盤が確立

平成 27 年度をもって美唄市内の全ての保育所と幼稚園の訪問演奏を完了した。このことは、参加した子どもたちが、ふれあいコンサートという共通する音楽体験を経験したという意味に於いて、今後の追跡調査の基盤へと発展させられる可能性を作り上げたと言える。また、平成 28 年度には市内中心部の保育所が統合され「ピパの子保育園」として再スタートすることから、この新

設保育園で改めて、ふれあいコンサートを実施することで、子どもたちがこのコンサートをどのように捉え、どのような効果をもたらしたのかを検証することができると考えられる。

また、平成27年度までのふれあいコンサートに子どもたちと共に参加した保育士の先生方も1箇所に集まるため、これまでのコンサートとの比較や子どもたちの様子の変化、今後の課題などについて、効果的な聞き取り調査をすることが可能となることが予想される。

②ふれあいコンサートの方向性の明確化とそのための人的物的環境の構成の検討が急務

一方、平成27年度の訪問先では、①子どもたちと関わる先生方の様子、②演奏する物理的環境の２つについて、事象から示唆される点があることがわかった。

まず、子どもたちと関わる先生方について、「静かに聞きましょう。」「お行儀よくしましょう。」などのような規範的な指示を中心とする言葉がけしかない場合と、子どもの反応に同調して、それをさらに強化していくような言葉がけをする場合とでは、コンサートの導入部に於いて明らかな差が生じていた。規範的な指示による言葉がけがあった集団では、確かに子どもたちは静かにしているのだが、司会者の学生の言葉がけに対する反応が鈍かった。一方、子どもの反応に同調し強化していくような言葉がけがあった集団では、司会者の学生の言葉がけには、最初から元気な反応が返ってきた。このことは、その環境下で最も身近な存在の人の言葉がけによって導入部の準備性ができ上がっていくことを示唆していると考えられる。

次に、演奏する物理的環境については、ステージの有無、天井の高さ、演奏する部屋の面積、演奏者と子どもたちの距離、座り方（椅子からゴザか）、マイクロフォンの使用の有無などが環境構成として挙げられる。

今回のコンサートを通じて確認できたことは、下記のとおりである。

ア：ステージは必ずしも必要ではなく、できるだけ子どもたちと同じ目線に立てるフラットな位置関係の方がよい。

イ：すぐ自由に動けるためには、ゴザよりも椅子席の方がよい。

ウ：マイクロフォンは無理に使う必要はない。肉声のほうが効果的な場合もある。

エ：天井の高さや部屋の面積により演奏者と子どもたちとの距離感が決定されるため、あまり広すぎると一体感が乏しくなる。

これらア～エの指摘は、その音楽活動の目的が何であるかによって、その意味が変わってくる。この指摘は先述の言葉がけに関する指摘と相俟って、体験型演奏会が目指すべき方向性を改めて明確にした上で、再検討されるべき事案である。なぜなら、演奏者と子ども（聴衆）の間を明確

に区別する関係性を求めるならば、規範的な言葉がけも有効であるし、物理的環境の構成要因も天井が高く広々とした空間が必要となる場合もあるからである。

このように体験型演奏会が目指すべき方向性については、本研究に於いて予め明示されずに事業が展開されてきた。この点について明確化することが、ふれあいコンサートという仕組みが新型アウトリーチの中でどのような効果をもたらすのかというエビデンス測定のために必要急務である。

そこで、学生が〈触媒役〉となり、子どもたちの音楽活動を活性化させるという当初の趣旨はそのまま、その趣旨の具体的な姿として、どのようなふれあいコンサートを目指すのかについて、平成 28 年度当初に定義付けすることとしたい。

(2)ワークショップ型演奏会「美唄市民音楽祭」

①〈ワークショップ型演奏会〉がもたらした〈誇り〉と〈喜び〉

平成 26 年度に引き続き、平成 27 年度も市民音楽祭におけるワークショップ及び演奏会を実施した。ここで改めて本研究における〈ワークショップ型演奏会〉の定義について確認しておきたい。

一般的にワークショップとは、仕事場や作業場を示す言葉であるが、体験型の講演会といった意味ももっており、参加者が見たり聞いたりするだけでなく、実際に具体的な行動を体験し、五感全体を通して理解を深めるという形態を示す意味でも用いられている。

本研究では、「美唄地域のハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。」（新型アウトリーチの定義「イ」より）ことを目指しており、地元のハイパー・アマチュアによる指導と共に、彼らと共に演奏することまでを含めた演奏会を〈ワークショップ型演奏会〉と称している。

平成 26 年度は、「地域外の人材（札響 OB やセミプロ等、本学学生）による様々な活動がいわば〈触媒〉となって、地域住民の芸術文化活動を活性化させる。（新型アウトリーチの定義「ア」より）という定義に基づき、札幌交響楽団の元首席トロンボーン奏者真弓基教氏を招き、主にトロンボーンの基本的な演奏法に関するワークショップを実施した。また、その他の楽器については、札幌国際大学の学生が中心となって合同演奏の曲の練習を進めた。真弓氏のワークショップは本格的な指導を受けられたということもあり好評だったが、その他のパートの練習は学生がうまく練習を進行できず、必ずしも効果的な練習が行われたわけではなかった。

そこで、平成 27 年度は無理にパート練習を実施するのではなく、分奏（木管楽器、金管・打楽器という大きな括り）で練習を進め、真弓氏が前年度担った役割を地元のハイパー・アマチュアの方々に引き継いでもらい、ワークショップを実施するという形態に変更した。パート練習が無

くなるため、演奏する曲の楽譜は早めに配布し、事前に譜読みを済ませた状態で分奏するように徹底した。また、正指揮者の石井氏と副指揮者の橋本氏の間で事前に綿密な打ち合わせを行ってもらい、どのような演奏へ仕上げていくかを事前に共通理解した上で練習が進められた。

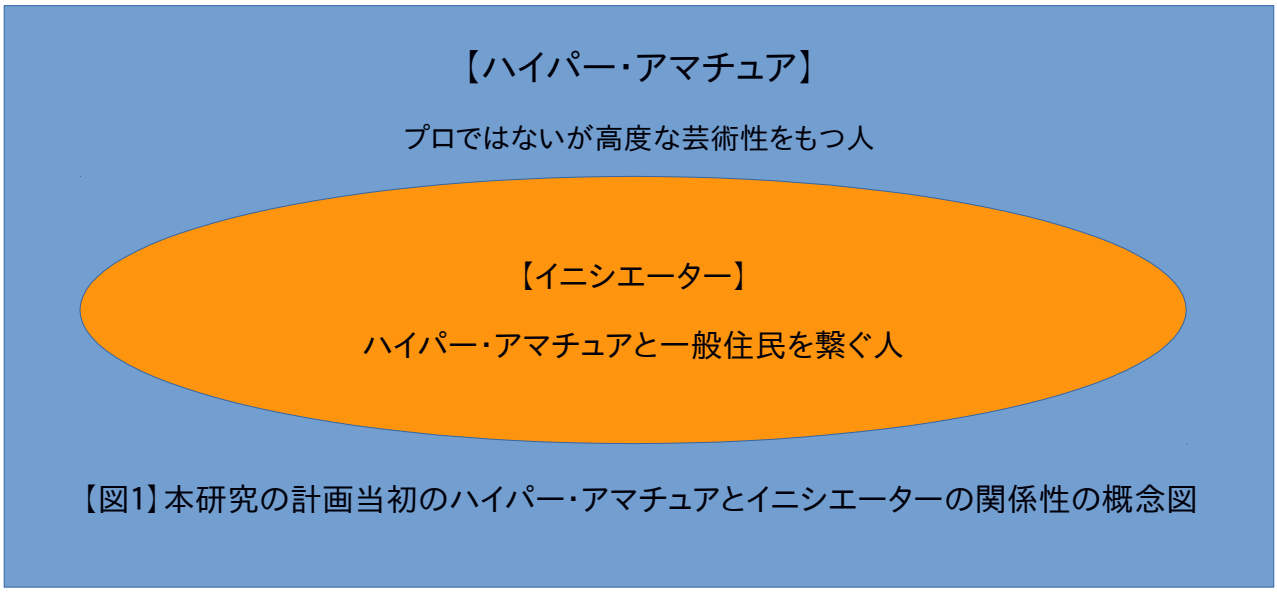
このような合同演奏は、郡部地域を抱える地区の高等学校文化連盟の音楽発表会などで見られる形態である。日頃は小編成でしか演奏することができない高校にとっては大編成での演奏を体験することができ、また、いつもとは違う指導者での演奏は、音楽の新たな演奏経験として生徒たちの糧となる。美唄市民音楽祭での合同演奏も、美唄東中学校や美唄尚栄高等学校にとっては、日頃は体験できない大編成での演奏する機会となると共に、美唄中央小学校の児童にとっては、自分たちよりも経験豊富な人たちと共に演奏する機会となる。さらに、子どもから大人までが一つの音楽体験を共有することで、美唄市民が世代を超えて一体感を得ることができ、観客も普段は聴く機会がない地元住民だけによる大編成の演奏を体験することで、自分たちの町の誇りや喜びに繋がるといった効果も期待できる。

この〈誇り〉や〈喜び〉は、「美唄でもこんなに迫力のある演奏ができるなんて、感動でした。」「美唄も捨ててもんじゃない。」といった来場者からのアンケート結果からも裏付けられる。音楽の演奏は、演奏する人だけでなく、それを聴いている観客も様々な感情を得ることができる。さらに、その体験をする時間を共有することから、スポーツ観戦などと同様に強い一体感を与えることができる。特に、音楽体験は言葉やメロディに乗せた様々な抽象的なメッセージ性をもっている点で、スポーツよりもより多様な感情や一体感を生むことが可能である。

このような音楽体験がもたらす効果を、地元のハイパー・アマチュアが中心となって引き出している点が、平成 27 年度の特筆すべき点である。つまり、〈新型アウトリーチ〉が目指している、「美唄地域のハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。」という定義を具現化するものとして、ワークショップ型演奏会としの合同演奏が、そのねらいどおりに行われたと考えられるということである。

②〈ハイパー・アマチュア〉と〈イニシエーター〉の関係性の再定義の必要性

ところで、この取組を通じて、新たな課題も発見された。それは、〈ハイパー・アマチュア〉と〈イニシエーター〉の概念の再検討の必要性である。（下図参照）　本研究では、〈ハイパー・アマチュア〉を、「プロと一般住民の間に位置する、プロではないが高度な芸術性をもった人々を意味する。これらの人々は、活動することそのものに喜びを感じ、発表する場を必要としているが、活動することを生業とはしていない。」と定義してきた。この定義に基づく具体的な例としては、音楽の演奏について、専門家の指導を受けてきた音楽系大学等の卒業生、または、



【図1】本研究の計画当初のハイパー・アマチュアとイニシエーターの関係性の概念図

これに匹敵するような専門知識と技術をもった演奏家を想定している。例えば、地元の音楽教室や学校の音楽の先生、音大卒業生や楽器の経験年数が長い成人などがこれに該当する。

このような〈ハイパー・アマチュア〉は、過疎化が進む町の中にも少なからず存在し、そのような人々の中から〈イニシエーター〉が出現し、音楽文化の振興を通じて地域の活性化に貢献できるような仕組みづくりができるであろうと本研究では仮定していた。つまり、地元の演奏家の中から〈イニシエーター〉を育てようとする考え方である。

しかしながら、〈イニシエーター〉は必ずしも演奏家である必要はないのではないか、ということが本取組で示唆された。それは、美唄サテライト・キャンパス運営協議会が用意した合同演奏の分奏と本番の間の昼食から読み取ることができる。

平成 27 年度より美唄サテライト・キャンパスの協働事業である〈ワークショップ型演奏会〉に事業費が計上されたこともあり、合同演奏に参加する市民や大学生には、地元名産の〈美唄とりめし〉が振る舞われた。この昼食は地元の農家らが経営する〈美唄とりめし〉のデリバリーサービスで、炊き出しなどで使用される大きな釜いっぱいに〈美唄とりめし〉が炊きあがった状態で運ばれくるというものである。

日本では、「同じ釜の飯を食う」という諺がある。演奏のワークショップだけでなく、食事を共にすることは、参加者の気持ちを繋ぐことに貢献し、演奏面以外での一体感を高めるだけでなく、味覚が伴う演奏体験として参加者の脳裏に刻まれる。

このような音楽プラス α の体験によって地元の音楽愛好家らを繋ぎ合わせることは、演奏家以外の立場の人であっても〈イニシエーター〉になり得ることを示していると言えよう。

そこで、本研究の計画当初の〈ハイパー・アマチュア〉と〈イニシエーター〉の関係性の概念については、演奏家である〈ハイパー・アマチュア〉から〈イニシエーター〉を養成するというのではなく、〈ハイパー・アマチュア〉をコーディネートし、地元の音楽家や観客の繋がりを深める仕組みを提供する存在として、再定義することが必要であるとの考えに達した。（下図参照）

この考え方に従うと、〈イニシエーター〉は様々な立場や職種の人が担うことができることがわかる。例えば、今回のような食事を提供できる人は、〈ハイパー・アマチュア〉を食を通じて繋ぐことができる。また、空室や空き地といったいわゆる〈空き資源〉を提供できる人は、演奏活動をできる空間を通じて〈ハイパー・アマチュア〉を繋ぐことができる。

このように〈ハイパー・アマチュア〉の人々を繋ぐことによって、高度な芸術性をもつ人々の様々な交流が生まれ、そこにさらに若いアマチュアや一般市民が参加する仕組みが生まれることが期待できる。

偶発的な発見ではあったが、〈イニシエーター〉が〈ハイパー・アマチュア〉ではなく食事の提供者といった立場の人々でも可能であることを発見できたことは、一見すると関係性が薄いアマチュアの音楽活動と観光資源を関連付けた取組の必要性を示していると考えられる。

第3節　今後の課題

本研究は〈新型アウトリーチ〉による地域づくりのモデル化の研究である。改めて〈新型アウトリーチ〉の定義を確認してみよう。

【ア】地域外の人材（札響OBやセミプロ等、本学学生）による様々な活動がいわば〈触媒〉となって、地域住民の芸術文化活動を活性化させる。

【イ】美唄地のハイパー・アマチュアと一般住民を繋ぐことで、その地域で中心となって活躍するイニシエーター（地域を活性化させる人材）を育成する。

【ウ】実施後の効果測定の項目や方法が予め設定されており、エビデンスの明確化の仕組みがある。

【エ】提供だけでなく、提供を通してまちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定されている。

【オ】コスト削減とハイパー・アマチュアの演奏機会の増大の二つの課題を一気に解消する場を設定する。

定義「ア」と「イ」に関しては、既に具体的な事業化がおこなわれており、様々な効果を確認できている。しかし、「ウ」「エ」「オ」に関しては、まだ具体的な研究計画が示されておらず、次年度（平成28年度）はこれらの定義に基づく取組について明示しなければならない。

(1)まちづくりへの寄与の具体的設定と効果測定の方法の確立

定義「ウ」と「エ」は対を成す定義であり、まちづくりの何に寄与できるかが具体的に想定（定義：エ）された上で、それを裏付ける項目や効果測定の方法を設定（定義：ウ）しなければならない。つまり、それぞれの取組はこれらの定義を上位概念として設計されなければならないということである。

まちづくりの何に寄与するのかに関する具体的な内容は、美唄サテライト・キャンパス運営協議会の成果発表会でもたびたび議論されてきているが、美唄市のまちづくりとの関連性については、美唄市の担当者と協議の上、より明確に示さなければ効果測定の方法には結びつかない。
よって、平成28年度は、美唄市のまちづくりと本研究との関連性を明示した上で事業計画を再構築する。

また、効果測定の方法については、悉皆調査か標本調査か、到達度評価か満足度評価かといった様々なスケールでの効果測定が考えられる。これについては、先行研究である財団法人地域創造の『文化・芸術による地域政策に関する調査研究報告書』（2010）を参考に、調査項目や調査方法が恣意的な設定とならないように留意しながら、本研究の独自の考え方である〈新型アウトリーチ〉の有効性の検証をおこなっていく。

(2)多様な〈イニシエーター〉の在り方の実践

〈イニシエーター〉は必ずしも音楽家である〈ハイパー・アマチュア〉である必要は必ずしもないことが確認されたことから、平成28年度は多様な〈イニシエーター〉の在り方を提案し、それを実践していく。平成27年度ような食事提供型の〈イニシエーター〉をはじめ、演奏場所提供型や交流促進型など、演奏者同士の交流や観客との交流など、自らの立場や所有環境が触媒となって、音楽の演奏や交流、鑑賞やそれに付随する機会を提供していく人材を養成していく。

なお、このような多様な〈イニシエーター〉の養成については、求められるべき人物像を予め想定しおく必要があると考えられるため、平成28年度の取組の当初、この人物像を明示しておきたい。

(3)音楽との様々なコラボレーションによる新たな事業構想の可能性の検討

〈イニシエーター〉が多様な立場や職種の人々がなり得る可能性が出てきたことは、音楽が演奏や鑑賞という活動だけでなく、それに付随する活動や環境を巻き込める可能性があることを示唆している。これは【図2】で示した「ハイパー・アマチュアとイニシエーターの関係性」に、ハイパー・アマチュア以外の要素を加えることを意味する。

この考え方では、空室や空き地を演奏場所として活用すること、様々な施設で生演奏を提供すること、ご当地グルメと演奏を関連付けること、音楽以外の表現活動と音楽を関連付けること等々、様々な人や活動を関連付けて音楽を通した諸活動とのシナジー効果を想定している。これらに共通しているのは、関連付けることで美唄市にとって新たなビジネスチャンスを生み出すという点である。想定される実践例は次のとおりである

①空き資源(空室や空き地)とのコラボレーション

現在は使用されていない建築物や遊休地での演奏が考えられる。建築物や遊休地の使用については正当な対価を支払う。空き資源の有効活用の実践例は、事業構想大学院大学のアーカイブズを活用する。このコラボレーションでの〈イニシエーター〉は、空き資源を熟知している人材ということになる。

②様々な施設とのコラボレーション

美唄市内にある温浴施設や高齢者福祉施設などでの生演奏の提供は、これまでも学生が〈ゆ～りん館〉でおこなってきた。学生にとっては温浴施設を安価に使用させてもらえるというメリットがあり、施設側には宿泊客らに生演奏というサプライズを提供できるというメリットがあり、win-winの関係が成立している。

他にも様々な施設が美唄市内はあるが、このコラボレーションではその施設の環境に適した音楽を提供できるかどうかが鍵となる。したがって、このコラボレーションでの〈イニシエーター〉は、幅広い音楽ジャンルに精通した人材ということになる。

③ご当地グルメとのコラボレーション

ご当地グルメは食するだけでも楽しいが、それに音楽が加わることで演奏する側と鑑賞する側双方に楽しい思い出を刻みこむというねらいがある。美唄市のご当地グルメとして有名なのは〈米〉〈アスパラ〉〈美唄やきとり〉〈美唄とりめし〉〈ハスカップ〉〈くるみ〉などがある。どれもそれ単体で十分楽しめるものであるが、さらにこれに音楽が加わることで、楽しいエピソードとしての記憶をより強固なものにしようというねらいがある。具体的には、ご当地グルメとセットになった音楽合宿、〈ハイパー・アマチュア〉の演奏をバックにした美唄市収穫祭ディナー等が考えられる。したがって、このコラボレーションでの〈イニシエーター〉は、美唄市の食に熟知している人材ということになる。

④様々な表現活動とのコラボレーション

音楽はそれだけでも十分に楽しめる表現活動であるが、これに音楽以外の表現活動が加わることで、総合的な表現活動としてのシナジー効果が期待できる。例えば、演奏されている曲にちなんだ絵画や詩の鑑賞、市民を巻き込んだミュージカルの公演など、規模が大きな表現活動への繋がりも考えられる。したがって、このコラボレーションでの〈イニシエーター〉は、総合的な芸術に熟知している人材ということになる。

第4章　平成28年度の研究実績

第1節　新型アウトリーチの定型化を目指して

(1)福祉施設へのアウトリーチの機会拡大

これまで、体験型演奏会「ふれあいコンサート」は、保育所や幼稚園を対象に実施してきたが、３カ年の研究の最終年度となる平成２８年度は、高齢者福祉施設や知的障がい者施設への演奏機会の拡大を計画した。そもそも、アウトリーチとは日常的に音楽文化等を鑑賞する機会が少ない人々への鑑賞機会の提供が根底にあることから、高齢者や障がい者をその対象とすることは、アウトリーチを実践する上で不可欠であると考えた。

(2)様々な表現活動とのコラボレーションによるアウトリーチの価値の拡大

前年度の取組のまとめでは、「音楽はそれだけでも十分に楽しめる表現活動であるが、これに音楽以外の表現活動が加わることで、総合的な表現活動としてのシナジー効果が期待できる」ことを提言した。この考え方の具現化として、障がいをもつ方々への音楽演奏に〈伝筆®〉[2]という表現形態を絡め、音楽を聴く機会を演奏以外の体験を加えたエピソードとして創り上げることを計画した。

音楽演奏と親和性の高い表現形態が数多くある中で、伝筆を取り上げた理由は、次の三つを挙げておく。一つ目は、崩し文字の一種であり、その文字がもつ意味と音楽の標題などを関連付けやすいこと　二つ目に、崩した文字が、文字が持っている意味以上の雰囲気や印象を想起させるため、絵画と似たような複数のメッセージ性を感じさせること　三つ目に、福祉施設などで演奏を想定している音楽の演奏時間内（1 曲 5～10 分程度）で完成できること、以上三つの理由を挙げることができる。

(3)エビデンス測定のためのアンケート調査の実施

新型アウトリーチのエビデンス測定については、過去２年間数値的なデータを取ってこなかった。研究最終年度となる平成２８年度は、ワークショップ型演奏会において、演奏者と聴衆の両者に対してアンケート調査を実施し、様々なエビデンスを把握することを計画した。

第2節　取組の実施日程

(1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」

◇平成 28 年 8 月 18 日（木）

2　伝筆（つてふで）：崩し文字の一種。一般社団法人　伝筆協会（https://tsutefude.com/about/）によれば、「筆文字が描けたら」という一つの憧れから、誰でも描けるようになるコツを集め続け、できあがったのが伝筆とされている。なお、伝筆（つてふで）は商標登録されている。

10:30～11:30　ライフサポート美唄

14:00～15:00　恵祥園

20:00～　ピパの湯ゆ～りん館

◇平成 28 年 8 月 19 日（金）

10:30～11:30　ピパの子保育園

14:00～15:00　コミュニティホーム美唄

(2)ワークショップ型演奏会「美唄サテライト･キャンパス with 札幌国際大学　合同演奏会」

◇平成２９年３月５日（日）　美唄市民会館大ホール

第3節　各取り組みの内容

(1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」

◇目的

これまでの従来型（派遣型・提案型）アウトリーチの音楽交流ではなく、官製興行化、効果測定不足、まちの政策との関連不足、コスト増大の４つの課題解決が見込まれる〈新型アウトリーチ〉を構築する。体験型演奏会「ふれあいコンサート」では、幼稚園・保育所等に音楽鑑賞などの芸術鑑賞の機会を創出することと、幼児教育を学ぶ学生の活動の場を確保することを目的に、札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科が中心となって、〈新型アウトリーチ〉の具体的な活動を企画する。加えて、平成２８年度は、様々な表現形態とのコラボレーションによる展開を加え、音楽を聴くだけでなく、音楽がある総合的な体験としての価値を高めることを目指す。

◇主催

札幌国際大学短期大学部、美唄市サテライト・キャンパス運営協議会

◇演奏曲

【ライフサポート美唄】

・単独演奏：笑点、さんぽ、おもちゃのチャチャチャ、恋するフォーチュンクッキー、襟裳岬、上を向いて歩こう、宇宙戦艦ヤマト

・伝筆とのコラボレーション演奏：世界に一つだけの花、少年時代、負けないで

【恵祥園、コミュニティホーム美唄】

・単独演奏：笑点、北国の春、にんげんっていいな、宇宙戦艦ヤマト、襟裳岬、藁の中の七面鳥、上を向いて歩こう、北酒場、少年時代、夏は来ぬ、ふるさと

・伝筆とのコラボレーション：川の流れのように、夏の思い出、見上げてごらん夜の星を

【ピパの子保育園】

・お弁当（手遊び）、ピクニック（ペープサート）、山の音楽家（子どもが簡易楽器で参加）、かみなりどんがやってきた（手遊び）、海（紙芝居）、南の島のハメハメハ大王、さんぽ

①ライフサポート美唄

ライフサポート美唄は、社会福祉法人北海道光生会が運営する障がい者支援施設である。「生活介護」「施設入所支援」「短期入所」、そして平成 26 年 2 月から新たに「共同生活援助（グループホーム）」を立ち上げ、利用者のニーズに応じたサービスを提供している。

この事業所の特色としては、日中活動における利用定員が 150 名と、大変多い点にあり、このこと、また、スポーツや音楽やエアロビクスといったクラブ活動の提供や、牛乳パックの再生紙製作や窯業、縫製等の生産活動、また特に支援度の高い利用者には散歩などを中心とした個別の活動プログラムに沿って、様々な活動内容を取り入れていることが特徴である。[3]

スポーツや音楽など多彩な活動に日常的に取り組んでいるこの施設では、音楽の演奏を聴くだけでなく、伝筆とのコラボレーションの実践を行うこととした。

なお、伝筆の指導は、一般社団法人伝筆®協会認定講師の谷本あゆみ氏に依頼し、演奏する音楽にちなんだ作品の制作に取り組んでいただいた。

◇当日の行程

3　社会福祉法人北海道光生会ホームページ（http://www.hokkaidokoseikai.org/jigyosho.html）より要約

平成２８年８月１８日（木）

9:00　札幌駅発スーパーカムイ７号

9:35　美唄駅到着、ライフサポート美唄へ移動

10:00　準備

10:30　ふれあいコンサート

11:30　後片付け、移動、昼食

②恵祥園

美唄市恵祥園は、食事や排泄などで常時介護を必要とし、自宅では介護が困難な『要介護1～５』と認定された方が利用できる、美唄市が運営する介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）である。日常生活－起床、食事、消灯の時間以外は原則として自由であり、教養、娯楽、趣味、サークル活動などを通じて楽しく生活できるよう配慮されている。

外出は、毎日朝食後から夕食まで、ご家族の同伴のもと自由にでき、外泊は健康上支障のない方ならご家族同伴のもとで自由に出来、日常的に施設外の方々との交流も図られている。[4]

ライフサポート美唄よりも高齢の方が多い恵祥園では、高齢者の方でも楽しめる演奏曲に差し替えた。また、伝筆とのコラボレーションも実施した。

参加者の中には、日頃から「書」に親しんでいる方もおり、崩し文字の一種である伝筆は、音楽による雰囲気の醸成の中で、楽しく展開された。

4　美唄市恵風園・恵祥園ホームページ（http://www.city.bibai.hokkaido.jp/jyumin/docs/2016031400045/）より要約

◇当日の行程

13:00　恵祥園到着、準備

14:00　ふれあいコンサート

③ピパの湯ゆ～りん館

学生の宿泊先でもあるこの施設では、夕食が終わって入浴が済む時間帯をねらい、子どもから大人までが楽しめる曲を演奏した。この施設での演奏が、年齢層の幅が最も広く、また、演奏に対する観衆の反応についても予測が難しい場面であった。

この施設では伝筆とのコラボレーションは実施しなかったが、何も知らされずに温泉施設を訪れた観客からは、まさか温泉で身近な音楽の生の音楽が聴けるとは思わなかったという「サプライズ」効果が大きかったと言える。

◇当日の行程

17:20～19:30　夕食、準備

20:00～20:30　ふれあいコンサート

④ピパの子保育園

ピパの子保育園は、平成２７年度末をもって閉所した美唄市街地の保育所（中央、東、西、進徳）を統合して開園した保育園である。前年度までに閉所した全ての保育所を訪問していることから、生演奏に触れるのが２回めという子どももいるので、プログラムは、演奏を聴くだけでなく、身体を動かしたり、遊んだりという要素を多く採り入れ、音楽を通した楽しい体験活動となるように工夫を凝らした。

工夫の具体例としては、子どもにも音が出る簡易楽器を持たせて演奏に参加してもらったり、音楽に合わせてペープサートしたりなどした。

◇当日の行程

平成２８年８月１９日（金）

9:40～10:00　チェックアウト、移動

10:00～10:30　準備

10:30～11:30　ふれあいコンサート

⑤コミュニティホーム美唄

コミュニティホーム美唄は、社会福祉法人渓仁会が運営する介護老人保健施設である。介護が必要な状態になっても住み慣れた地域で生活しながら家庭生活への復帰をめざせるよう、美唄市とその近郊に住んでいる方に信頼度の高いサービスを提供する介護老人保健施設である。[5]

5　社会福祉法人渓仁会・コミュニティホーム美唄ホームページ（http://www.keijinkai.com/c-bibai/）より要約

この施設でも、前述の恵祥園と同様の演奏曲とメニューを提供し、単独演奏と伝筆とのコラボレーションを実施した。今回のふれあいコンサートの中では、もっとも演奏会場が広く、音楽を聴いたり、伝筆を楽しんだりすることだけに集中するのではなく、音楽が流れている中で、リハビリをしたり、談笑したりする場面も見受けられ、サロン的な音楽演奏として受け入れられた。

◇当日の行程

11:30～13:00　昼食会場へ移動、休憩

13:15～13:30　移動

13:30～14:00　準備

14:00～15:00　ふれあいコンサート

15:00～15:30　後片付け

15:30～15:45　美唄駅へ移動、解散

（2）ワークショップ型演奏会「美唄サテライト・キャンパス with 札幌国際大学　合同演奏会」

３年目を迎えるワークショップ型演奏会は、当初、例年どおり 11 月上旬に恒例の市民音楽際での合同演奏を予定していた。しかし、大量に積もった雪が、春に融雪水となって美唄市民会館の舞台や電気設備に漏水し、会館が使用できなくなるというアクシデントに見舞われ、11 月に開催することができなくなった。開催が危ぶまれた合同演奏であったが、実施方法を見直し、吹奏楽の団体による合同演奏「会」として再企画した。そして、小学校、中学校、高等学校、社会人までの団体が、合同で演奏するだけでなく、各団体単独の演奏も交え、演奏者がお互いの演奏を聴きあったり、聴衆が自分たちが直接関係していない出演者の演奏を聴く機会となった。

なお、この演奏会に参加した札幌国際大学シアターオーケストラの学生は、美唄市が既存施設を改修して開設した多目的合宿施設〈トマーレびばい〉の宿泊者の第１号として、１泊２日の合宿を経験した。

◇日時　平成 29 年３月５日（日）12:30 開場　13:00開演

◇場所　美唄市民会館大ホール

◇参加団体と演奏曲

・美唄市立中央小学校　スクールバンド

　ジブリメドレー、ブラジル、ベストフレンド

・美唄市立東中学校　吹奏楽部

　行進曲「威風堂々」第１番より、ひまわりの約束、３月９日

・美唄市立美唄中学校　吹奏楽部

勇気100%、明日への扉

・北海道美唄尚栄高等学校　吹奏楽部

コッツウォルズの風景、私のお気入り

・北海道美唄聖華高等学校　吹奏楽部

情熱大陸、SISTER、勇気100%Brass Rock

・美唄市民吹奏楽団&札幌国際大学シアターオーケストラ

AN AmericanClassic、TRIBUTE to COUNT BASIE

・Pipa！　トロンボーンアンサンブル

花は咲く、ふるさとのうた

◇当日の行程

3月4日（土）

12:35　JR美唄駅到着

13:10～15:30　合同演奏練習

16:00～18:00　美唄市民吹奏楽団との練習

18:00～20:00　ピパの湯ゆ～りん館で夕食・入浴

20:00～20:30　合宿先へ移動

3月5日（日）

9:00～11:30　合同演奏練習

13:00～15:10 合同演奏会

15:10～15:45 後片付け、移動

16:00　　美唄駅で解散

第4節　事例の考察

(1)体験型演奏会「ふれあいコンサート」:美唄市職員及び学生への聞き取り調査から

子どもからお年寄りまでの様々な施設への演奏を実施し、美唄市と本学（学生）双方には次のようなメリットがもたらされた。

◇美唄市のメリット

①楽譜のアレンジやコラボレーション企画など、年齢層や演奏環境に配慮した演奏を、ハイパー・アマチュアを活用することで、安価に実施することがでできた。

②これまで生演奏の機会が比較的少なかった子どもとお年寄りの年齢層のほぼ全ての施設に、遍く演奏を聴く機会を与えることができた。

◇本学（学生）のメリット

①音楽がもつ様々な可能性を活用した社会貢献の具体的なフィールドを得ることができた。

②異年齢と音楽を通して交流することで、初対面の人とのコミュニケーション力等の社会人基礎力の醸成に役立った。

双方にメリットがあることは、美唄市と本学との連携協定関係にとって極めて重要な点であり、このような互恵関係の上に、ハイパー・アマチュアの活用を念頭に置いた〈新型アウトリーチ〉の実践が展開されたことで、「互恵関係」「ハイパー・アマチュア」という２つのキーワードが、今後のアウトリーチを考える上で、重要であることが示唆された。

（2）ワークショップ型演奏会「美唄サテライト・キャンパス with 札幌国際大学　合同演奏会」：実施後アンケート（聴衆、演奏者）の結果から

①潜在的ニーズの具現化に貢献

美唄市民音楽祭での合同演奏が、市民会館の雪解け水の浸水被害により中止となり、代替案として考えだされたのが、美唄市内の吹奏楽団体による合同演奏会である。この演奏会は、過去２年間にわたって本学が仕掛けてきた、美唄市内の吹奏楽を中心とする音楽愛好家の関係性の構築が基盤となっており、ここに、美唄市の職員との連携があって実現した。

市民同士の繋がりをもった演奏交流は、演奏者だけでなく、聴衆も求めていた潜在的ニーズであることが、アンケート結果（次回もぜひ是非来たい、都合が合えば来たい：99％ n=330）から読み取れる。ただ、この取り組みが平成 26 年度から行われていたにもかかわらず、そのことを知っていたのは、32％に留まっており、このことからも「会場に足を運ばない＝興味がない」というわけではないことが読み取れる。この取り組みは、美唄市の広報紙メロディでも何度も取り上げられてきた。しかし、そのことが周知されていたにもかかわらず、この演奏会のことを知らなかったあるいは、その情報が目に止まらなかったのは、演奏者が自分の関係者でなかったからではないかと推測される。

一方で、ふれあいコンサートの認知度も 30％であることから、演奏者に自分の関係する人がいなくても興味をもっている層がこれくらいの割合でいるとも読み取れる。ただし、このことを確実な結果とするためには、さらに詳細にアンケート結果を読み込む必要がある。

ところで、今回は演奏者についても意識調査を実施している。その結果、94％（n=67）の演奏者が、「次回も是非参加したい、都合が合えば参加したい」と回答しており、演奏者も聴衆と同様に、何らかの意義を感じつつこの演奏会に参加していたことが読み取れる。

一方、参加者ならではの指摘もあった。例えば、演奏会の運営主体がどこなのかが不明確な面があり、演奏者の座席を決めなどの小さなことであっても、誰が決めたらよいかが分からないといった意見や、ワークショップ型と言いながら、楽器別の講師を派遣してくれないといった不満もあった。

この取り組みでは、ワークショップというのは、演奏に至るまでの創り上げる過程を指しており、必ずしも楽器別の講師を派遣することを意味するわけではないが、大学からの働きかけによって、美唄市民がどのような立ち位置で活動に参加すればよいかといった点が、より明確になることが、積極的な市民参加による取り組みの実現のために必要となってくることが考えられる。

②経費負担の意識の啓発

今回の演奏会では、演奏者と聴衆の双方に、このような取り組みでの経費についても質問している。経費負担が増大することについては、アウトリーチの課題としてすでに指摘されている点であり、これについて、〈新型アウトリーチ〉では、ハイパー・アマチュアの活用を提言してきたことから、演奏者と聴衆の意識と実際にかかった経費との間にどのような関係性が見られるかは、大変興味深い点であった。

アンケート調査の結果、演奏者と聴衆共に、奇しくも67％という同じ割合で、総経費が20万円以下であると回答している。また、仮に有料化した場合の、許容される入場料としては、演奏者が、300円までが20％、500円までが51％、1,000円までが11％、聴衆では、300円までが12％、500円までが44％、1,000円までが32％という結果となり、最も多い価格帯は500円であることがわかった。

一方、実際にかかった経費としては、美唄市の持ち出し分の総額の推移をみると、平成26年度が0円、平成27年度が202,264円、平成28年度が215,827円となっており、美唄市だけの持ち出し分でみると、市民の67％予想した「総経費で20万円以下」という予想は、ほぼ適当な額であることがわかる。しかしながら、この経費には、本学から派遣した学生や札響OBの交通費や宿泊費、楽器運搬費や、学生の演奏指導技術向上のための講師謝礼などは含まれていない。大学から支出されたこれらの経費は、平成26年度から平成28年度までの奨励研究の経費（年間80万円）から支出されている。この経費の中には、ふれあいコンサートの実施にかかる経費も含まれており、この全てが合同演奏会にかかった経費ではない。しかし、大学（学生）がこれまでと同様の関わ

り方をするのであれば、経費の不足が予想されることから、今後の運営の在り方を踏まえた、抜本的な経費計画の見直しをする段階にきていると考えられる。

さいごに

平成 28 年度の報告書では、場と時間の共有体験による価値の創造について触れ、音楽を通した体験は、古来から人々が旅や観光によって得てきた満足感と重なりあう部分があると考えられることを述べた。そして、その満足感は、「生演奏」＝「実体験」に勝るものはないということも指摘した。

本研究は、「演奏者を派遣して終わり」という従来のアウトリーチが抱えていた課題について、ハイパー・アマチュアという存在を活用し、音楽の演奏の楽しさとその周辺での体験をエピソードとしてパッケージングすることで、地域づくりの政策と関連した〈新型アウトリーチ〉としての具体例を模索してきた。その背景には、音楽活動を生涯にわたって愛好できる環境づくりという、「生涯音楽学習」の理念がある。音楽はそれだけでも十分に価値がある活動となるが、それに付随した実体験が、そこにいる人々にとって楽しい、充実したエピソードとなるならば、その価値に対して感謝の気持としての「活きたお金」が動かす仕組みを創ることで、音楽交流によるまちづくりは、継続的な事業展開が可能となるのではないだろうか。

そのような意味で、「満足感」「実体験」「感謝の象徴としてのお金」は、まさに観光産業の要であり、観光学部を有する本学は、音楽交流によるまちづくりに独自のエッセンスを加えられるというアドバンテージを有しているということを、平成 28 年度の報告書でも指摘した。

本研究は本年度（平成 29 年度）をもって 3 カ年の研究を終えたが、アンケート調査や経費負担の分析については、速報値に基づくものであるため、平成 29 年度の美唄サテライト・キャンパス成果発表会へ向けた、詳細な分析と考察が必要である。平成 29 年度に関しては、これまでの取り組みを継続しつつ、美唄市民に手によってこれまでの取り組みを発展させていく準備が整いつつある。例えば、美唄尚栄高等学校の生徒をリーダーに育成し、合同演奏会の運営を担ってもらったり、ふれあいコンサートに本学の学生に加えて市民も参加するなどの具体的な案が、美唄市の担当者からも寄せられている。

ただ、常に留意したいのは、理念さえしっかりしていれば、取り組みの具体的な姿はいくらでも考えられるということである。その理念を支えるのは、地域づくりであれば、上位概念として一づいている、その自治体の政策理念である。音楽のイベントは、その成果が情緒的にのみ語られることがあるが、音楽活動をすることによって、何が、どのように変わるのかを常に意識しながら、今後の研究を進めていく必要があると考えている。

謝辞

本研究に際しては、美唄市の髙橋幹夫氏、美唄サテライト・キャンパス推進室長の谷村泰尚氏、次長の三澤正裕氏、乗田胡桃氏といった関係職員の皆様の多大なるご支援がなければ成立しませんでした。

また、具体的な演奏シーンを考える上で、札幌国際大学シアターオーケストラの長谷川尚輝君、山内朋絵さんのパワフルな活動がなければ、ふれあいコンサートは成立しなかったと言っても過言ではありません。さらに、美唄市内の音楽愛好家の皆さんや小中高等学校の先生方の献身的な連携姿勢も、美唄市ならではの取り組みを支えることとなりました。

また、本研究テーマに特段なるご理解をくださった越塚宗孝学長からは、自治体との連携協力の在り方の基本を一から教えていただきました。本当に皆様ありがとうございました。

さて、本書は、3 年間の奨励研究の報告書の体裁でしかなく、研究論文としてのまとめ方にはなっていません。今後は、この報告書を基に、広く市民の皆様や行政関係者の皆様、音楽愛好家の皆様のお役に立つような論文をまとめ、世に送り出すことが私の使命であり、お世話になった方々への恩返しでもあると思います。

私の生涯のテーマは、「生涯、音楽を愛好できる基盤づくり」です。このことを改めて肝に銘じることとなった美唄市は、奇しくも私の故郷でもあります。音楽と地域づくりというテーマは、古くて新しいテーマです。今後共、本学と美唄市が連携協力関係を維持し、互いがさらに発展することを願いつつ、本報告書を公開します。

河本　洋一（札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科　教授）

付録資料

(1) 取組の様子を見ることができる web サイト

◇美唄市公式ホームページ

http://www.city.bibai.hokkaido.jp/jyumin/docs/2015092900129/

◇美唄サテライト・キャンパス運営協議会

http://www.city.bibai.hokkaido.jp/bsc/14top/15fureai_2/index.html

◇美唄サテライト・キャンパス Facebook ページ

https://www.facebook.com/bsc.bibai

◇市町村の広報紙をネットやスマホで「マイ広報紙」

https://mykoho.jp/article/北海道美唄市

◇YouTube 秋の美唄ふるさとの魅力発見

https://www.youtube.com/watch?v=BWIj1ZZ5aps

◇美唄アルテピアッツア公式ホームページ

http://www.artepiazza.jp/event/artspace/page/2/

平成 28（2016）年度 奨励研究

地域資源を活用したまちづくりに関する研究
―今金町フットパスの活用方策について―

事業報告書

札幌国際大学　地域連携センター

目　次

Ⅰ　研究の経緯と背景　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅱ　研究概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

1　研究の目的
2　研究組織
3　推進体制及び役割
4　調査研究スケジュール

Ⅲ　フィールドワーク等実施状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

1　第1回合同フィールドワーク(7月2日～3日)
2　写真チームフィールドワーク(8月9日～10日)
3　第2回合同フィールドワーク(9月17日～18日)
4　モニターツアー（10月8日～9日）
5　プロジェクト合同会議(12月16日)

Ⅳ　プロジェクトの成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

1　学生の学びの視点からみた成果と課題
　スポーツビジネス学科　佐久間章

2　地域観光振興の視点からみた成果と課題
　観光ビジネス学科　丹治和典　／　観光ビジネス学科　千葉里美

3　今金フットパスの活用方策について
　スポーツ指導学科　新井貢　／　非常勤講師（健康運動指導士）　本多理紗

《資　料》　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
・モニター事前アンケート
・モニター事後アンケート

Ⅰ　研究の経緯と背景

札幌市からは約 180 キロ、函館市からは約 120 キロの渡島半島の北部に位置する今金町は、南はユーラップ山系を挟んで八雲町、北は狩場山系を介して島牧村、東は低い山地を経て長万部町、西はせたな町に接している。基幹産業は農業で、後志利別川による肥沃な土壌と、周囲を山地に囲まれた内陸性気候を活かし、男爵いもや米、大豆、軟白長ネギや大根など、関東・関西の市場のほか、レストランや食品製造業者でも評価の高い良質の農産物を産出し、乳用牛や肉牛などの育成も盛んな地域である。特に男爵いもは「今金男しゃく」の名で全国ブランド化され、その味と品質は「日本一」との評判のほか、道内での流通が少なく、なかなか入手できないことから「幻のイモ」ともいわれている。

このように農業を基幹産業とする今金町は、高品質な農畜産物の供給基地として発展してきたが、近年は若年層の都市流出や少子高齢化の進展に伴う人口減少に歯止めがかからず、地域経済が衰退している状況にある(平成 27 年 3 月末の人口、5, 613 人)。また、清流日本一の後志利別川をはじめ、豊かな自然資源や高品質な農畜産物など観光資源となり得るものがあるものの、それらを有効な資源として活用しきれておらず、さらに主要幹線から離れているという交通アクセスの不便さもあり、観光入込客数も低迷している。

こうした背景にある今金町では、平成 24 年 10 月 5 日に住民、大学などで協働のまちづくりを推進する基盤組織として「今金町人流創生プロジェクト協議会(i プロ)」を設立した。さらに、同年 10 月 16 日には、産業、文化、まちづくり、学術の分野等で協力するために、札幌国際大学と「地域連携事業に関する協定」を締結した。

これによって、本学の有するノウハウや研究の蓄積及び関係機関とのネットワークを活かし、観光による地域産業の活性化、交流人口の増加を目指して本学学生と地元住民(今金町人流創生プロジェクト協議会)が協力し、今金町の魅力を探り、その魅力を町外に発信する「地域資源発掘・再発見事業」、や「田舎暮らし体験事業」をはじめ、外国人留学生をモニターとしてインバウンドの可能性について検証する「外国人留学生による今金インバウンドモニターツアー」、冬季の旅行商品開発のための「冬の今金モニターツアー」などのプロジェクトに取り組んできた。

昨年は、北海道内に 40 を超える市町村に 200 を超えるコースがあり、各地で関連した多彩なイベントが開催されている「フットパス」をテーマに取組を進めた。森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くイギリス発祥の「フットパス」は、檜山管内のせたな町・奥尻町・江差町３町では、すでに日本海フットパスとしてマップ整備がなされている。しかし、今金町には、フットパスコースの整備がなされていないことから、今金町をフィールドとして、地域の有する自然環境資源を生かした固有のフットパスモデルコースの設計・検証を行うと共に、地域観光振興におけるフットパスの可能性について今金町と共同で調査研究を行った。

Ⅱ　研究概要

1. 研究の目的

平成 27 年度、地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町をフィールドとして、フットパスモデルコースの設計・検証を行ない、地域観光振興のツールとしてフットパスの可能性についての共同研究を行った。前年度は、町内に 4 コースを設計するとともに、フットパスマップの作成に取り組んだ。また、町民へのコース紹介や体験会の開催も行った。

平成 28 年度は、こうした前年度の研究成果を踏まえ、今金町においてフットパスプログラムを取り入れたモニターツアーを実施し、成果と課題を明らかにするとともに、同町のフットパスコースの今後の活用方策について検討する。また、今年度は、学生を 4 チームに分け、学部学科の有する学びの専門性を生かしモニターツアーの企画・運営等に参画させることとした。

2. 研究組織

本研究は、以下の者が担当する。

(代表) スポーツ人間学部スポーツビジネス学科　教授　佐久間　章
観光学部観光ビジネス学科　教授　丹治　和典
観光学部観光ビジネス学科　准教授　千葉　里美
スポーツ人間学部スポーツ指導学科　准教授　新井　貢
短期大学部幼児教育保育学科　准教授　朝地　信介
非常勤講師（健康運動指導士）　本多　理紗

3. 推進体制及び役割

本研究は、今金町と札幌国際大学の共同研究であることから、それぞれ以下の推進体制により、役割を分担し研究を進める。

(1) 札幌国際大学

総括：スポーツビジネス学科　佐久間章

≪ツアーチーム≫　観光ビジネス学科教員 2 名（丹治和典・千葉里美）
観光ビジネス学科学生 4 名
・ツアープログラムの作成
・案内しおり等の作成
・ツアーの添乗　ほか

≪サインチーム≫　短期大学部幼児教育保育学科教員 1 名（朝地信介）
心理学科子ども心理専攻学生　4 名
・フットパスコースサインのデザイン検討
・サイン看板の作成

≪指導チーム≫　スポーツ指導学科教員１名（新井貢）
非常勤講師１名（本多理紗）
スポーツ指導学科学生７名
スポーツビジネス学科学生４名
・フットパスコースサインの設置位置及び表示内容の検討
・フットパスコースの所要時間及び注意個所のチェック
・唾液アミラーゼによるストレス度チェック
・ノルディックポールを使った歩き方の指導
・フットパスコースサインの設置、回収

≪写真チーム≫　スポーツビジネス学科教員１名（佐久間章）
観光ビジネス学科学生２名
心理学科子ども心理専攻学生1名　※学生3名は、大学写真部に所属。
・活動記録写真の撮影
・モニターへの参加記念ＰＯＳＴカードの作成
・ファトブック“IMAKANE”の作成
・フットパスコース紹介動画の作成
・写真による事業記録誌の作成

(2) 今金町

総括：まちづくり推進課企画政策グループ　佐藤創
≪事業実施主体≫　今金町（まちづくり推進課）
≪連 携 協 力≫　今金町人流創生プロジェクト協議会
今金町教育委員会
今金町保健福祉課
「ちょっと暮らし」体験者　等

4. 調査研究スケジュール

①プロジェクトメンバー打合せ【6月26日】　於:札幌国際大学
※メンバーの顔合わせ、実施計画及び7月実施「FW」についての打合せ
②第1回フィールドワーク　【7月2～3日　1泊2日】　於:今金町
※ツアープログラム現地調査　※コースの選定、サインの検討
③第2回フィールドワーク　【9月17～18日　1泊2日】　於:今金町
※コースサインの設置　※現地の最終確認・リハーサル
④モニターツアー　【10月8～9日　1泊2日】　於:今金町
※参加者は、社会人教養楽部受講者から募集する
⑤今金プロジェクト合同会議【12月16日】　於:札幌国際大学
※事業の評価と検証、活用方策について

Ⅲ　フィールドワーク等実施状況

1　第１回合同フィールドワーク（7 月 2 日～3 日）

（1）日　程

<table>
<tr><th>時間</th><th>1日目（7／2（土））</th><th>2日目（7／3（日））</th></tr>
<tr><td>7:00</td><td rowspan="5">（7:45集合）
8:00札幌国際大学出発
→12:00今金町へ到着
（車中で昼食）</td><td></td></tr>
<tr><td>8:00</td><td rowspan="5">調査②
・街中コース実歩
・モニターツアーの計画・添乗・案内の検討
・コースサイン設置位置検討
・フットパスコースの写真撮影
※体育館等の会場施設確認</td></tr>
<tr><td>9:00</td></tr>
<tr><td>10:00</td></tr>
<tr><td>11:00</td></tr>
<tr><td>12:00</td><td rowspan="2">到着、調査日程等・説明</td><td>昼食・打合せ</td></tr>
<tr><td>13:00</td><td rowspan="9">12:30今金町出発
→16:30札幌国際大学へ到着（予定）</td></tr>
<tr><td>14:00</td><td rowspan="5">調査①
・神丘コース実歩
・モニターツアーの計画・添乗・案内の検討
・コースサイン設置位置検討
・フットパスコースの写真撮影</td></tr>
<tr><td></td></tr>
<tr><td>15:00</td></tr>
<tr><td>16:00</td></tr>
<tr><td>17:00</td></tr>
<tr><td>18:00</td><td>夕食</td></tr>
<tr><td>19:00</td><td rowspan="2">本日の調査報告
ヘルシーウォーキング・シンポジウム等についての打合せ</td></tr>
<tr><td>20:00</td></tr>
<tr><td>21:00</td><td></td></tr>
<tr><td>宿泊先</td><td>ホテルいまかね</td></tr>
</table>

（2）参加者

学生（男6名　女3名　　計9名）

チーム	所属学科	学年	学生番号	氏名	性別
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131032	蝦名　紗智子	女
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131025	石井　茉帆	女
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131036	川村　吉史	男
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142018	境　裕斗	男
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142059	藤村　立	男
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142015	川村　晃児	男
写真チーム	心理学科子ども心理専攻	4年	13113004	西口 由美恵	女
写真チーム	観光ビジネス学科	3年	14131005	上川 拓哉	男
写真チーム	観光ビジネス学科	2年	15131052	菅原 直哉	男

教員

ツアーチーム	観光ビジネス学科	教員	丹治　和典	男
指導チーム	非常勤講師	教員	本多 理紗	女
写真チーム	スポーツビジネス学科	教員	佐久間　章	男

（3）フィールドワーク活動概況

講話　「今金町の概要」
今金町まちづくり推進課　寺崎課長

モニターツアーのプログラム検討
ツアーチーム

フットパスコースの事前踏査
指導チーム

ﾎﾟｽﾄｶｰﾄﾞ用写真の撮影
写真チーム

各チームで本日の活動・調査報告

2　写真チームフィールドワーク（8 月 9 日～10 日）

（1）日　程

<table>
<tr><th>時間</th><th>1日目（8／9（火））</th><th>2日目（8／10（水））</th></tr>
<tr><td>7:00</td><td rowspan="2">（6:00集合・出発）
→10:00今金町へ到着</td><td></td></tr>
<tr><td>8:00</td><td rowspan="3">7:30今金町出発
→11:30札幌国際大学到着</td></tr>
<tr><td>9:00</td></tr>
<tr><td>10:00</td><td rowspan="2">今金町役場で打ち合わせ
撮影①　デモーレン、商店街
街中コース等</td></tr>
<tr><td>11:00</td></tr>
<tr><td>12:00</td><td>昼食・打ち合わせ</td><td rowspan="9"></td></tr>
<tr><td>13:00</td><td rowspan="5">撮影②

・神丘コース
・後志利別川</td></tr>
<tr><td>14:00</td></tr>
<tr><td>15:00</td></tr>
<tr><td>16:00</td></tr>
<tr><td>17:00</td></tr>
<tr><td>18:00</td><td>夕食</td></tr>
<tr><td>19:00</td><td rowspan="2">撮影③
・光大橋からの夜景
・美利河ダムの夜景ほか</td></tr>
<tr><td>20:00</td></tr>
<tr><td>21:00</td><td></td></tr>
<tr><td>宿泊先</td><td>ホテルいまかね</td></tr>
</table>

（2）参加者

学生（男2名　女1名　計3名）

写真チーム	心理学科子ども心理専攻	4年	13113004	西口 由美恵	女
写真チーム	観光ビジネス学科	3年	14131005	上川 拓哉	男
写真チーム	観光ビジネス学科	2年	15131052	菅原 直哉	男

教員

写真チーム	スポーツビジネス学科	教員	佐久間 章	男

（3）フィールドワーク活動概況

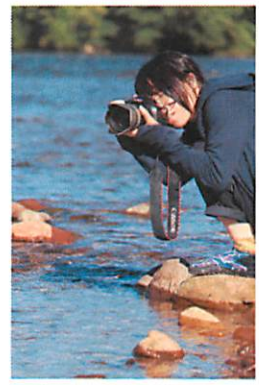
今金町内のビューポイントで撮影

・フットパス神丘、街中コース

・後志利別川

・商店街

・光大橋、美利河ダム（夜景撮影）



3　第2回合同フィールドワーク(9月17日～18日)

（1）日　程

時程	ツアーチーム	指導チーム	写真チーム
第1日(9月17日)			
大学集合　7時45分　大学出発　8時00分　→　今金到着　12時30分			
13 14 15 16	【ツアープログラムの確認】 クアハウスピリカ ピリカ旧石器資料館ほか 農業体験受入農家	【フットパスコースの確認】 コースサインの設置 コースの点検 所要時間計測ほか	【記録・成果物用写真撮影】 ツアーチームと指導チームに分かれて同行取材
17 18 19 20	【夕食プログラムの体験】 町内有名店3軒の所在地 食事内容等 教員　：　今金町まちづくり推進課とのミーティング		
宿泊	クアプラザピリカ	ホテルいまかね	
第2日(9月18日)			
8	朝食		
9 10 11	【当日プログラムのリハーサル・役割の確認】 今金健康体操 シンポジウム フットパス（神丘コース・街中コース）		
12	昼食・全体ミーティング		
12時30分　今金出発　→　16時30分　大学到着			

（2）参加者

学生（男7名　女4名　　計11名）

チーム	所属学科	学年	学生番号	氏名	性別
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131032	蝦名　紗智子	女
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131025	石井　茉帆	女
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131038	藤田　和久	男
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131036	川村　吉史	男
ツアーチーム	観光ビジネス学科	1年	16131047	村川　楓季	男
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142018	境　裕斗	男
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142059	藤村　立	男
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142019	飯田　栞理	女
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142055	佐々木　渚	女
写真チーム	観光ビジネス学科	3年	14131005	上川 拓哉	男
写真チーム	観光ビジネス学科	2年	15131052	菅原 直哉	男

教員（男3名　女2名　　計5名）

ツアーチーム	観光ビジネス学科	教員	丹治　和典	男
ツアーチーム	観光ビジネス学科	教員	千葉　里美	女
指導チーム	スポーツ指導学科	教員	新井　貢	男
指導チーム	非常勤講師	教員	本多 理紗	女
写真チーム	スポーツビジネス学科	教員	佐久間　章	男

（3）フィールドワーク活動概況

ウェルカムセレモニーの進行確認

ピリカ旧石器資料館　学芸員からの説明

農業体験プログラムの確認

商店街および夕食プログラム提供店の事前調査

健康まつり会場の確認、ノルディックポールの貸出シミュレーション

コースサインの設置

ツアーチームによるコースの事前踏査

4　モニターツアー(10 月 8 日～9 日)

（1）モニターツアーの日程および内容

１０月８日（土）

8:00　札幌国際大学を出発
12:00　今金町ウェルカムセレモニー ※記念写真撮影
13:00　「ピリカ旧石器文化館」・「資料館」の見学 ※学芸員による解説
14:20　「ピリカダム」及び「魚道」の見学
15:00　「ジャガイモ選別工場」の見学
16:00　「トマト農家」又は「原木しいたけ栽培所」の見学・体験
17:00　今金町中心街散策
17:30　町内人気有名店 3 店にて夕食 ※食事券を利用した夕食スタイル
19:40　「光大橋」からの夜景観賞
20:30　宿泊場所「クアプラザピリカ」到着

１０月９日（日）

8:00　宿泊場所「クアプラザピリカ」出発
8:40　『今金健康まつり２０１６』に参加　※今金町総合体育館
12:00　昼食 ※減塩カレー
13:30　「今金町総合体育館」出発
18:00　札幌国際大学に到着予定

（2）モニター募集要項

[別紙]

平成28年度札幌国際大学

今金町の秋をおもいっきり体感！　秋のいまかねヘルシーツアー

【社会人教養楽部受講者限定】モニター申込用紙

申込年月日：平成　　年　　月　　日

※本申込用紙で5名まで申込することができます。

※複数でお申込みいただいた場合は、できる限り同室になるように調整いたしますが、参加者の状況によっては同室にならない場合もあります。

フリガナ 氏名		性別	年齢
住所 連絡先	〒 電話　（　　）　携帯　（　　）		

フリガナ 氏名		性別	年齢
住所 連絡先	〒 電話　（　　）　携帯　（　　）		

フリガナ 氏名		性別	年齢
住所 連絡先	〒 電話　（　　）　携帯　（　　）		

フリガナ 氏名		性別	年齢
住所 連絡先	〒 電話　（　　）　携帯　（　　）		

フリガナ 氏名		性別	年齢
住所 連絡先	〒 電話　（　　）　携帯　（　　）		

＝お申込み・お問合せ先＝

札幌国際大学 生涯学習センター

〒004-8602　札幌市清田区清田４条１丁目４-１

ＴＥＬ 011-881-2410（直通）／8844（代表）

ＦＡＸ 011-881-6609（直通）

（3）スタッフ

学生（男8名　女5名　計13名）

チーム	所属学科	学年	学生番号	氏名	性別
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131032	蝦名　紗智子	女
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131025	石井　茉帆	女
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131038	藤田　和久	男
ツアーチーム	観光ビジネス学科	3年	14131036	川村　吉史	男
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142059	藤村　立	男
指導チーム	スポーツ指導学科	3年	14142015	川村　晃児	男
指導チーム	スポーツビジネス学科	1年	16141003	伊達　陸都	男
指導チーム	スポーツビジネス学科	1年	16141034	土屋　雄生	男
指導チーム	スポーツビジネス学科	1年	16141035	奥田　真矢	女
指導チーム	スポーツビジネス学科	1年	16141038	細川　晴加	女
写真チーム	心理学科子ども心理専攻	4年	13113004	西口 由美恵	女
写真チーム	観光ビジネス学科	3年	14131005	上川 拓哉	男
写真チーム	観光ビジネス学科	2年	15131052	菅原 直哉	男

教員（男2名　女1名　計3名）

ツアーチーム	観光ビジネス学科	教員	丹治　和典	男
指導チーム	非常勤講師	教員	本多 理紗	女
写真チーム	スポーツビジネス学科	教員	佐久間　章	男

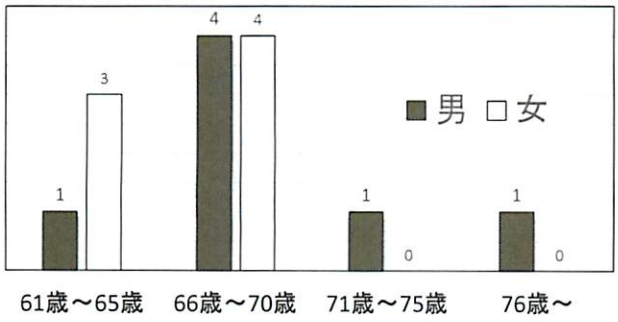
（4）スタッフ行動スケジュール

時程	プログラム モニター (15名)	ツアーチーム(5名) 教員　1名 学生　4名	指導チーム(7名) 教員　1名 学生　6名	写真チーム(4名) 教員　1名 学生　3名
7:45	集合	人員確認	用具確認・大学公用車に積み込み	用具確認・積み込み
8:00 11:45	移動 クアハウスピリカのバス	事前アンケート実施 添乗業務ほか	後部座席に着席	モニター記録写真 モニターインタビュー
12:00	クアハウスピリカでチェックイン	クアハウスピリカでチェックイン		
12:30	クアハウスピリカのバス	クアハウスピリカのバス	町民体育館移動　(今金公用車)	モニターの 活動記録写真 モニターインタビュー 大学公用車
13:00 16:00	○ピリカ旧石器資料館 ○農業体験　ほか	○ピリカ旧石器資料館 ○農業体験　ほか	コースサインの設置 コース点検 体操リハーサル ※作業終了後、農業体験に合流	
	デモーレンへ移動 クアハウスピリカのバス	デモーレンへ移動 クアハウスピリカのバス		
17:00	夕食プログラム	必要に応じてモニターの 夕食プログラムに同行	夕食プログラム	夕食プログラムの写真撮影 モニターインタビュー
20:00	クアハウスピリカへ移動 クアハウスピリカのバス	クアハウスピリカへ移動 クアハウスピリカのバス		クアハウスピリカへ移動 大学公用車
20:30	フリータイム	チームごとにミーティング		

時程	プログラム モニター (15名)	ツアーチーム(5名) 教員　1名 学生　4名	指導チーム(7名) 教員　1名 学生　6名	写真チーム(4名) 教員　1名 学生　3名
8:00	移動 クアハウスピリカのバス	町民体育館へ移動 クアハウスピリカのバス	町民体育館へ移動 クアハウスピリカのバス	町体へ移動 クアハウスピリカのバス
8:30	受付	モニターサポート	今金体操準備	シンポ 動画 準備 記録写真
9:00	オープニング 今金体操		今金体操	
9:30	フォーラム 「今金町のフットパスを ウォーキングしよう」	フォーラムに参加	ノルディックポール準備 ※コース紹介 ※今金体操	PC 操作 記録写真
10:30	フットパス(2時間) くもかぜコース(神丘) ふれあいコース(街中)	モニターの希望に合わせ、学生を 2つに分けサポートする	※くもかぜコースは、移動時にストレスチェック ※ふれあいコースは、体育館内でストレスチェック 二つのコースにわかれて伴歩 ※最後尾でサインの回収	記録写真 モニターインタビュー
13:00	昼食(減塩今カレー)	モニターサポート 昼食(減塩今カレー)	ストレスチェック② ノルディックポールの回収 昼食(減塩今カレー)	記録写真 昼食(減塩今カレー) モニターインタビュー
14:00 18:00	大学へ移動 クアハウスピリカのバス	大学へ移動 クアハウスピリカのバス モニターサポート ※事後アンケート	大学へ移動 クアハウスピリカのバス	大学へ移動 クアハウスピリカのバス ポストカード配布 モニターインタビュー

（5）モニター参加者プロフィール

札幌国際大学生涯学習センターが所管する社会人教養楽部受講生にモニターの募集を行い、男性７名、女性８名の 15 名から申し込みがあった。当日、女性１名が欠席したことにより、14 名（男性７名、女性７名）が参加した。また、モニター中、３組が夫婦である。



No	年齢	性別
1	63	女性
2	64	女性
3	64	男性
4	65	女性
5	66	女性
6	66	女性
7	66	男性
8	67	女性
9	67	男性
10	67	男性
11	68	男性
12	70	女性
13	73	男性
14	76	男性

（6）参加モニターへの事前送付資料

モニターの皆様

秋のいまかねヘルシー・ツアー

◆モニターとしてご参加いただく皆様へのお願い◆

このたびは、「秋のいまかねヘルシー・ツアー」のモニターにご応募いただきまして、ありがとうございます。本事業は、本学と地域連携事業の協定を結ぶ槽山管内今金町との調査研究として実施するものです。近年、森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くイギリス発祥の「フットパス」が、日本においてもさまざまな地域で、特徴を活かした魅力的なコースが整備されてきています。

平成 27 年度、今金町をフィールドとして、このフットパスモデルコースの設計・検証を行ない、地域観光振興のツールとしてフットパスの可能性についての共同研究を行いました。

今年度は、前年度の研究成果を踏まえ、今金町においてフットパスプログラムを取り入れたモニターツアーを実施し、地域観光振興のツールとしての課題を明らかにするとともに、同町のフットパスコースの今後の活用方策について検討することを目的としています。

つきましては、このたびモニターとしてご参加いただきます皆様には、随時アンケート等によりプログラムについての意見や感想を伺います。ご面倒をおかけいたしますが、本趣旨をご理解いただき、忌憚のないご意見等をお寄せ下さいますようよろしくお願いいたします。

また、本ツアーの企画・運営は、本学学生が以下の役割分担により、日ごろの学びを活かして活動します。こうした活動は、学生にとっての貴重な体験のできる教育の場としても位置付けています。至らぬ点も多々あると思いますが、暖かくご指導いただければ幸いです。

※ツアープログラムの企画・添乗・ガイド等	観光ビジネス学科学生
※今金体操・フットパス時の歩き方指導・ガイド等	スポーツ人間学部学生
※記録写真撮影・記念ポストカードの作成	本学写真部学生
※フットパスコースのサイン作成	心理学科子ども心理専攻学生

★参加費(5,000 円)は、当日乗車時にお支払いください。
★同封の資料をご覧いただき、不明な点等ございましたら、以下までご連絡ください。

札幌国際大学生涯学習センター　TEL 011－881-2410
時間外緊急連絡先：　佐久間章　TEL 080-6060-7896

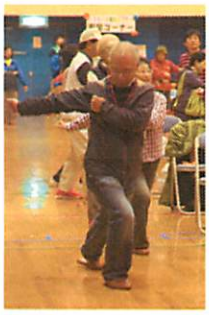
（７）ツアー・活動概況

ウェルカムセレモニー後の記念撮影

ピリカ旧石器文化館・資料館見学

農業体験　ミニトマトの収穫

農業体験　原木しいたけ栽培所



今金健康まつり　　学生指導による今金健康体操

フォーラム「今金町のフットパスをウォーキングしよう」

ストレスチェック及びノルディクポールの貸出

フットパスコースを歩くモニターと学生スタッフ

昼食は「減塩いまカレー」

5　プロジェクト合同会議(12 月 16 日)

（1）目　的　今年度の事業成果の評価と検証を行うとともに、今後の方向性について協議する

（2）日　時　平成 28（2016）年 12 月 16 日(金)　13 時 30 分～15 時 30 分

（3）会　場　札幌国際大学　2 号館 11 階　特別会議室、2111 会議室

（4）出席者　〔今金町〕

まちづくり推進課　課長補佐　山田　哲也
まちづくり推進課　企画政策グループ　係長　佐藤　創
まちづくり推進課　企画政策グループ　主事　植村　亜耶
まちづくり推進課　企画政策グループ　主事　田中　洋輔
まちづくり推進課　商工観光グループ　主事　加藤　剛広

〔札幌国際大学〕

スポーツ人間学部スポーツビジネス学科　教授　佐久間　章
観光学部観光ビジネス学科　教授　丹治　和典
スポーツ人間学部スポーツ指導学科　准教授　新井　貢
短期大学部幼児教育保育学科　准教授　朝地　信介

（5）内　容

1　今年度の取り組みについて（報告）
　① プロジェクトの実施概況　　スポーツビジネス学科　佐久間章
　②各チームの取組概況
　　1）指導・サインチーム　　スポーツ指導学科　新井　貢
　　短期大学部幼児教育保育学科　朝地　信介
　　2）写真チーム　　スポーツビジネス学科　佐久間　章
　　3）ツアーチーム　　観光ビジネス学科　丹治　和典
　③モニターツアーの評価・分析　　観光ビジネス学科　丹治　和典
2　今年度の成果と課題（協議）
3　今後のフットパスコースの活用方策および次年度の取組について（協議）

Ⅳ　プロジェクトの成果と課題

1　学生の学びの視点からみた成果と課題

スポーツビジネス学科　佐久間　章
（総括・写真チーム担当）

平成28年度の本研究は、前年度に設計・開発した今金町における4つのフットパスコースの活用方策として、フットパスを取り入れた観光商品を企画し、モニターツアーによってその可能性を検証することを目的とした。しかし、この取り組み過程は、本研究に関わる学生にとっても、学内の授業では得難い実践的な学習の場であり、教育効果ももう一つの目的であった。そこで、今年度のプロジェクトを、学生の学びの視点から成果と課題を整理する。

前年度の研究課題である今金町におけるフットパスコースの設計にあたっては、観光学部観光ビジネス学科とスポーツ人間学部スポーツビジネス学科の3年生による共同プロジェクトとして学部・学科を超えて実施した。「フットパス」は、観光とスポーツをビジネスという共通の視点で捉えることができる恰好の課題であった。それぞれの学科の専門的学びを踏まえ、与えられた課題の解決にむけて他学科の学生と共に行うフィールドワークや協議は、学生にとってのコミュニケーションや複眼的に思考するトレーニング機会として機能し、多くの気づきや発見を誘発することに繋がった。さらに、今金町人流創生プロジェクトメンバーや今金町役場職員が加わることにより、世代を超えたメンバーとの協議は、学内では用意することのできない環境下で、学生の学びを展開できたことも成果の一つであった。

今年度の計画にあたっては、前年度の学部・学科の壁を越えた共同の取り組みを更に発展させ、より多様な学生が参画し取り組めるように、研究課題へのアプローチの仕方については、事前に十分な検討を行った。

前年度に、コース設計したフットパスを取り入れた観光商品の開発は、ツアーの企画という観光の視点のみならず、フットパスをアクティビティとするスポーツや健康の視点も重要となる。さらには、安全なフットパスのためのコースサインの作成や、ツアー参加者に今金をＰＲするためのツールの作成など、本学の有する学科の学びを本研究の中に可能な限り位置づけることを考慮した。最終的に、今年度の研究課題への取組に、学内での学びを最大限生かすことができると考えられる学科として、3学部4学科の学生を4つのチームに編成し取組をすすめることとした。

ツアー全体のプログラムの企画・案内しおり等の作成及び当日のモニター対応の添乗業務等については、観光学部観光ビジネス学科の学生を「ツアーチーム」として編成した。ツアー日程やプログラムの企画に必要な見学地やそこでの体験内容を選定するためには、自分の目で確認・体験するとともに、現地担当者からのヒアリングや連絡調整などが必要となる。また、当日の旅程管理や現地ガイド・接客などをトータルにシミュレーションすることも不可欠である。

フットパスコースの設営・管理や当日の準備体操・歩き方指導等については、スポーツ人間学部スポーツ指導学科・スポーツビジネス学科の学生を「指導チーム」として編成した。安全にフットパスコースを歩いてもらうためには、コースサインやその設置位置の検討及び危険個所の事前チェックと対策の検討が必要となる。また、今金町から強い要請があった町独自の「いまかね体操」の考案と実演・指導をはじめ、ノルディクポールを使ったウォーキング指導、唾液アミラーゼによるストレス度検査の運用なども

検討し、実施する。

指導チームの課題にも挙げられているコースサインについては、設置位置やメッセージについては同チームで検討するが、サインのデザインと作成については、子どもの図画工作など幼児教育・保育を学ぶ人文学部心理学科子ども心理専攻の学生を「サインチーム」として編成した。指導チームと連携し、指定の設置位置に必要な情報やメッセージが一見してわかるコースサインのデザイン・作成を行った。

さらに、「写真チーム」は、本学写真クラブに所属する学生によって編成した。他のチームと比すると、同一の学部学科ではなく、メンバーは観光学部観光ビジネス学科と新文学部心理学科子ども心理専攻の学生によって構成されている。日ごろのクラブ活動における学びを生かし、ツアーに参加するモニターに配布する今金町ＰＲ用記念ポストカードや、ホームページにフットパスコースを紹介するための写真で構成される動画作成などを行った。

以上の 4 つのチームが、研究目的に即したミッションの具現化に向けてチームの役割について、所属学科や該当科目を担当する教員からのサポートを得ながら、日ごろの学びを積極的に生かした実践的な取り組みを展開した。チーム編成とチーム課題に関連すると考えられる学科科目例を、一覧にしたのが以下の表である。

【表-1】チーム編成とチーム課題に関連すると考えられる学科科目例

研究目的	フットパスコースの活用方策として、フットパスをアクティビティとして取り入れた観光商品を企画し、モニターツアーによってその可能性を検証する				
ミッション	「秋のいまかねヘルシーツアー」の企画		安全で楽しいフットパスの運営		
役割・課題	ツアープログラムの企画 ・見学地、体験内容選定 ・見学体験、ホテル等との連絡調整 モニターへの事前連絡・資料提供 ・旅のしおりの作成 当日の旅程管理や現地ガイド・接客	モニターツアー参加記念ポストカードの作成 ホームページ用フットパスコース紹介動画の作成	コースサインの設置位置及び表示するメッセージ等の検討 フットパスコースの安全管理 唾液アミラーゼストレス度検査の運用	今金体操の考案・実演指導 ノルディクポールを使った歩き方指導 コースサインの設置位置及び表示するメッセージ等の検討	コースサインのデザイン検討及び作成
担当チーム	**ツアーチーム**	**写真チーム**	**指導チーム**		**サインチーム**
学科	観光ビジネス学科	（観光ビジネス学科） （心理学科子ども心理専攻）	スポーツビジネス学科	スポーツ指導学科	心理学科子ども心理専攻
関連する学科科目例	ホスピタリティ論 観光サービス論 北海道の観光 観光ビジネス論 国内旅行実務 添乗実務論		スポーツ傷害と予防 生涯スポーツ論 スポーツビジネス論 スポーツイベント論 地域スポーツ経営論 スポーツビジネス特講	スポーツ傷害と予防 生涯スポーツ論 人のからだと健康 地域社会と健康 運動機能と救急処置 健康運動指導演習	子どもの図画工作（基礎） 子どもの図画工作（応用）

表に示す関連すると考えられる学科科目における学習成果が、各チームにおいてどの程度活用されたかについての調査は実施していないが、協議等の様子を観察する限りにおいては、授業科目名や学習した内容を例示し積極的に活用しようとする場面も少なからず散見することができた。学科の授業科目とチームの役割・課題との関連を明確に示すことは容易ではないが、日ごろの学習成果が活用されたことは十分に推察することができる。目的達成のためのミッションや課題に対して、日ごろの学びとの関連が考えられる学科の学生で組織した今回のチーム編成では、チーム内でのコミュニケーションと協議は

円滑に進められたが、他チームの進捗状況や各チームの抱える問題の共有という点においては十分とは言えなかった。しかし、こうした今年度の組織体制にあっても、注目すべき動きも見られた。

「サインチーム」の学生は、授業(実習)の関係から今金町で実施するフィールドワークに参加することができなかったが、「指導チーム」が撮影してきた動画による情報や綿密な打ち合わせにより、コースサインの作成をおこなった。こうしたチームの垣根を越えた連携は、サインチームと指導チームに見られたものの、他はチーム内での協議が中心となり、チームを超えた意見交換などの機会を十分に持つことはできなかった。チームを超えて議論することは、自チームの役割を全体のミッションの中で確認する機会となるともに、客観的な第 3 者の意見をもらう機会ともなることから、定期的な情報共有・交換の場は必要ではないかと考える。今後のプロジェクト推進には、特に重視したい点である。

しかしながら、学科の学習と課題との関連を考慮しチーム編成したことは、学内では提供することのできない実践的な学習機会を提供することができ、本研究の成果の一つであると考える。

2012 年 8 月に、中教審より答申された「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」は、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換を求めている。本学においても、アクティブ・ラーニングによる授業「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」が展開されているが、成果とともに多くの課題も指摘されている。今年度の本研究における教育的成果が、今後ますます重視される能動的学修の展開を考える上での参考資料となることを期待したい。

本研究に参画した学生の多くは、今金町の所在地さえも知らない状態からスタートした。しかし、訪問を重ねるにつれて今金町の魅力を各自の視点で発見し、自らの言葉で説明できるようになってきた。学生の事後レポートからは、今金町の魅力とともに、お世話になった町関係の方々への謝辞がつづられていた。そして、モニター参加者からの学生への感謝の言葉は、学生に大きな自信と次の活動への意欲を与えたものと思う。

2　地域観光振興の視点からみた成果と課題

観光ビジネス学科　丹治　和典
観光ビジネス学科　千葉　里美
（ツアーチーム担当）

本年度の今金プロジェクトを地域観光振興の視点から総括する。本年度で 5 年目を迎えた同プロジェクトは開始当初から観光による地域産業の活性化および交流人口の増加を目指して、本学と今金町との連携事業として実施されてきた。この背景には、もちろん今金町だけではなく全国の各地域を取り巻く状況がある。

平成 19（2007）年に施行された「観光立国推進基本法」の基本理念の一つに、“活力に満ちた地域社会実現”がある。そして、同年に出された「観光立国推進戦略会議」の報告書には、“地域の固有の宝を生かした、個性豊かな地域づくり”が観光立国戦略の一つの柱として提起された。いずれも、21 世紀に入り、観光による交流人口の増大が国の経済的・社会的発展に大きくかかわることが強調されるなか、各地域が自らの地域資源を発掘し、観光資源としての効用を活かす作業が各地で展開されている。ここで指摘

された経済的・社会的発展は国という枠にとどまらず、各地域においても同時に遂げられなければならない目標となっている。観光立国の実現に関する施策は、地域における創意工夫を生かした主体的な取組みを尊重しつつ、地域の住民が誇りと愛着を持つことのできる活力に満ちた地域社会の持続可能な発展を通じて国内外の観光旅行を促進することが、将来にわたる豊かな国民生活の実現のために特に重要であるという認識のもとに講じられなければならない。このことに関連して、石森秀三氏(2007)の以下の論説は非常に示唆に富むものである。つまり、「観光客や旅行会社や観光関連企業や名所見物が主役の「従来型観光」の振興だけでなく、地域住民が主役となり、地域住民が誇りを持つことのできる地域資源を持続可能な形で観光者に提供できることによって、地域住民と観光者の双方が感動や幸せを共有できるとともに、地域活性化に貢献できる「新しい観光の創造」をおこなうことが不可欠である。」（石森秀三、2007、「序文　観光による地域再生のためのバイブル」、堀川紀年『日本を変える観光力：地域再生への道を探る』p.ⅱ）というものである。

上記の視点から、今年度の今金プロジェクトの成果と課題を整理してみよう。

（1）地域資源から観光資源へ

昨年度に開発したフットパスの活用方策を具体的に検証するのが今回の研究の主たる目的であった。フットパスの開発によって、地域において身近でさまざまな地域資源が、癒し、健康づくり、自然・環境保護などの価値を付加されることで、魅力ある観光資源となる可能性があることを確認できた。もともと地域資源は、観光行動のさまざまなプロセスと密接に関係するうえ、関係する主体が多岐にわたる。そのため、観光に向けた地域資源の開発を進め、多くの観光客による利用が実現すれば、地域経済に対する波及が期待される。地域資源の開発にあたっては、個別の主体が個別の地域資源を取り扱うのではなく、個別の主体が連携して、地域資源を一体となって開発し、連携させることが求められる。同プロジェクトは町と本学との連携で行われたが、役場職員を中心とした地域の主体的な取組みなくして当初の目標を達成することはできなかった。特に、今回のフットパスの開発過程においてはなおさらである。

地域資源を活かした観光振興は、地域経済に対してさまざまなプラスの影響をもたらすことが期待されるが、その実現は容易ではない。なぜなら、どのような地域資源が観光客にとって魅力あるものなのかが不明であるうえ、一般の商品やサービスと異なり、地域資源は「その土地にしかないもの」であるため、常に提供できるとは限らないからである。今後、マーケティングの技法などビジネスの視点を生かした取組みが一層求められる。他地域では「歴史・文化」や「自然・天然資源」、「食」にあてはまらない地域資源についても、観光における活用が進んでいる。たとえば、農家や漁家における民泊の商品化や、道の駅などの農産物直販所で実施されている加工品などの販売である。今金町の場合は、今後の検討すべき課題である。

観光振興とは地域の個性や持ち味を伸ばし、魅力づくりを行うプロセスにほかならない。　地域を基盤として成立し、地域づくりと密接に関係する観光形態をとるためには、新たな施設設備が原則として不要で、既存の地域資源を活用しつつ、知恵と工夫のソフト面で集客に当ることや企画・運営を自治体や、住民、NPO、地元観光事業者などを受入地域（到着地）側の主導で行うこと、そして保護・保全と利活用の調和がとれ、持続可能な観光をめざす環境共生型であることが不可欠となる。今金町の場合にはこうした体制づくり、組織づくりも課題の一つである。

（2）フットパスを活用したモニターツアーの実施

今年度は昨年度開発した下記の 2 つのフットパス・コースを利用したツアーを造成・実施した。モニターツアーは、平成 28 年 10 月 8～9 日に実施された。ツアーの概要についてはすでに述べてあるので、ここでは事後アンケートの結果を紹介し、成果と課題について言及する。

〈ふれあいコース〉 全長約 6.6 km　所要時間約 1 時間 30 分 神丘墓地～今金町開拓発祥の地～インマヌエル教会～利別大橋～狩場山を望むビューポイント 豊かな田園風景を楽しみながら今金町の歴史を学び、町の成り立ちを知ることができるコース
〈くもかぜコース〉 全長約 7.6 km　所要時間約 2 時間 30 分 デ・モーレンいまかね～総合公園～あったからんど～光大橋～3･4･5 南通り～後志利別川河川敷 市街地を中心としたコースで、途中にはさまざまな施設があり飲食や休憩をとりながら風景も楽しむことができるコース

神谷由紀子氏（2014）の『フットパスによるまちづくり』を参考にし、フットパスについて簡単に整理しておこう。

フットパスは、地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことのできる小径をいう。一見資源がないように見える地域でもいい感性さえあればフットパスはできるとされる。フットパスはその地域がどんなまちなのか、景色、文化、歴史、生活すべてを体で感じ取ることである。つまり、心象風景のような心に残る景観をつないでコースにすることが大切なのである。名所旧跡も、観光として訪れるよりも、周囲の景観や歴史とあいまって印象の強い新鮮な体験として忘れられない旅になる。また、フットパスは歩く人を楽しくさせるだけでなく地元の人々をも地域の魅力と誇りに目覚めさせ、両者を一緒にまちづくりに引き込む力を持っている。この点はまさに前述の地域資源を観光資源にする過程で確認されたことである。

さらに、神谷氏はフットパスがまちづくりに強くかかわることについて論説しているが、“まちづくり資源の発見”や“プラットフォームの形成”については今回のプロジェクトを通して検証された。つまり、町の成り立ちや性格、そして魅力が浮き彫りになり、本学学生やモニターツアー参加者との交流を通して町民の間に外からの人たちを受け入れる態勢ができ、逆に自らが住む町に対する愛着を醸成する契機となったことが成果として挙げられる。

今回のプロジェクトではフットパスを主要なメニューとしたモニターツアーを実施したが、この企画はフットパスが観光として有効かどうかを見極めたいとする企図によるものであった。このことに関連して、フットパスと観光は異なるという見方について触れる必要がある。この見解には、観光が市場経済からの発想であるのに対し、フットパスは地方自治からの発想であること、そして、観光は人間の快楽の部分の楽しみ、フットパスは人間の精神的な部分の楽しみであることがその根底にある。しかし、一方、観光は経済的な効果と社会的な効果を併せ持つとする考え方もあり、これまで述べてきたようにフットパスも２つの側面をもっていると捉えることができる。ただし、「フットパスが地元のガイドがボランティアで案内する観光の一つと思われるであろう。まちづくりとの関係でも、人を集める観光の一つとし

てしかフットパスを捉えていない。これではフットパスから何も生まれない。」(p.185) とする点や「フットパスと観光は絶対違う。フットパスによって後に観光ができてくることはあるけれど、フットパス＝観光ではない。」(p.186) という神谷氏の指摘は観光によるまちづくりを推進していく者として肝に銘じておくべきである。

最後に、モニターツアーの事後アンケート結果（後添、資料）からフットパスの活用について考慮すべき点を概述する。

昨年 10 月に実施されたフットパスを中心としたツアーには 14 名の参加があった。ツアー全体としては概ね好意的な評価であったが、特に、初日の「旧石器文化館・資料館」や「じゃがいも選果場、「農業体験（トマト、シイタケ収穫」」「夕食・散策」に対する満足度が高く、期待度をかなり上回った。「フットパス」は 2 日目に行われたせいか、また、町が主催するイベントの一つとして行われたことによるものなのか、満足度はそれほど高くはなかった。町の郊外をルートとしたコースに対する評価が思ったほどではなかったことから、天候が良くなかったせいも考えられる。

「フットパス」自体についての満足度は、“くもかぜコース”、“ふれあいコースのいずれも 6 割以上の参加者が満足したと答えており、“ふれあいコース”に参加した人の約 3 割が大変満足したと答えている。フットパスの本質とも言える、景観を楽しむことや地域の人たちとの交流については、アンケートの自由記述欄にある“町内の人たちとのふれあいが良かった”“清潔で穏やかな町のイメージをもった”などの回答から一定の成果があったものと推察できる。一方、“距離の表示がもっとほしい”“立ち寄りたいがお店が開いていない”“お土産を買う場所がなかった”などから今後の課題がうかがわれる。いずれにしても、フットパスを今回のようにパッケージツアーとして盛り込むことには、天候などの外的条件の問題がある。フットパスを楽しむ立場から言えば、“行きたいときに行く”ことを可能にするために、着地型観光の対応が必要である。つまり、現地でいつでも対応できる仕組みをつくることである。

3　今金フットパスコースの活用方策と指導チームの活動を振り返って

スポーツ指導学科　新井　貢
非常勤講師（健康運動指導士）　本多　理紗
（指導チーム担当）

①より多くの人に活用されるコースとなるために

今年度、検証したフットパスコースは、田園フットパスコース（約 8.5Km、2 時間）、くもかぜコース（約 7.6Km、2 時間 30 分）、ふれあいコース（約 6.6Km、1 時間 3.分）、ショートフットパスコース（約 4.6Km、2 時間）の 4 コースである。いずれのコースも歩くための所要時間は、２時間前後必要となる。実際に歩いてみると魅力のあるコースであることは、十分に体感できるが、2 時間という所要時間は、半日の日程が確保されているイベントなどでなければ、コースの体験そのものが難しいと言わざるを得ない。そこで、この魅力あるコースを、多くの人がより気軽に活用できるようにするためには、各コースに３０分程度で完歩できるショートバージョンのコースを複数パターン用意することが必要ではないかと考える。

たとえば、ふれあいコースであれば、スタート地点から総合運動公園内を巡るのは「アップダウン健康コース」、光大橋と旧国鉄用地を巡るのは「絶景ポイントコース」、また、あったかランドでの温泉や

食事を楽しむことをフットパスコースの一部として取り入れた「ゆったり満腹コース」なども考えられる。短時間でも気軽に体験でき、数回に分けてコース全体を歩くことも可能となる。

さらに、くもかぜコースの神丘墓地やインマヌエル教会などは、実際に訪れることによってその魅力を体感できる必見の場所がある。歩くことを目的としたフットパスコースではあるが、あえて時間のない人には「車で巡っても十分楽しめます」などのキャッチコピーで、今金町の歴史や魅力を伝えることができれば、「次は歩いてみようか」とリピーターになってくれることも期待できる。

このように、既存コースをバラエティに富んだショートコースで分割することによって。子どもから高齢者まで、だれもが気軽に体験ができる「今金フットパスコース」となるのではないかと思う。

②学内での打ち合わせの充実が成果に繋がった

今年度は、指導チームとして教員２名（男女各１名）、学生 10 名（男女各５名）の 12 名体制で、「フットパスコースの確認及び当日の指導」、「サイン及び設置場所の選定、設置」、「今金健康体操の提案及び当日の指導」「ストレスチェックの実施及び分析」の４つの役割を担当した。２回の事前現地踏査をはじめ学内においても他チームと情報を共有しながら準備を進め、当日の指導に至った。

７月に行った１回目の事前踏査は、あいにくの悪天候であったが、ビデオを活用し詳細に記録することができたので、当日参加できなかった学生やサインチームの学生・教員にも現地や事前踏査の状況を知らせることができ、理解を深めることができた。

その後、９月に行った２回目の事前踏査では、サインチームから提示された原案を持参し、モニターツアーと同じ日程で実際にサインの設置・確認・撤去を行った。その際に、コースサインのデザインやメッセージなどの改善すべき点の確認を行った。大学に戻り、再度サインチームへ修正内容の提供と調整を行い、最終的なコースサインの決定に至った。

また、今金体操については、過去の映像を参考に、学生自らが考案した簡単な体操を、学内において繰り返し練習し、２回目の事前踏査の際に実演するとともに、ステージでの立ち位置や、実際に参加する町民への指導法などを確認した。唾液アミラーゼによるストレスチェックも行ったが、当日の参加者の流れが把握できないため、不安要素を残すこととなった。

10 月に実施したモニターツアーの「健康まつり」の健康体操に関しては、初めて参加する学生スタッフもいたものの学内での何度も練習を重ねた成果によって、たいへん好評であった。フットパスについては、心配された天候も終了間際まで持ちこたえ、参加者の満足度も高い結果となった。サインそのものについては問題なかったものの、事前にサインの説明がなかったことや、一部の設置場所などに課題を残した。ストレスチェックはエラーが続出し、被験者が少なかった割には、一定の効果を上げることができた。

今年度の指導チームは、２回の事前踏査とモニターツアー当日でメンバーを固定することができなかったが、学内での打ち合わせを充実させることにより、最終的に多くの成果を残す良い結果につなげることができた。

学生からの無理な提案も多々あったが、今金町担当の佐藤さんをはじめ、笑顔で対応していただいた今金町の関係者に深く感謝し総括とする。

《資　料》

・モニター事前アンケート

・モニター事後アンケート

「秋のいまかねモニターツアー」
参加者事前アンケート

－2016.10.8 実施－

参加者　１４名

秋のいまかねモニターツアー参加者　事前アンケート(10月8日)

氏　名		性　別	（　男　・　女　）

問1．あなたは、今金町のことを知っていましたか。

1．知っていた　　2．知らなかった　　3.その他(　　)

問2．これまでに今金町を訪れたことがありますか。

1．訪れたことがある　　2．訪れたことはない　　3.その他(　　)

問3．今回、ツアーに参加した動機として、あてはまるものすべてに○をつけてください。

1．今金町を訪れたことがないから　　2．ツアーのプログラムが充実していたから

3．健康に関心があるから　　4．フットパスコースを歩いてみたいから

5．参加費が安いから　　6．誘われたから

7．その他　（具体的に　　）

問4．あなたは、健康を意識した生活していますか。あてはまるものを１つ選んで○をつけて下さい。

1．とても意識している　　2．まあ意識している　　3.あまり意識していない

4．まったく意識していない　　5．その他(　　)

問5．前問(問4)で「1．とても意識している」、「2．まあ意識している」と答えた方のみ伺います。

あなたが健康のために行っていることを、具体的にご記入ください。

（例）週末に、3Km程度のウォーキングを行っている。

問6．今回のツアーで、楽しみにしていることについて、あてはまるものすべてに○をつけてください。

1．今金町の観光(今金ミステリープラン)　　2．今金町での食事

3．フットパスコースの体験　　4．宿泊と温泉

5．その他　（具体的に　　）

ご協力ありがとうございました。

問1. あなたは、今金町のことを知っていましたか。

	全体	性別	
		男性	女性
1．知っていた	9 64.3%	5 71.4%	4 57.1%
2．知らなかった	5 35.7%	2 28.6%	3 42.9%
3.その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%

問2. これまでに今金町を訪れたことがありますか。

	全体	性別	
		男性	女性
1．訪れたことがある	5 35.7%	3 42.9%	2 28.6%
2．訪れたことがない	9 64.3%	4 57.1%	5 71.4%
3.その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%

問3. 今回、ツアーに参加した動機として、あてはまるものすべてに○をつけてください。〔MA〕

	全体	性別	
		男性	女性
1．今金町を訪れたことがないから	8 57.1%	5 71.4%	3 42.9%
2．ツアーのプログラムが充実していたから	7 50.0%	4 57.1%	3 42.9%
3．健康に関心があるから	6 42.9%	4 57.1%	2 28.6%
4．フットパスコースを歩いてみたいから	8 57.1%	5 71.4%	3 42.9%
5．参加費が安いから	9 64.3%	6 85.7%	3 42.9%
6．勧われたから	2 14.3%	1 14.3%	1 14.3%
7．その他	1 7.1%	1 14.3%	0 0.0%

問4. あなたは、健康を意識した生活していますか。あてはまるものを1つ選んで○をつけて下さい。

	全体	性別	
		男性	女性
1．とても意識している	5 35.7%	3 42.9%	2 28.6%
2．まあ意識している	8 57.1%	4 57.1%	4 57.1%
3．あまり意識していない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
4．まったく意識していない	1 7.1%	0 0.0%	1 14.3%
5．その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%

問6. 今回のツアーで、楽しみにしていることについて、あてはまるものすべてに○をつけてください。〔MA〕

	全体	性別	
		男性	女性
1．今金町の観光(今金ミステリープラン)	11 78.6%	6 85.7%	5 71.4%
2．今金町での食事	8 57.1%	5 71.4%	3 42.9%
3．フットパスコースの体験	11 78.6%	5 71.4%	6 85.7%
4．宿泊と温泉	9 64.3%	5 71.4%	4 57.1%
5．その他	2 14.3%	1 14.3%	1 14.3%

「秋のいまかねモニターツアー」
参加者事後アンケート

－2016.10.9 実施－

参加者　１４名

秋のいまかねモニターツアー参加者　事後アンケート(10月9日)

氏　名		性　別	（　男　・　女　）

問1．ツアーをふりかえり、以下の項目について、あなたの考えに最も近いものを一つ選び○を付けてください。
また、選んだ理由についても具体的に記述してください。

（1）今金ミステリープラン(1日目の町内観光)について

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

（2）宿泊したホテル(クアプラザピリカ)について

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

（3）1日目の夕食プログラムについて

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

（4）2日目のシンポジウムについて

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

（5）今金健康体操について

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

(6) 今金フットパスについて

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

(7) 減塩今カレーの昼食について

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

(8) 2日間のプログラム内容について

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

問2．今回のプログラムのツアーであれば、料金はいくらが良いと思いますか。具体的金額をご記入ください。

円

問3．フットパスコースについて、以下の質問にお答え下さい。

(1) あなたの歩いたコースについて該当するものに、○印を付けてください。

1．くもかぜコース(神丘コース)　2．ふれあいコース(街中コース)

(2) コースの歩きやすさについて

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

(3) コースからの眺望について

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

(4) コースサインについて

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

(5) 唾液アミラーゼストレス度チェックについて

1．とても良かった　2．良かった　3.あまり良くなかった　4.全く良くなかった

【選んだ理由】

(6) その他「フットパスコース」について、ご意見等がございましたら、ご自由にお書き下さい。

問4．参加記念のポストカードについてのご意見や感想等をお書き下さい。

問5．今回の「秋のいまかねヘルシーツアー」を総合的に評価し、あなたの考えに最も近いものをひとつ選んで○印をつけてください。

1．大いに満足　2．満足　3.やや不満　4.不満

問6．ツアーをふりかえりご意見や感想等を、ご自由にお書き下さい。

問7．最後に、今金町についての感想を、ご自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。

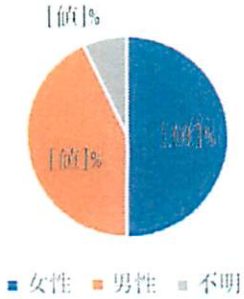
「秋のいまかねモニターツアー」参加者事後アンケート結果

2016.11.20 提出

ツアーチーム

1. モニター参加者の性別について

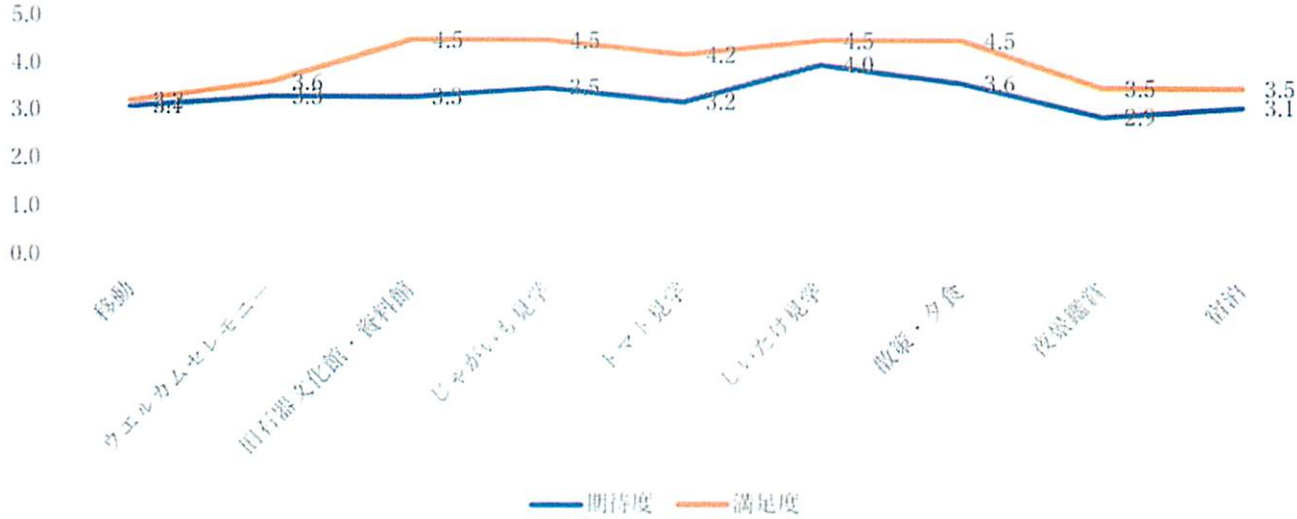
図表1.モニター参加者の性別(N=14)



2. ツアー2日間の行程内容に関する期待度と満足度について

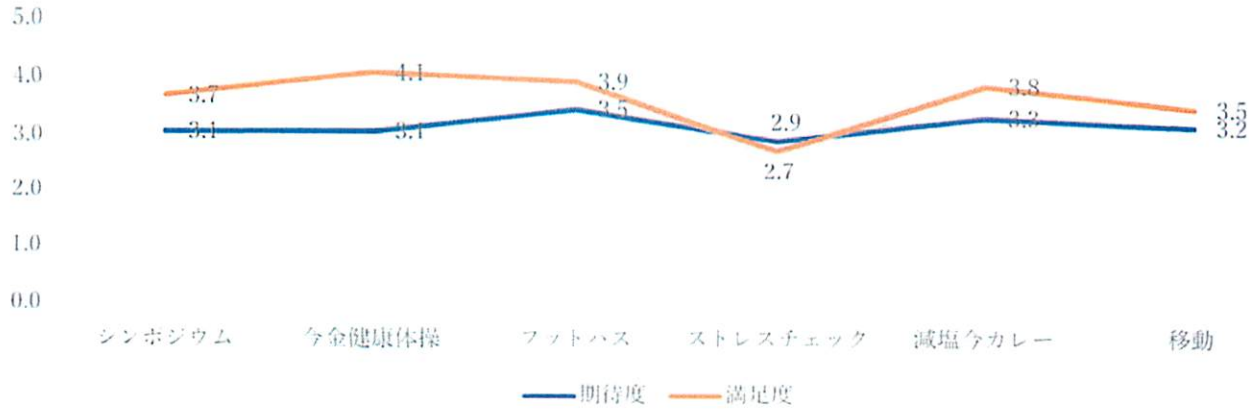
2-1.行程１日目

図表2.ツアー1日目の期待度と満足度(N=14)



2-2.行程２日目

図表3.ツアー2日目の期待度と満足度(N=14)

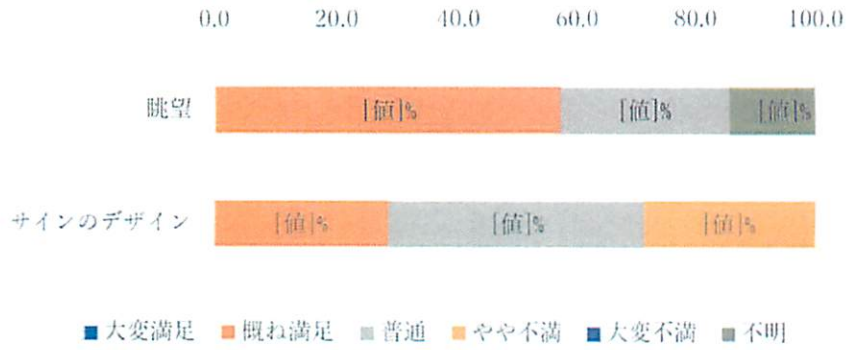


3.「今金フットパス」について

3-1.「くもかぜコース(神丘コース)」参加者

①コースの満足度

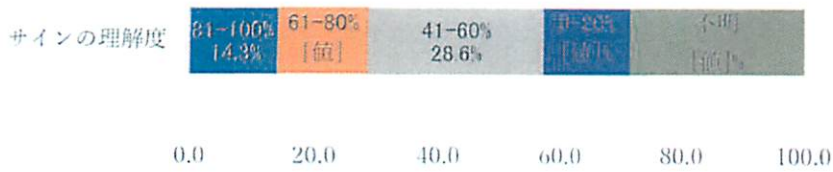
図表4.くもかぜコース(神丘コース)満足度(N=7)



②サインの理解度

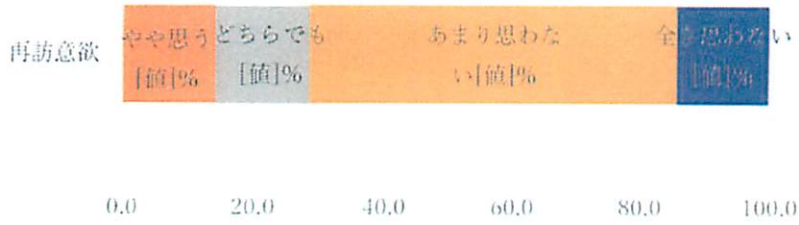
次にサインの理解度について評価した。

図表5.くもかぜコースのサイン理解度(N=7)



③再訪意欲

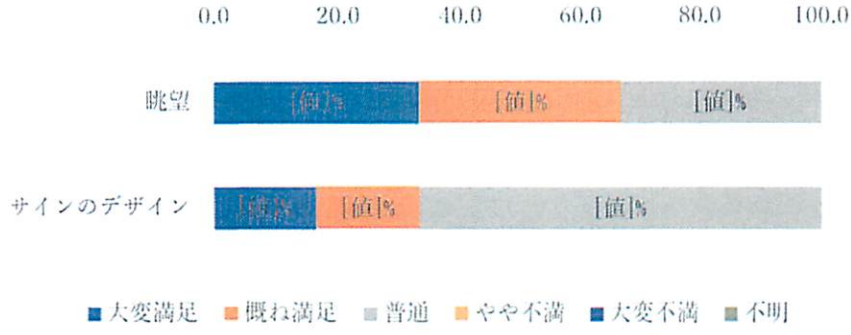
図表6.くもかぜコース再訪意欲(N=7)



3-2.「ふれあいコース(街中コース)」参加者

①コースの満足度

図表7.ふれあいコース(街中コース)満足度(N=6)

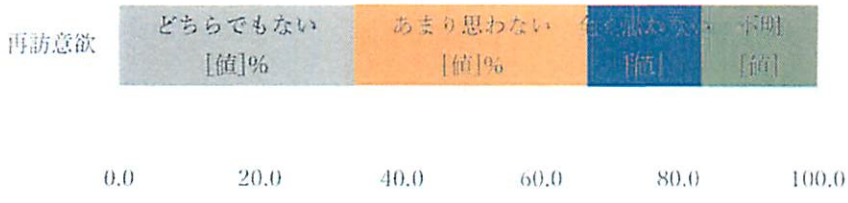


②サインの理解度

図表8.ふれあいコースのサイン理解度(N=6)

③再訪意欲

図表9.ふれあいコース再訪意欲(N=6)



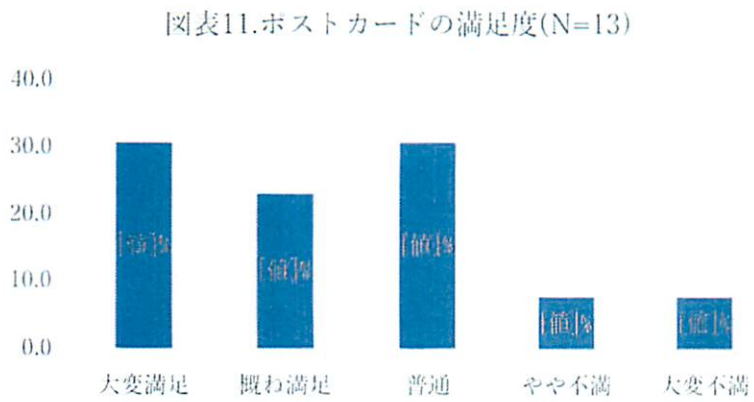
3-3.「今金フットパス」普及への対応策

図表 10.「今金フットパス」普及への対応策

対応策(自由回答)	件数
残り何 Km といった距離の表示	3
ポイントの見どころや説明がほしい	2
町民と触れ合える環境作り	1
主催者・旅行会社等の積極的な PR	1
買い物や休憩スペースをコース内に盛り込む	1
今金に来るまで遠いいので、きたら 2 泊できるようコースを増やす	1
コースの終点を温泉にし、汗を流せるコース作り	1
地域ガイドの育成とガイドとのフットパス巡り	1
SNS による情報発信	1
地域のイベントとのコラボ	1

4.ツアー参加記念品の今金町ポストカードについて

4-1.満足度



4-2.ポストカードの題材やハガキに関する意見

図表 12.お土産ポストカードの題材・ハガキ全体関する意見

	意見(自由記述)
題材に関して	歴史的建造物を取り入れる(光大橋など)
ハガキ全体に関して	地味すぎる
	フチがありすぎ
	ストーリー性を持たせることは良い
	文字を小さくし、写真を強調すべき
	写真と文字の意図が理解できない
	文字にもう一工夫ほしかった

5.ツアー全体について

5-1.ツアー全体の総合点

図表 13.ツアー総合点

評価	人数	%
0-20 点	0	0.0
21-40 点	0	0.0
41-60 点	0	0.0
61-80 点	9	69.2
81-100 点	4	30.8

5-2.ツアーを振り返った意見・感想

図表 14.ツアーへの意見・感想

	意見・感想(自由記述)	件数
マイナス点	今金の魅力が十分伝わってこない	1
	退屈させない工夫作りがほしい	1
	町の資料は事前に配布してほしい	1
	ツアー内容が盛り込みすぎ	1
	体育館のプログラムはいらない	1
	旅行会社のツアーと比較すると雑な感じがした	1
	学生はモニター参加者に気を使いすぎている	1
プラス点	町・学生・教員のおもてなしで安心して旅行できた	5
	大変充実した(2 日目の天候がよければ・・)	2
	また参加したい	1
	農家さんとの交流ができてよかった	1
	事前調査の工夫が感じ取れた	1
	カレーが美味しかった	1

5-3.ツアー価格

図表 15.ツアー適正価格

価格帯	人数
6,001-7,000 円	1
7,001-8,000 円	2
8,001-9,000 円	0
9,001-10,000 円	5
10,001-11,000 円	1
11,001-12,000 円	0
12,001-13,000 円	0
13,001-14,000 円	0
14,001-15,000 円	4
平均	**¥11,038**

5-4.本ツアーの口コミ内容(上位３点)

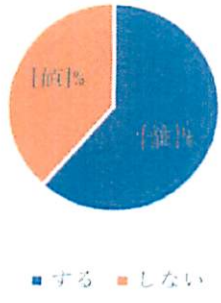
図表 16.本ツアーの口コミ内容

	1 位	2 位	3 位	合計
ピリカ旧石器文化	6	3	3	12
フットパス	4	1	1	6
食(美味しさ・お洒落)	0	2	3	5
今金男爵	0	3	0	3
大学地域貢献・学生評価	2	2	1	5
ミニトマト	1	1	0	2
ダム・魚道	0	1	1	2
町民との交流	0	1	1	2

6.今後のモニターにおける札幌と今金町の移動に関する障害について

6-1.運転の有無

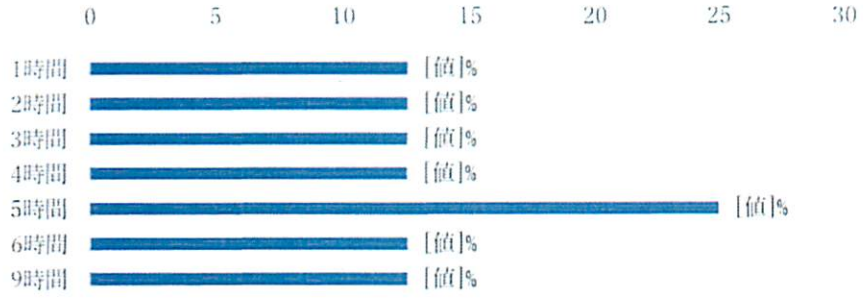
図表17.モニター参加者の運転有無(N=13)



6-2.日帰りと宿泊を伴う場合の適当な運転可能時間

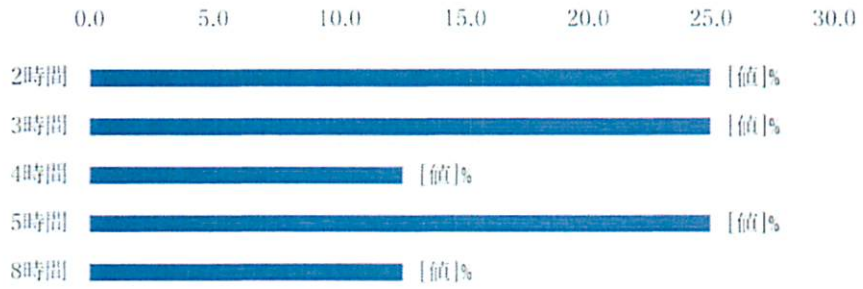
①日帰りの場合

図表18.苦にならない運転時間(日帰りの場合)(N=8)



②宿泊を伴う場合

図表19.苦にならない運転時間(宿泊を伴う場合)(N=8)



6-3.ドライブとして適当な時間

図表 20.快適なドライブ時間

全体平均	3.42 時間
男性平均	3.58 時間
女性平均	3.28 時間

平成 28 年度奨励共同研究（特別教育プロジェクト推進経費）助成課題

高齢者の運動を通じた健康の維持・増進ー清田区と美唄市を対象にー

（代表研究者）　スポーツ指導学科　国田賢治
（共同研究者）　スポーツ指導学科　清田岳臣
スポーツ指導学科　阿南浩司
スポーツ指導学科　後藤ゆり
（協力研究者）　日本医療大学　清田直恵
金沢学院大学　藤原勝夫
北海道文教大学　矢口智恵

目次

(1) 清田区における健康づくり活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
(2) 清田区の地区ウォーキングにおける心拍数、歩行速度および運動強度の
測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
(3) 美唄市における健康づくり活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
(4) 美唄サテライトキャンパス平成 24 年度～平成 28 年度・・・・・・・・26
(5) 美唄市のウォーキング活動における心拍数、歩行速度および運動強度の
測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

(1) 清田区における健康づくり活動

平成 10 年、清田区は、札幌市が提言した健康札幌 21 の「自分の健康は自分で守ろう」のスローガンのもと、生活習慣病予防対策の一環として、区民に対し、健康づくり活動を現在に至るまで行っている。

清田区独自の健康づくり活動として、「健康＆介護予防フェア」、「地域健康教室」、「健康アップ支援事業」という 3 つの取り組みがなされている。

「健康＆介護予防フェア」とは区民に対する健康づくり及び介護予防の意識啓発などが主な内容の事業である。「地域健康教室」は医師や薬剤師などを招いて、保健・医療の最新で新しい情報を提供することで、区民一人ひとりが健康づくりを実施できることを目指すという活動である。「健康アップ支援事業」では、地域で健康づくりを推進する人材を育成するために、地域住民が自主的に健康づくりの企画・実施をしていくための健康づくりの場を提供する取り組みを行っている。

高齢者の健康づくり自主団体の清田 Hi 遊会と連携してさまざまな健康づくり活動にも力を入れてきている。それらの事業は「健康づくりリーダー養成研修部」、「清田区歩こう会」、「地区ウォーキング」の 3 つである。「健康づくりリーダー養成研修部」とは、清田区で健康づくりの中心となる人材を養成するための取り組みを行っている。この研修を受講した人のほとんどが清田 Hi 遊会に入会している。2 つ目の、「清田区歩こう会」は、区民の健康増進を図り、ウォーキング活動を通し清田区のウォーキング人口を増やし、ウォーキングにおける健康づくりを推進していく取り組みである。3 つ目は、「地区ウォーキング」という取り組みで、2 つの目的を持って行っている。目的の 1 つ目は、生活習慣病や寝たきりを防止し、活気あるまちづくりを進めるため、目的の 2 つ目は、地域の健康づくりに興味を持ってもらうことである。

清田区における健康づくり活動には、清田区独自で行っている事業および、清田 Hi 遊会と連携して行っている事業がある。

清田区独自で行っている事業は、1) 健康＆介護予防フェア、2) 市民健康教育（地域健康教室)、3) 元気な街づくり支援事業「健康アップ支援事業」である。

1）健康＆介護予防フェア

1. 事業概要

健康増進普及月間にあわせて保健福祉部で実施する健康や介護予防に関する普及啓発のイベントである。

2. 目的

①区民に対する健康づくり及び介護予防を知識の普及・意識啓発、保健福祉部における事業及び、特定保健診査等の紹介・PR を行う。

②関係団体・ボランティアとの協働実施により地域における連携を促進している。

3. 実施内容

国の「健康増進普及月間」にあわせて、健康と介護予防を目的とした様々な事業を毎年 9 月に開催し、子どもから高齢者まで幅広い参加者を目指して実施している。

4. 実施結果

実施日：9 月 10 日（土）

保健福祉課・保険年金課・健康・子ども課の 3 課合同で実施した。

清田区食生活改善推進員協議会、医師会、歯科医師会、薬剤師会、健康づくりリーダー、清田 Hi 遊会など関係団体・ボランティア等 19 団体と協力して実施した。

実施内容：以下のとおり

親子対象コーナー、パネル展示、薬の相談＆血管年齢チェック、がん検診の普及・啓発コーナー、歯科相談・歯科ドック、食生活改善展、生活衛生展、針，温灸、あんま、指圧、マッサージ体験、今日から始める介護予防、健康づくり講演会、体力測定、特定健診・特定保健指導 PR、肺年齢測定、活動紹介等。

2）市民健康教育（地域健康教室）

1. 事業概要

医師会、歯科医師会、薬剤師会からの講師による保健・医療の正しい情報を提供する講座である。

2. 目的

保健・医療の最新で正しい情報を提供することで、区民一人ひとりが健康づくりを実施できることを目指す。

3. 実施内容

札幌市医師会、札幌歯科医師会、札幌薬剤師会の各幹事と連絡調整を行い、日程・内容について検討し実施した。

周知に関しては、庁舎内にチラシ・ポスターの設置、公報さっぽろへの掲載の他、清田 Hi 遊会の会報送付時にチラシを同封し、参加者を募った。

＜地域健康教室＞

・10 月 26 日「知っておきたいノドの病気　声がれを中心に」

・11 月 16 日「冬に流行る感染症～ノロウイルス胃腸炎を中心に～」

・1 月 26 日「血液の病気と最近の治療について」

知っておきたいノドの病気　声がれを中心に

平成28年度　地域健康教室　ご案内

医療と保健にまつわる話題の最新情報をテーマに、清田区の医療機関の医師を講師に招いて講演会を開催します。

■日　時：平成２８年１０月２６日（水曜日）
午後2時～午後3時

■会　場：清田区役所 2階 保健センター講堂
（清田区平岡１条１丁目）

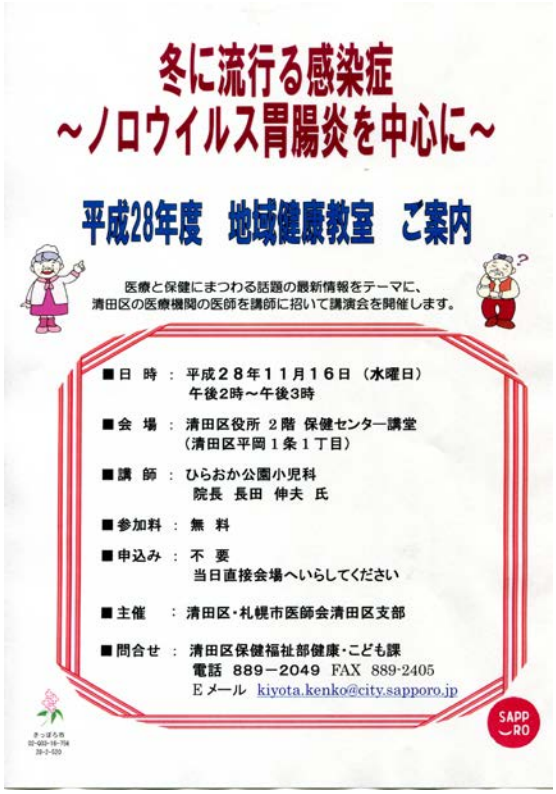
■講　師：アリス耳鼻咽喉科
院長 唐崎 玲子 氏

■参加料：無 料

■申込み：不 要
当日直接会場へいらしてください

■主　催：札幌市医師会清田区支部

■問合せ：清田区保健福祉部健康・子ども課
電話 889－2049 FAX 889-2405
Eメール kiyota.kenko@city.sapporo.jp



冬に流行る感染症
～ノロウイルス胃腸炎を中心に～

平成28年度　地域健康教室　ご案内

医療と保健にまつわる話題の最新情報をテーマに、清田区の医療機関の医師を講師に招いて講演会を開催します。

■日　時：平成２８年１１月１６日（水曜日）
午後2時～午後3時

■会　場：清田区役所 2階 保健センター講堂
（清田区平岡１条１丁目）

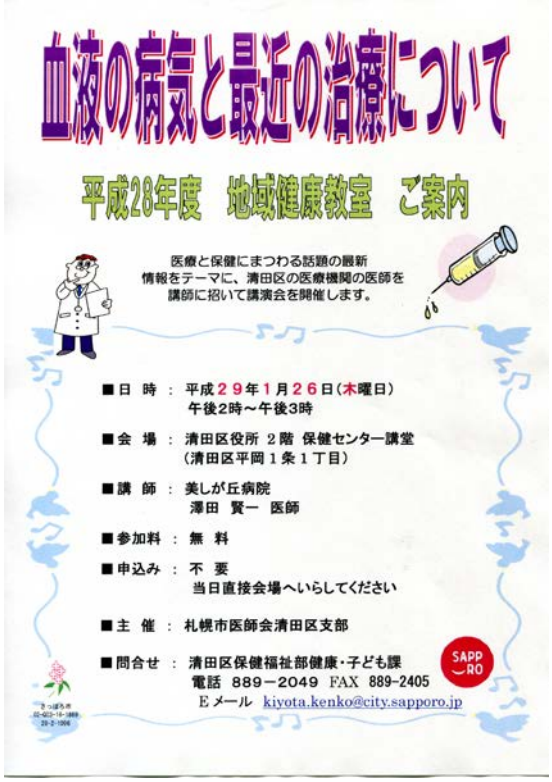
■講　師：ひらおか公園小児科
院長 長田 伸夫 氏

■参加料：無 料

■申込み：不 要
当日直接会場へいらしてください

■主催　：清田区・札幌市医師会清田区支部

■問合せ：清田区保健福祉部健康・こども課
電話 889－2049 FAX 889-2405
Eメール kiyota.kenko@city.sapporo.jp



血液の病気と最近の治療について

平成28年度　地域健康教室　ご案内

医療と保健にまつわる話題の最新情報をテーマに、清田区の医療機関の医師を講師に招いて講演会を開催します。

■日　時：平成２９年１月２６日（木曜日）
午後2時～午後3時

■会　場：清田区役所 2階 保健センター講堂
（清田区平岡１条１丁目）

■講　師：美しが丘病院
澤田 賢一 医師

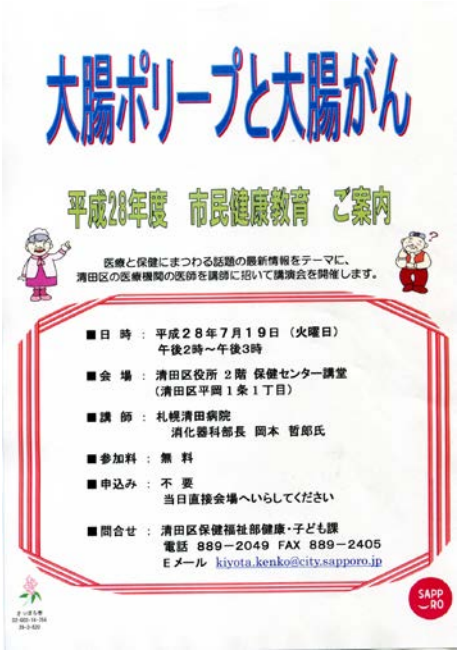
■参加料：無 料

■申込み：不 要
当日直接会場へいらしてください

■主　催：札幌市医師会清田区支部

■問合せ：清田区保健福祉部健康・子ども課
電話 889－2049 FAX 889-2405
Eメール kiyota.kenko@city.sapporo.jp

＜市民健康教室＞
・6 月 22 日「耳鼻咽喉科領域の病気～特に高齢者に多い難聴・耳鳴・がんなど～」
・7 月 19 日「大腸ポリープと大腸がん」



3)元気なまちづくり支援事業「健康アップ支援事業」

１．事業概要
　3 階健康増進フロアを一般開放し、地域住民が自主的に健康づくりを企画、実施していくための組織づくりの場として提供している。隔週の火曜日ではスポーツ健康指導研究科の大学院生の新潟氏が担当している。

2. 目的
　地域住民の健康づくり活動を推進する。
健康づくりを企画・実施するグループに対して育成や支援を図っていく。
地域で健康づくり活動を推進する人材を育成する。

3. 実施内容
　健康増進フロアの一般開放（施設管理は外部委託）
ア　日時
　　毎週土曜日（祝日、年末年始を除く）　午前 9 時 30 分～午後 4 時 00 分

隔週火曜日　　午前 10 時～11 時

イ　対象者

18 歳以上の区民（市民も可）

ウ　運動教室

ダンベルとストレッチ（初心者向き）　午前 10 時 30 分～午前 11 時 20 分

リズムウォーキング（運動経験者向き）午後 2 時 00 分～午後 2 時 50 分

清田 Hi 遊会との連携事業には、1. 健康づくりリーダー養成研修部、2. 清田区歩こう会、および 3. 元気なまちづくり支援事業「ウォーキング健康づくり事業」地区ウォーキングがある。

1. 健康づくりリーダー養成研修部（清田 Hi 遊会）

ア. 事業概要

区民の健康づくりのために地域で活躍できる人材を養成するための研修。札幌市としてのリーダー養成研修は平成 22 年度をもって終了となった。平成 23 年度からは、区独自のプログラムにより実施し、清田 Hi 遊会の人材育成にも力を入れている。

イ. 目的

地域の中で健康づくり運動推進の中心的役割を担い、健康づくり活動を展開・推進できる人材を養成する。

ウ. 実施内容

- 研修受講者

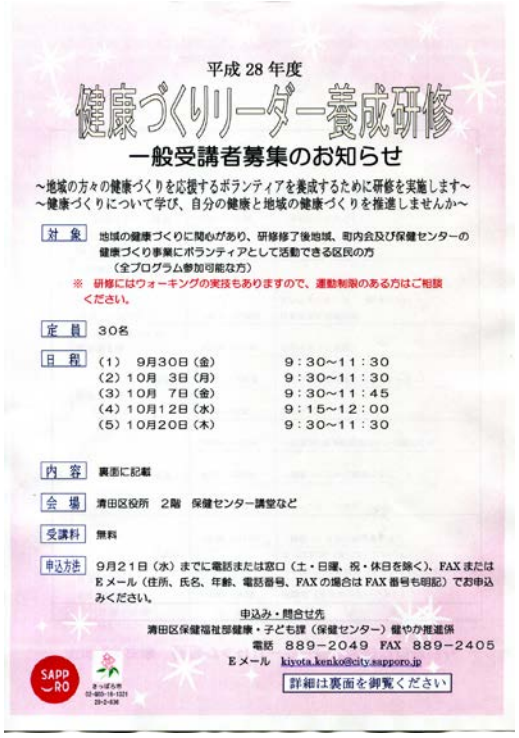
一般公募と推薦で募集を行った。

連合町内会長宅には、推薦依頼文を送付し、まちづくりセンター所長には、公募ポスターの掲示を依頼した。

- 研修内容

平成 22 年度で予算措置がなくなり、平成 23 年度以降は、清田区独自のプログラム（以下のとおり）で実施。受講者には終了賞を授与している。

日程	内容
9 月 30 日（金）	講話「地域における健康づくりリーダーの役割と健康さっぽろ 21(第二次)について」健康づくりのための食生活
10 月 3 日（月）	講話「健康づくりから地域づくり」 清田 Hi 遊会の健康づくり活動の歩み
10 月 7 日（金）	講話「認知症予防はカラダづくりから！」ウォーキング実技
10 月 12 日（水）	行楽弁当の調理実習＆区内ウォーキング
10 月 20 日（木）	清田のまちづくり（地域振興課講話） 先輩リーダーとの交流会



平成 28 年度

健康づくりリーダー養成研修

一般受講者募集のお知らせ

～地域の方々の健康づくりを応援するボランティアを養成するために研修を実施します～
～健康づくりについて学び、自分の健康と地域の健康づくりを推進しませんか～

対 象 地域の健康づくりに関心があり、研修修了後地域、町内会及び保健センターの健康づくり事業にボランティアとして活動できる区民の方
（全プログラム参加可能な方）
※ 研修にはウォーキングの実技もありますので、運動制限のある方はご相談ください。

定 員 30名

日 程
（1） 9月30日（金） 9：30～11：30
（2）10月 3日（月） 9：30～11：30
（3）10月 7日（金） 9：30～11：45
（4）10月12日（水） 9：15～12：00
（5）10月20日（木） 9：30～11：30

内 容 裏面に記載

会 場 清田区役所 2階 保健センター講堂など

受講料 無料

申込方法 9月21日（水）までに電話または窓口（土・日曜、祝・休日を除く）、FAX または E メール（住所、氏名、年齢、電話番号、FAX の場合は FAX 番号も明記）でお申込みください。

申込み・問合せ先
清田区保健福祉部健康・子ども課（保健センター）健やか推進係
電話 889－2049 FAX 889－2405
E メール kiyota.kenko@city.sapporo.jp

詳細は裏面を御覧ください

平成 28 年度 健康づくりリーダー養成研修プログラム

回	日程・会場	時 間	内 容
1	9月30日(金) 区役所2階 保健センター講堂	9:30 ～9:45	開講式（オリエンテーション）
		9:50 ～10:20	「地域における健康づくりリーダーの役割と健康さっぽろ21（第二次）について」
		10:30 ～11:30	「健康づくりのための食生活」
2	10月3日(月) 区役所2階 保健センター講堂	9:30 ～9:35	オリエンテーション
		9:35 ～10:35	「健康づくりから地域づくり」
		10:45 ～11:30	「清田 Hi 遊会の健康づくり活動の歩み」
3	10月7日(金) 区役所2階 保健センター講堂	9:30 ～9:35	オリエンテーション
		9:35 ～10:35	「認知症予防はカラダづくりから！」
	区役所3階 健康増進フロア	10:45 ～11:45	ウォーキング実技
4	10月12日(水) 区役所2階 栄養実習室 平岡樹芸センター	9:15 ～12:00	行楽弁当の調理実習 区内ウォーキング （約4キロ）
5	10月20日(木) 区役所2階 保健センター講堂	9:30 ～9:35	オリエンテーション
		9:35 ～10:30	「清田区のまちづくり」
		10:40 ～11:20	先輩リーダーとの交流会
		11:20 ～11:30	閉講式

2．清田区歩こう会

ア．事業概要

清田区ふれあいプランの中で掲げる「市民参加によるまちづくり」の健康づくりを推進するため年間を通して可能なウォーキングを実施する。

イ．目的

区民の健康増進を図り、「歩きやすい街」、「歩いていて楽しい街」、「歩きたくなる街」を目指してウォーキングを実施するとともに、区内のウォーキング人口を増やし、ウォーキングによる健康づくりを推進する。

ウ．実施内容

清田 Hi 遊会と共催で実施した。

健康づくりリーダー(清田 Hi 遊会)を中心に歩き方の指導を行い、ウォーキング開始前と終了後には、体操を実施した。

エ．実施結果および実施予定

実施内容（日程・コース・参加者）

年３回実施
平成 28 年５月 20 日　平岡公園よくばりコース（約 8.0 Km）
平成 28 年９月 16 日　清田区の史跡探訪コース（約 6.5 Km）
平成 29 年１月 31 日　白旗山かんじきウォーキング（約２.０ Km）

３．元気なまちづくり支援事業「ウォーキング健康づくり事業」

地区ウォーキング

ア．事業概要

平成 17 年より、健康づくりリーダー養成研修修了者（主に清田区 Hi 遊会）の主催で行われている全 4 地区で実施するウォーキング事業。

イ．目的

生活習慣病及び寝たきり等を予防し、活力あふれるまちづくりをすすめるために、気軽にできるウォーキングを普及させる。

地区別に歩くことで、地域の健康づくりに関心を持つとともに、共に歩く仲間がいることを知る。

ウ．実施内容

実施結果を参照。保健センターでは、チラシの作成・配布や年度終了時における反省会の実施等の協力、支援を行っている。

平成28年度 「清田区を歩こう」 全地区版

地区ウォーキングのご案内

清田区では、地区ごとにウォーキングを実施しています。
健康づくりリーダーと一緒に、皆さんもウォーキングを楽しみませんか。
一時間半程度で終了しますので、気軽にご参加ください。お住まいの地区以外の方も参加可能です。
※地区ウォーキング終了後（11月）、各地区の皆勤賞、精勤賞の方には粗品をプレゼント。

全地区共通：出発時間１０時。雨天時は中止です
（集合時間　９時５０分）

清田・真栄地区
日　程　毎月4のつく日（4日、14日、24日）
期　間　4月14日～11月14日
集合場所　清田青空公園（清田中学校付近）【清田4条3丁目】
※集合場所と解散場所が異なり歩く

北野地区
日　程　毎月5のつく日（5日、15日、25日）
期　間　4月15日～11月15日
集合場所　北野中央公園（高木横寄りの東屋）【北野5条4丁目】

里塚・美しが丘地区
日　程　毎月7のつく日（7日、17日、27日）
期　間　4月7日～11月17日
集合場所　里塚・美しが丘地区センター正面広場【里塚2条5丁目】

平岡地区
日　程　毎月8のつく日（8日、18日、28日）
期　間　4月8日～11月18日
集合場所　平岡東光ストア西側駐車場（旧ひな野前）【平岡7条2丁目】

なお、地区ウォーキングは、各地区とも、事故などの対応のための保険加入はしておりませんので、ご了承ください。

SAPPORO

主　催　清田Ｈｉ遊会（清田区健康づくりリーダー）
後　援　清田区保健福祉部健康・子ども課
問合せ　清田区保健福祉部健康・子ども課（保健センター）健やか推進係
電話 889－2049 FAX 889-2405 Eメール kiyota.kenko@city.sapporo.jp

(2) 清田区の地区ウォーキングにおける心拍数、歩行速度および運動強度の測定

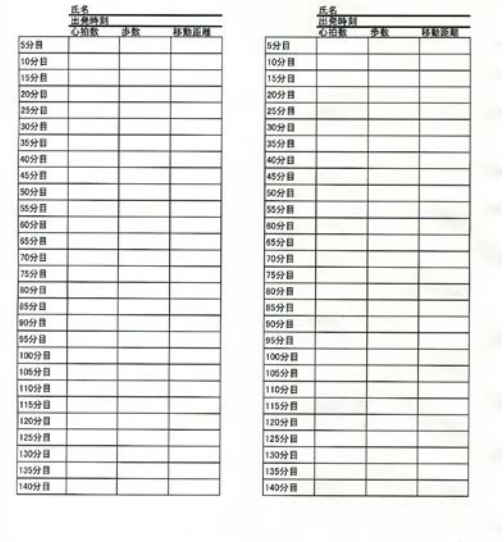
先述した地区ウォーキングは4月7日～11月18日までの期間中、毎月4のつく日は清田・真栄地区、5のつく日は北野地区、7のつく日は里塚・美しが丘地区、8のつく日は平岡地区でウォーキングを行っている。
地区ウォーキングが高齢者にとって最適な運動強度であることを検証する目的で、地区ウォーキングにおける心拍数、歩数および運動強度の測定を行った。

一回目の測定を行う前日（9月16日（金））に、教員と大学院生で測定器(心拍計、万歩計）のチェックを行った。その後、測定に同行する大学生全員を対象に、歩行距離を記録できるスマートフォンアプリのランタスティックが使用できるよう、大学院生から測定方法の説明を受けた。さらに心拍計、万歩計およびランタスティックの測定実践練習を学校のグラウンドで行った。

記入用紙には参加者の氏名、安静時心拍数、運動時心拍数、歩数、移動距離、主観的運動強度を記入する欄があり、測定開始すぐにランタスティックを起動させ、5分ごとに心拍計から心拍数、万歩計から歩数を確認し、さらに、ランタスティックから距離を、主観的運動強度は参加者に運動強度の程度を数字で答えてもらった。この一連の流れを教員、大学院生、大学生で各自シミュレーションをした。

測定当日は、4地区それぞれのウォーキングに同行し、ウォーキング参加者を対象にウォーキング実施前にアンケート調査を行い、その後、胸部に心拍計の送信部を、上肢に心拍計の受信部を、腰部に万歩計をそれぞれ取り付け、上述した測定を5分ごとにした。

以下に、ウォーキング実施時に用いた記入用紙、アンケート用紙、ウォーキング経路とウォーキング活動写真を示す。



氏名
出発時刻

	心拍数	歩数	移動距離
5分目			
10分目			
15分目			
20分目			
25分目			
30分目			
35分目			
40分目			
45分目			
50分目			
55分目			
60分目			
65分目			
70分目			
75分目			
80分目			
85分目			
90分目			
95分目			
100分目			
105分目			
110分目			
115分目			
120分目			
125分目			
130分目			
135分目			
140分目			

氏名
出発時刻

	心拍数	歩数	移動距離
5分目			
10分目			
15分目			
20分目			
25分目			
30分目			
35分目			
40分目			
45分目			
50分目			
55分目			
60分目			
65分目			
70分目			
75分目			
80分目			
85分目			
90分目			
95分目			
100分目			
105分目			
110分目			
115分目			
120分目			
125分目			
130分目			
135分目			
140分目			

等級	主観的運動強度
6	
7	非常に楽である
8	
9	かなり楽である
10	
11	楽である
12	
13	ややきつい
14	
15	きつい
16	
17	かなりきつい
18	
19	非常にきつい
20	

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

年齢＿＿＿＿＿＿

性別＿＿＿＿

既往歴＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

現病歴（投薬状況）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

最も長い仕事歴　（さしつかえなければ、具体的に＿＿＿＿＿＿＿＿＿）
（技術系・サービス・保安・農林漁業・運輸・公務員・事務員・その他（主婦含む）

その仕事に従事していた期間　＿＿＿年＿＿＿月　～　＿＿＿年＿＿＿月
主な作業内容（主に立ったままする仕事・主に座ったままする仕事・両方同程度）

現在の活動

仕事の従事　　有　　無

仕事内容＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

主な作業内容（主に立ったままする仕事・主に座ったままする仕事・両方同程度）

清田 Hi 遊会の会員　　はい　　いいえ

はいで答えた方、会員歴は＿＿＿＿＿＿＿＿年

定期的な運動実施の有無

定期的な運動実施　　有　　無

実施種目は、＿＿＿＿＿＿＿＿＿

１週間で＿＿＿＿＿＿＿＿＿日

運動実施時間は１回につき＿＿＿＿＿＿時間

連絡先

住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

電話番号＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

身のこなし能力に関する質問事項

１．暗い道を歩く　（できる・支障ある・できない）

２．人ごみの中をスムーズに歩く　（できる・支障ある・できない）

３．歩行中、前方から来る人とぶつかりそうになった時さっとさける　（できる・支障ある・できない）

４．手すりを持たないで階段を登る　（できる・支障ある・できない）

５．手すりを持たないで階段を降りる　（できる・支障ある・できない）

６．立ったままズボンまたはスカートをはく　（できる・支障ある・できない）

７．１０秒間開眼で片足で立つ　（できる・支障ある・できない）

８．高い棚にあるものを上を向いて取る　（できる・支障ある・できない）

９．急に後ろを振り返る　（できる・支障ある・できない）

１０．バスや電車の中で立っている　（できる・支障ある・できない）

１１．急に床から立ち上がる　（できる・支障ある・できない）

１２．急に起きたり寝たりする　（できる・支障ある・できない）

１３．走っている車や電車などを目で追う　（できる・支障ある・できない）

１４．クラクラしないで長く立っている　（できる・支障ある・できない）

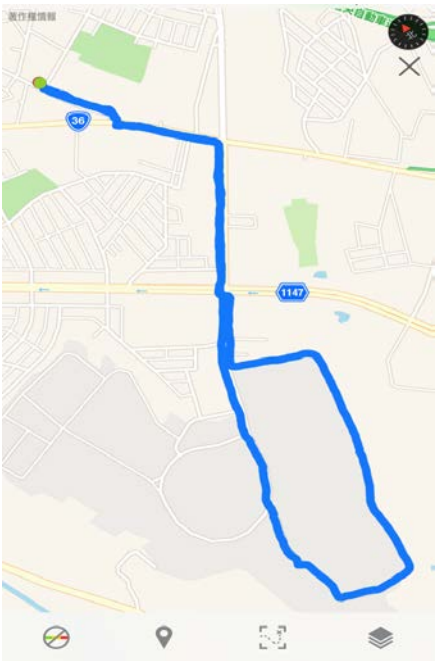
１５．上着の袖を自分で通す　（できる・支障ある・できない）

１６．靴のヒモを結ぶ　（できる・支障ある・できない）

１７．手指の折り曲げや手首の回転をスムーズに行う　（できる・支障ある・できない）

１８．背中を後ろにそらす（後ろに曲げる）　（できる・支障ある・できない）

里塚・美しが丘地区の地図



里塚・美しが丘地区のウォーキング経路

里塚・美しが丘地区ウォーキング写真 1

里塚・美しが丘地区ウォーキング写真 2

平岡地区の地図

平岡地区のウォーキング経路

平岡地区ウォーキング写真 1

平岡地区ウォーキング写真 2

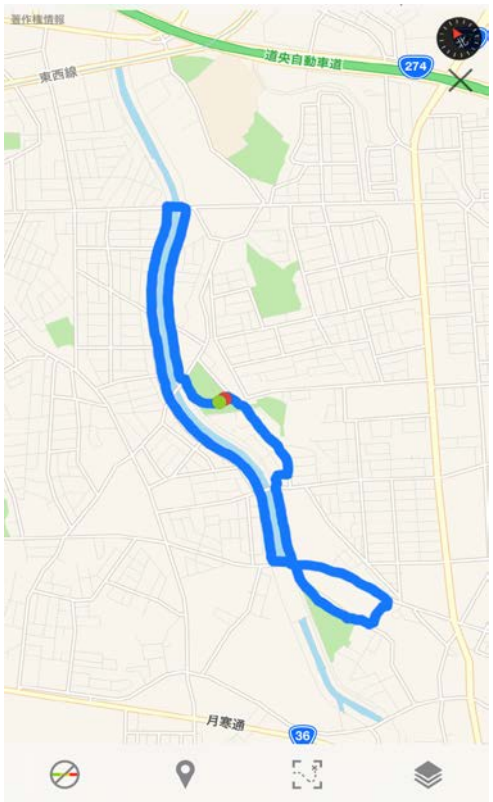
清田・真栄地区の地図

清田・真栄地区のウォーキング経路

清田・真栄地区ウォーキング写真 1

清田・真栄地区ウォーキング写真 2

北野地区の地図



北野地区のウォーキング経路

北野地区ウォーキング写真 1

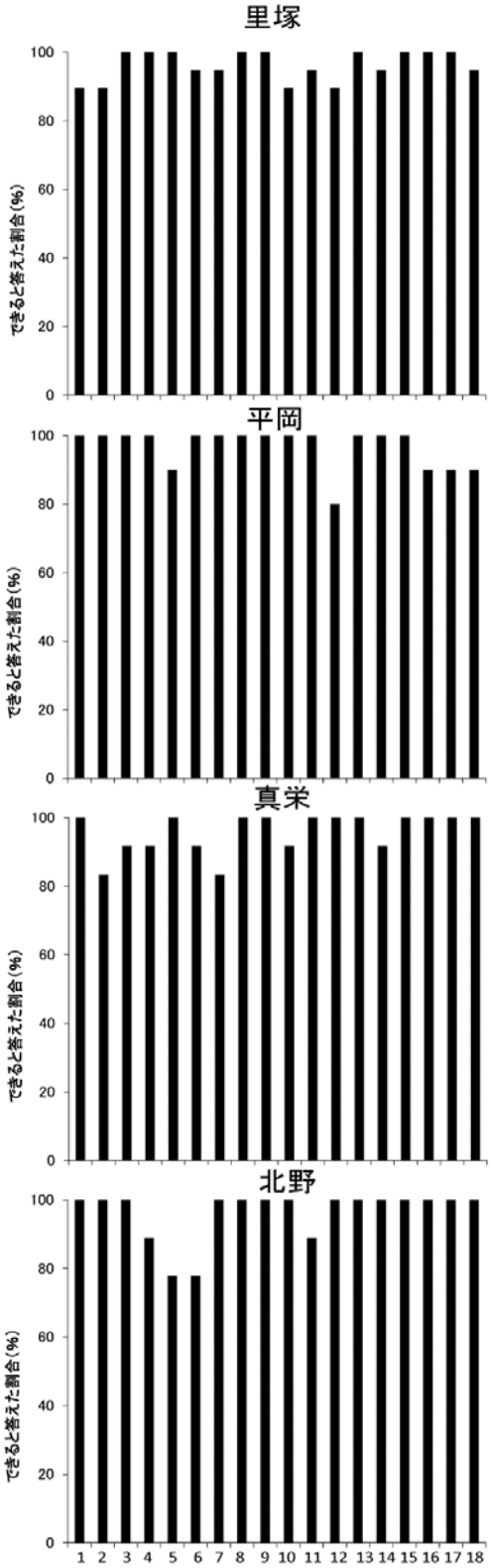
北野地区ウォーキング写真 2

北野地区ウォーキング写真 3

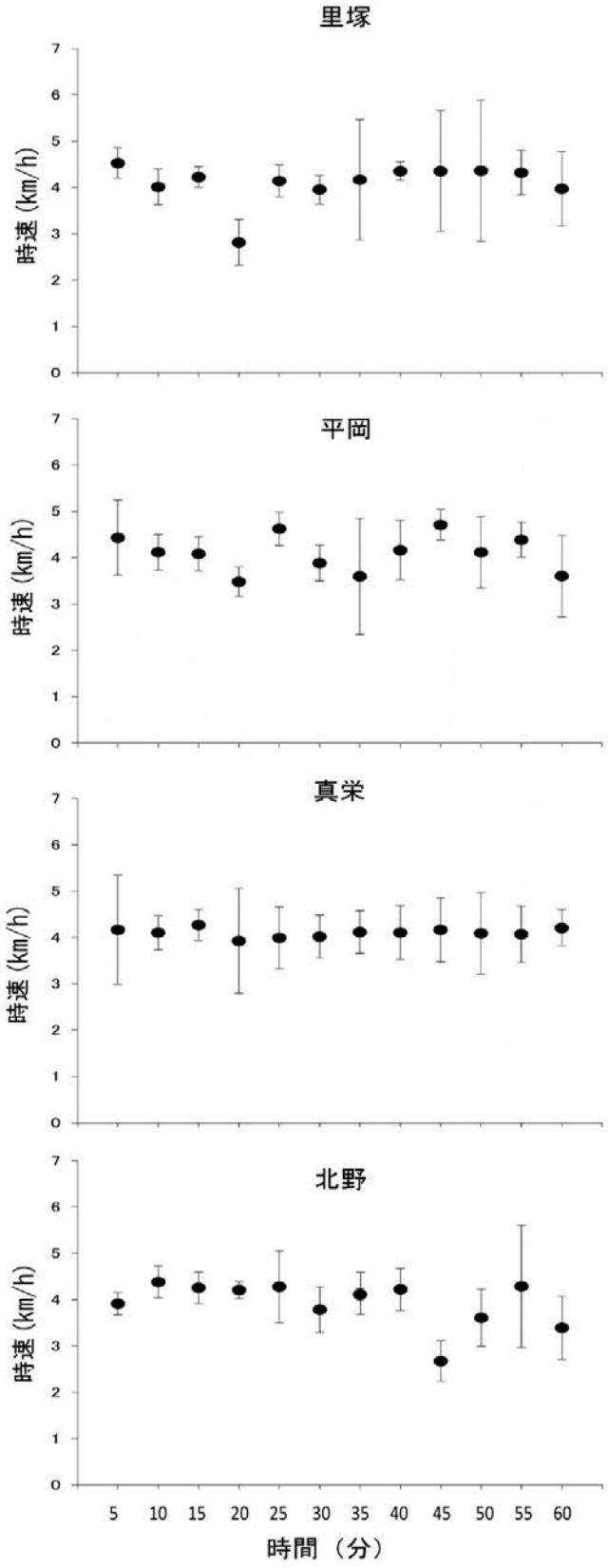
アンケートの結果、4 地区のいずれも全ての質問項目においてできると答えた割合が 70%以上であった。これは、日常生活に支障ない活動を参加者のほとんどが行っているということを示している。

4 地区全てのウォーキングの測定終了後、アンケートとウォーキングデータの集計を行った。時速、運動時心拍数、運動時心拍数からの相対的運動強度、および主観的運動強度を求め、地区ごとの平均値と標準偏差を集計した。

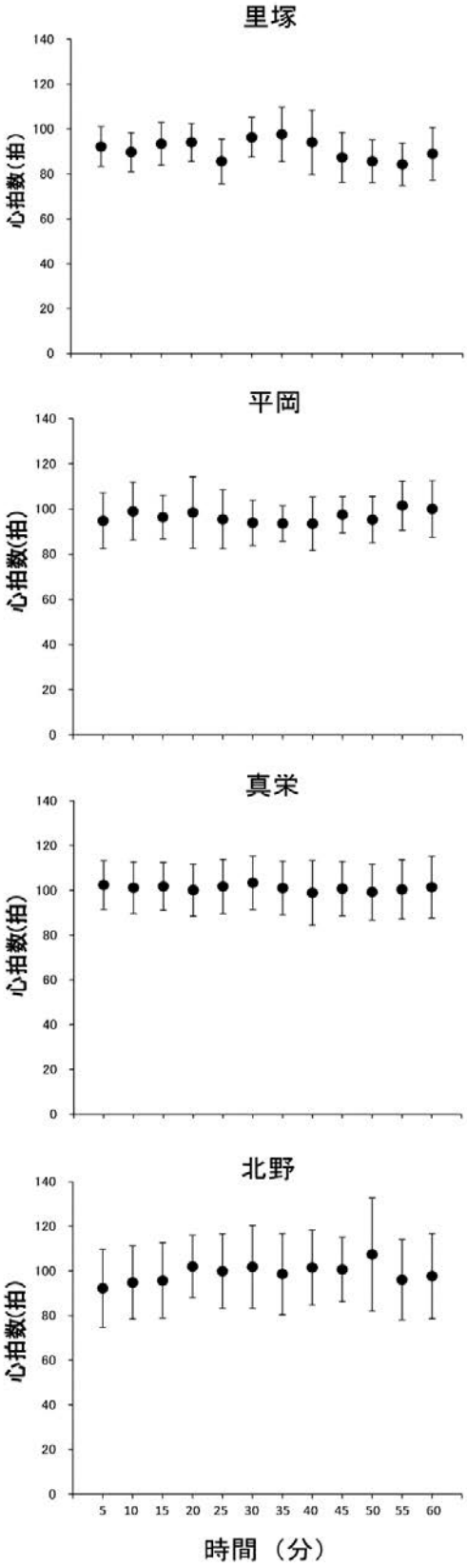
その結果、各地区ウォーキング開始 5 分～60 分までの 5 分ごとの時速の平均値は里塚・美しが丘地区が 2.5～5.0 km/h、平岡地区が約 3.0～5.0 km/h、清田・真栄地区が約 4.0 km/h、北野地区が 3.0～4.5 km/h であった。運動時心拍数の平均は里塚・美しが丘地区が 80～90 拍、平岡地区が 90～100 拍、清田・真栄地区が 100 拍前後、北野地区が 90～100 拍であった。相対的運動強度は里塚・美しが丘地区が 15～30%、平岡地区が 20～30%、清田・真栄地区が 30～40%、北野地区が 20～40%であった。主観的運動強度の平均はどの地区も 8～9 程度であった。


里塚
平岡
真栄
北野
できると答えた割合(%)
0
20
40
60
80
100
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

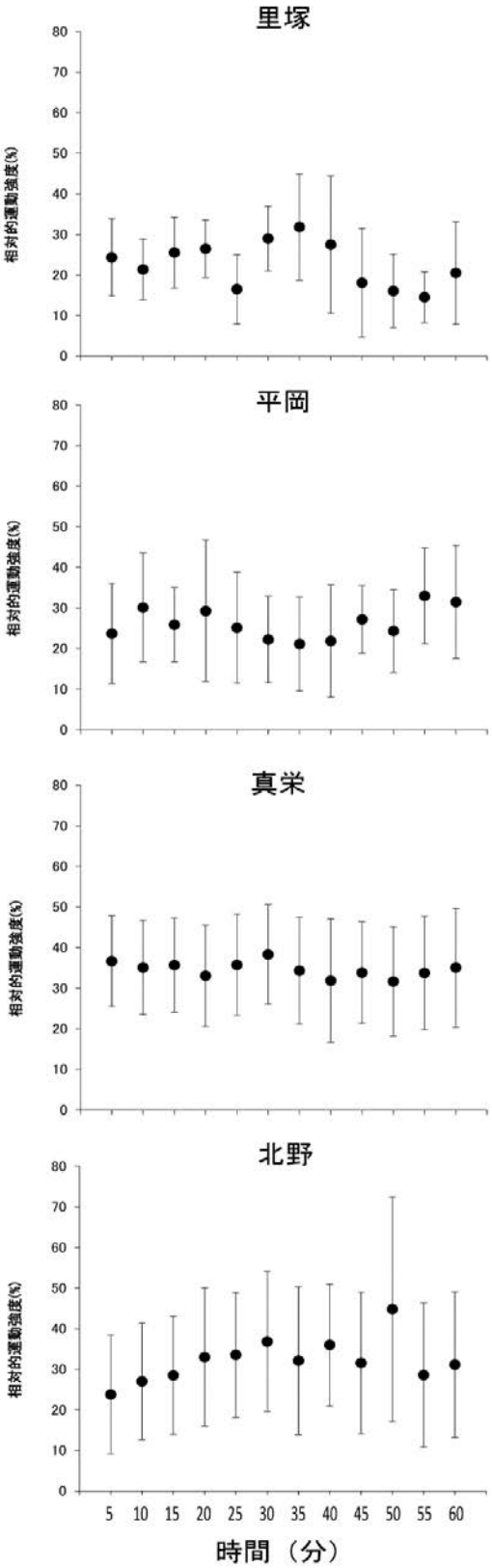
アンケート結果



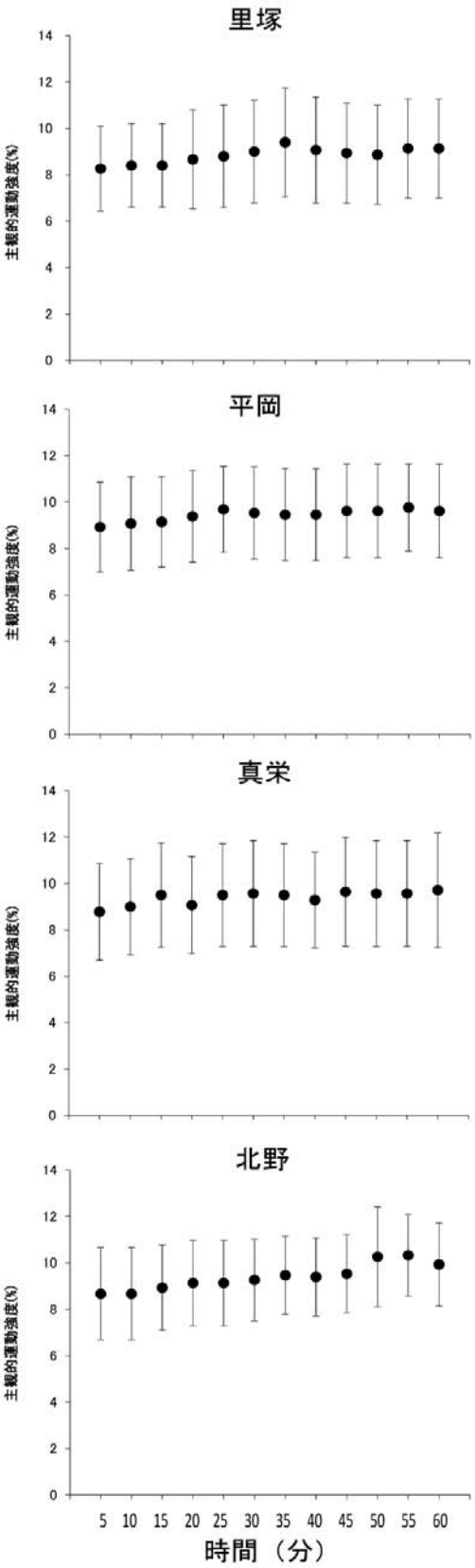
時速の平均値と標準偏差



心拍数の平均値と標準偏差



相対的運動強度の平均値と標準偏差



主観的運動強度の平均値と標準偏差

（3）美唄市における健康づくり活動

美唄市は、少子高齢化が進展し、地域経済も停滞するなど、厳しい環境にある中、専修大学北海道短期大学が平成23年度から学生募集を停止するなど、地元で高等教育を受ける機会が減少しつつあるとの状況となっている。これをふまえ、美唄市は美唄市及び周辺地域において地域の活力づくりに必要な人材を育成することを目的に美唄サテライト・キャンパスを設置した。

美唄市は、地域活性化や人材の育成、学術振興に関する連携協定を締結している札幌国際大学、札幌大学及び札幌大谷大学等との連携のもと、美唄サテライト・キャンパスを運営している。外部環境の変化への適切な対応や市が抱える課題の解決も視野に入れ、①意欲ある産業人材の育成や、②自治体のガバナンス能力の向上、③次代を担う若者への質の高い教育の提供、④住み慣れた地域で豊かさを実感できる暮らしを実現することに焦点が当てられている。将来的には、市内外の高校生や大学生、働く若者などがキャンパスで学び、自由闊達に交流を行い、南空知圏などの住民を含め、広域的に利用する複合的な教育、人材育成の拠点となるよう目指している。

本論文では、美唄サテライトキャンパスについての概要を述べるとともに、平成28年度札幌国際大学の活動について述べることとする。

（4）美唄サテライトキャンパス平成24年度―平成28年度

平成24年度、札幌国際大学の講座として、「①観光まちづくりの展開　春期（全5回）」「②観光まちづくりの展開　秋期（全5回）」「楽しく学ぶ韓国語（全5回）」「やさしい中国語入門（全5回）」「実験！健康づくり（全5回）」を担当した。①観光まちづくりの展開　春期は、美唄商工会議所において、越塚先生、宮武先生、井上先生が担当した。②観光まちづくりの展開　秋期は、美唄商工会議所において、井上先生、吉岡先生が担当した。楽しく学ぶ韓国語は、美唄市役所において、吉井先生が担当した。やさしい中国語入門は、美唄市役所において、吉井先生が担当した。実験！健康づくりは、美唄市役所において、国田、蔵満先生、新井先生、後藤先生が担当した。

平成24年度事業として「スポーツツーリズム共同調査チーム（札幌国際大学）」「美唄歴史文化共同調査チーム（札幌国際大学）」を担当した。美唄市におけるスポーツツーリズムの展開の可能性について調査・検討を行った。スポーツツーリズム共同調査チームは、市内各所、市役所会議室において林先生と村田先生が担当した。美唄歴史文化共同調査チームは、市内各所、市役所会議室において、丹治先生と井上先生が担当した。秋の美唄・ふるさとの魅力発見フィールドワークを行った。

平成25年度は、講座として「楽しく学ぶ韓国語（入門編）」「楽しく学ぶ韓国語（初級編）」を担当した。楽しく学ぶ韓国語（入門編）は美唄市役所において吉井先生が担当した。楽しく学ぶ韓国語（初級編）は、美唄市役所において、吉井先生が担当した。

平成25年度は事業として「美唄フットパス・スタートアップ事業」を担当し

た。
　美唄フットパス・スタートアップ事業は、美唄市民会館において林先生が担当した。美唄市の食の魅力を活かしたコースを企画立案し、フットパス・イベントの実証開催を行った。
　平成 26 年度は講座として「楽しく学ぶ韓国語（入門編）」「楽しく学ぶ大人の英会話（実践編）を担当した。楽しく学ぶ韓国語（入門編）は、美唄市役所として吉井先生が担当した。楽しく学ぶ大人の英会話（実践編）は、美唄市役所として竹内先生が担当した。
　平成 26 年度事業として「札幌国際大学卓球部によるレッスンと交流試合」「札幌国際大学シアターオーケストラ及び札幌交響楽団 OB による、美唄市内の吹奏楽団体との合同演奏」を担当した。札幌国際大学卓球部によるレッスンと交流試合は美唄市総合体育館において国田が担当した。美唄市教育委員会主催の全空知小中学生卓球大会参加者を対象に、卓球フォームを映像等で記録し、記録したフォームをみて振り返りワンポイントレッスンを受けた後、希望に応じて大学生との交流試合を行った。また、札幌国際大学へ市内の卓球部員等を派遣し、最新機器を使ったレッスン及び学生との交流試合を実施した。札幌国際大学シアターオーケストラ及び札幌交響楽団 OB による、美唄市内の吹奏楽団体との合同演奏はワークショップにおいて河本先生が担当した。音楽交流によるまちづくり（キャンプ）として、札幌国際大学シアターオーケストラと札幌交響楽団 OB が、美唄市内の中学・高校を含む吹奏楽団体とともに、ワークショップを通じ交流と技術向上を図りながら、合同演奏会に向けた練習を行った。発表の場として、美唄市民文化祭の音楽祭に「美唄サテライト・キャンパス with 札幌国際大学」として出演した。
　平成 27 年度は講座として「①観光と ICT」、「楽しく学ぶ韓国語（旅行会話編）」「楽しく学ぶ英会話（日常会話編）を担当した。①観光と ICT はピパオイの里プラザにおいて宮武先生が担当した。楽しく学ぶ韓国語（旅行会話編）は美唄市役所において吉井先生が担当した。楽しく学ぶ英会話（日常会話編）美唄市役所において竹内先生が担当した。
　平成 27 年度事業名として「札幌国際大学卓球部によるレッスンと交流試合」「札幌国際大学シアターオーケストラ及び札幌交響楽団 OB による、美唄市内の吹奏楽団体との合同演奏」を担当した。札幌国際大学卓球部によるレッスンと交流試合は美唄市総合体育館において国田が担当した。美唄市教育委員会主催の全空知小中学生卓球大会参加者を対象に、卓球フォームを映像等で記録し、記録したフォームをみて振り返り、ワンポイントレッスンを受けた後、希望に応じて大学生との交流試合を行った。また、札幌国際大学へ市内の卓球部員等を派遣し、最新機器を使ったレッスン及び学生との交流試合を実施した。札幌国際大学シアターオーケストラ及び札幌交響楽団体 OB による、美唄市内の吹奏楽団体との合同演奏はワークショップにおいて河本先生が担当した。音楽交流によるまちづくり（キャンプ）として、札幌国際大学シアターオーケストラと札幌交響楽団 OB が、美唄市内の中学・高校を含む吹奏楽団体とともに、ワークショップを通じ交流と技術向上を図りながら、合同演奏会に向けた練習を行った。発表の場として、美唄市民文化祭の音楽祭に「美唄サテライト・キャンパ

ス with 札幌国際大学」として出演した。

平成 28 年度の講義としてプレゼンテーション能力ＵＰを総合生活キャリア学科講師の小林先生が担当した。

平成 28 年度事業名として「スポーツ少年団指導・交流試合」および「高齢者の健康の維持・増進を目的としたウォーキング」を担当した。高齢者の健康の維持・増進を目的としたウォーキングは美唄市総合体育館において国田が担当した。実施要項を別紙に示す。

平成 28 年度　　ヘルシーウォーキング事業　　実施要領（案）

1、経過

平成 14 年度からヘルシーウォーキングを開催。平成 19 年度より、水中ウォーキングを開催。平成 24 年ノルディックウォーキング練習会を開催。ヘルシーウォーキングとノルディックウォーキング練習会は、運動推進員と協働で開催し、水中ヘルシーウォーキングはＮＰＯ法人美唄市体育協会と協働開催してきたところです。その結果、市民の関心が高まり、ノルディックウォーキング等、幅広い運動に取り組んでいる市民が増加しています。一方で、若い世代の運動不足や、高齢化による身体機能の低下から、運動を継続していくことが難しい現状も見られます。

平成 25 年度市町村健康増進計画である「びばいヘルシーライフ２１（第２期）」では、重点テーマとして「健康づくりのための運動」と、「受動喫煙予防の推進」を掲げており、より一層の環境づくりが求められています。

そのため、今年度も昨年度に引き続き、運動推進員やＮＰＯ法人美唄市体育協会と連携を強化し、より一層の市民への啓発を図っていく他、サテライトキャンパスのプログラムに位置づけ、各年代や生活スタイル、体調に合ったウォーキングができるよう、開催日時や、個々の参加者の目的に合わせたペース配分等実施体制を工夫し、開催することとします。

2、目的

1）からだを動かすことの楽しさを感じることができ、運動を通した健康づくりのきっかけとなる
2）運動をともにする仲間との出会いや交流を通し、健康づくり活動を継続する意欲が高まる
3）通年を通して運動を継続できる

3、実施主体　美唄市

4、対象者　　市民

＊重点対象者：新規参加者（健康づくりのための運動に取り組むきっかけづくりとなる）

5、周知方法

広報メロディー（毎月の実施内容のほか、すこやかロードに認定された２コースを周知）
運動推進員を通して各サークルや団体へＰＲ
他保健事業・地区活動により周知
総合体育館・プール館内等でのポスター掲示
ホームページ

6、申込　　安全なウォーキングを行うため、前日までに保健センターへ申込を行う。
申込順に交付番号を設定。交付番号を記入した、ウォーキング手帳を交付

7、実施内容

1）びばいすこやかウォーキング

①ウォーキング講習会

ねらい：正しい姿勢で効果的なウォーキングについて知り、日頃の健康づくりに生かすことができる。また、プログラムをきっかけにウォーキングを始めるきっかけとなる。
日　時：平成 28 年 4 月 15 日（金）　10：00～11：30（９：30 受付開始）
場　所：総合体育館（メインアリーナ）、~~田園あぜ道コース（一部）~~
内　容：○ウォーキングの正しい姿勢とその効果
○ポール・ウォーキング
講　師：○札幌国際大学
○吉田裕子氏

②ヘルシーウォーキング

（日程・内容）

第１回　５月 13 日（金）　四季をめぐる丘東明公園散策コース「春：桜満開」※１
第２回　６月 10 日（金）　アルテのピクニックコース
第３回　７月　８日（金）　国道一直線コース
第４回　８月　５日（金）　まちなかスイーツコース
第５回　９月 16 日（金）　田園あぜ道コース
第６回　10 月　７日（金）　サテライトキャンパス　・　皆勤賞表彰式　※２
（チャレンジデー　５月 25 日（水）公園散策コース）
（びばい休日すこやかウォーキング　９月 11 日（日））

・雨天中止
・流れ：集合→受付（9 時 30 分より）・準備体操→出発（10 時）→随時休憩→到着・解散（各自昼食や散策など）

※１　５月は旭公園、ベルコ・ツルハ裏の東屋を選択できるようにする。
※２　10 月７日（金）　10：00～11：30（受付 9：30～）　総合体育館
9：30～　受付
10：00～　開会挨拶・講師紹介
正しいウォーキングの姿勢のチェック
10：20～　ウォーキング出発　（田園あぜ道コース　一部）
11：15～　脈拍数チェックと運動指導
11：25～　皆勤賞表彰式

・皆勤賞表彰式：第６回の実施終了後、日頃の健康づくりの取り組みの保証と健康づくりへの活動意欲向上のため、第１回～第６回全日程に参加した方に賞状と記念品を贈呈する
昨年度皆勤賞該当となった方は、賞状のみの贈呈とする

②ノルディックウォーキング練習会（おとら会）

日時：平成 28 年５月２日～10 月末まで、毎週月曜日
場所：ベルコ・ツルハ裏の東屋
実施方法：周知、人数の把握は保健センター
実施については運動推進員が中心となって実施する。

2）水中ウォーキング

（日時・内容）

日時：平成 28 年 11 月～H29 年３月まで月１回実施
場所：温水プール「すい～む」
実施方法：周知や参加者の把握については保健センターが担当
実施については、NPO 法人美唄市体育協会運動指導員が担当する
実施内容：NPO 法人美唄市体育協会運動指導員による指導のもと、エアロビクス的要素を含めた水中でのウォーキングを実施

８、従事スタッフ　保健師、NPO 法人美唄市体育協会運動指導員、
札幌国際大学教授・学生、元運動推進員吉田裕子

９、地域スタッフ　運動推進員：出発前に担当者とコース・休憩場所の確認
準備体操、ペース配分・コースの誘導の決定、参加者の様子を把握しながら安全に実施できるよう担当者と役割を担う

１０、評価指標　　1) 参加者が身体を動かすことの楽しさを感じることができた
2) 参加者が運動を共にする仲間との出会いや交流ができたか
3) 運動を継続する人が増えたか

１１、留意点　　1）びばいすこやかウォーキングは運動推進員が中心となり、企画・運営。参加者、特に初心者が安全・安心してウォーキングできるよう留意する。
2）水中ウォーキングでは、NPO 法人美唄市体育協会運動指導員がプログラムを進行。内容等については参加者の状況等把握しながら検討していき、参加者が無理なく継続して水中ウォーキングに取り組めるよう検討しながら実施する。
3）健康づくり啓発事業としてより効果を高めるため、保健指導事業・健康づくりサークル支援事業・健康づくり組織支援など他の保健事業や地区活動と連動して実施していく。
4）運動を通した健康づくりが市民に広がるよう、教育委員会・NPO 法人美唄市体育協会等関係機関と連携を図りながら実施する。
5）平成 21 年度、北海道健康づくり財団において認定された「東明桜並木コース」「公園散策コース」の２コースを活用する他、美唄の魅力あるウォーキングコースを運動推進員オリジナルコースとして完成。

（平成 28 年 3 月作成）

（5）美唄市の地区ウォーキングにおける心拍数、歩行速度および運動強度の測定

美唄市で行われているすこやかウォーキングが高齢者にとって最適な運動強度であることを検証する目的で、ウォーキング中の歩行速度、心拍数、および運動強度の測定を行った。

測定を行う前に、教員と大学院生で測定器(心拍計、万歩計）のチェックを行った。その後、測定に同行する大学生全員を対象に、歩行距離を記録できるスマートフォンアプリのランタスティックが使用できるよう、大学院生から測定方法の説明を受けた。さらに心拍計、万歩計およびランタスティックの測定実践練習を学校のグラウンドで行った。

記入用紙には参加者の名前、安静時心拍数、運動時心拍数、歩数、移動距離、主観的運動強度を記入する欄があり、測定開始後すぐにランタスティックを起動させ、５分ごとに心拍計から心拍数、万歩計から歩数を確認し、さらに、ランタスティックから距離を、主観的運動強度は参加者に運動強度の程度を数字で答えてもらった。この一連の流れを教員、大学院生、大学生で各自シミュレーションをした。

測定当日は、ウォーキングに同行し、ウォーキング参加者を対象にウォーキング実施前にアンケート調査を行い、その後、胸部に心拍計の送信部を、上肢に心拍計の受信部を、腰部に万歩計をそれぞれ取り付け、上述した測定を５分ごとにした。

ウォーキング実施時に用いた記入用紙とアンケート用紙は清田区での実施内容と同様である。ウォーキング経路とウォーキング活動写真を以下に示す。

美唄市ウォーキング経路

心拍数と運動強度の測定 1

心拍数と運動強度の測定 2

心拍数と運動強度の測定 3

心拍数と運動強度の測定 4

アンケートの結果、全ての質問項目においてできると答えた割合が 65%以上であった。日常生活に支障ない活動を参加者のほとんどが行っているということを示している。

美唄市ウォーキング開始 5 分～30 分までの 5 分ごとの時速は 4.9 km であった。運動時の心拍数は約 107 拍、相対的運動強度は 46.9%、主観的運動強度は約 9.5 であった。

清田区および美唄市の高齢者を対象としたウォーキング活動における、心拍数から見た運動強度は、おおよそ次のように分類される。

①80～100 拍/分　　日常生活範囲（座位、立位および歩行）

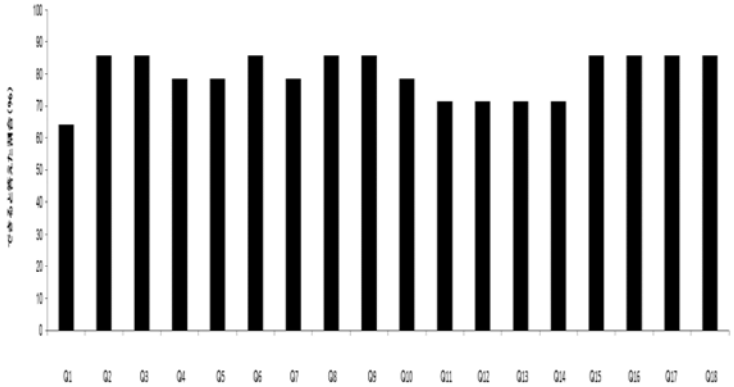
②100～120 拍/分　　軽い適度な運動（運動によって、望ましい効果が上がる）

③120～140 拍/分　　ややきつい運動（長い時間持続すると、疲労感が生じる）

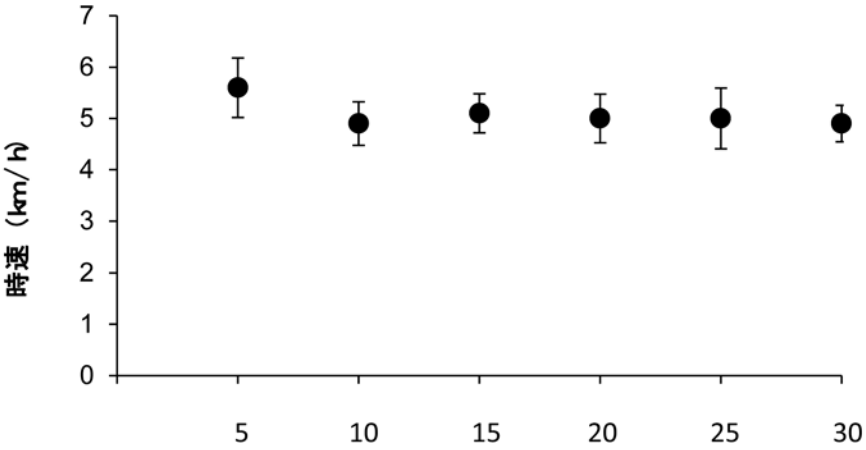
高齢者にとって、運動中の心拍数が 100～120 拍/分となるような運動を、比較的長い時間持続することが理想であると考えられる。

軽運動に対する身体諸器官の代謝刺激（有酸素系）となるのは、少なくとも 20 分間程度運動を持続することが必要である。

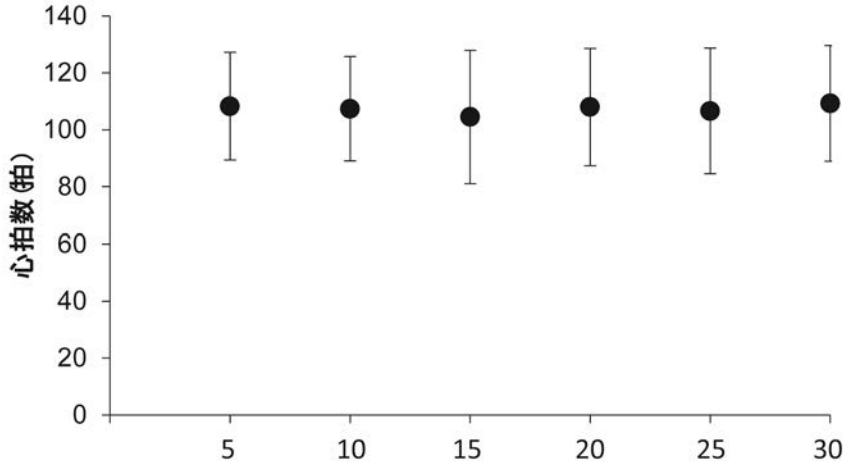
以上の結果から、清田区および美唄市で行われているウォーキング活動は、高齢者にとって適度な運動強度での活動になっていることが明らかとなった。



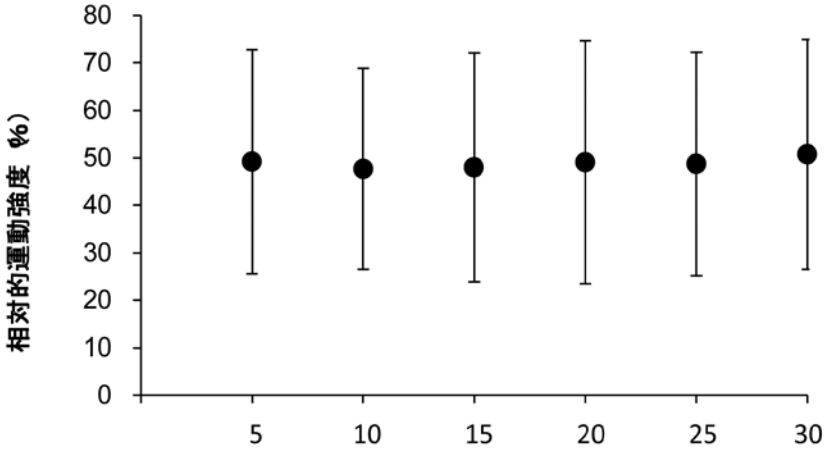
アンケート結果



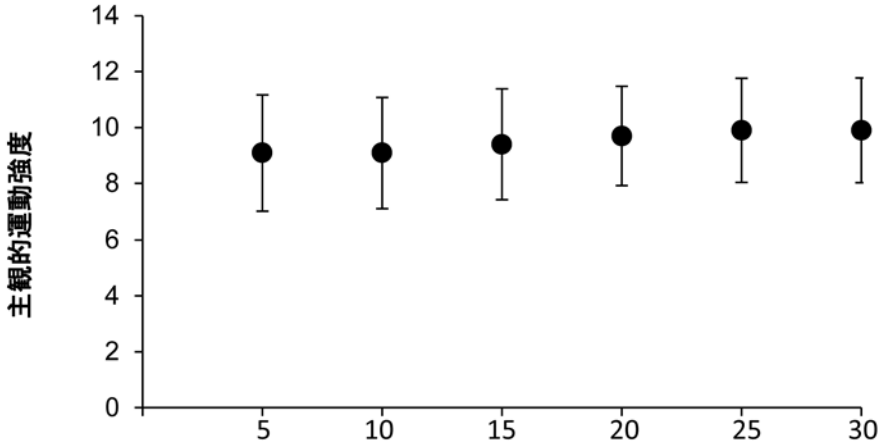
時速の平均値と標準偏差



心拍数の平均値と標準偏差



相対的運動強度の平均値と標準偏差



主観的運動強度の平均値と標準偏差

平成 28 年度札幌国際大学奨励研究報告

「浦河町を事例とした SWOT 分析を用いた観光による地域振興に関する研究」

研究代表者　丹治　和典

（観光学部観光ビジネス学科）

はじめに

近年、地域が主体となって、自然、歴史、文化、産業などの地域のあらゆる資源を活かすことによって交流を促進し、活力ある地域づくりが展開されているが、その具体的成果はまちまちである。観光を生かした地域振興に本格的に取り組もうとする地域において、観光振興に関連する戦略を策定する際に必要な基礎データの収集は不可欠である。本研究では、北海道浦河町における観光戦略の構築に向けて、SWOT 分析によるデータの収集・分析を町と共同で行うものである。なお、SWOT 分析はマーケティング戦略を具体的に検討する技法の一つで、外部環境と内部環境の両面から考察するために、強み（Strengths）弱み（Weaknesses）機会（Opportunities）脅かし（Threats）の 4 つの視点からある対象の特性を解明するものである。

観光はどのようなものであれ、地域の自然、歴史、文化、産業といった地域が長年かけて積み上げてきたものを活用するものである。本研究では、浦河町の観光資源に関する基礎的なデータを収集し、分析するために行うものであり、平成２８年７月と１０月に実施した現地調査（フィールドワークで収集したデータをもとに SWOT 分析を行った。また、画像データを活用して最新 ICT 技術による AR（拡張現実）機能つきハガキを作成した。

1　浦河町の概要

今回の研究対象となった浦河町の概要は、町の HP 等から抜粋すると以下のとおりである。

（1）位置と地形

浦河町は、北海道日高地方にある人口約 12､000 人の町で、日高地方の中核都市である。札幌市から約 180 キロメートル、帯広市から約 150 キロメートル、えりも岬から 50 キロメートル地点にあり、東は様似町、西は新ひだか町、北は日高山脈、南は太平洋に接している。

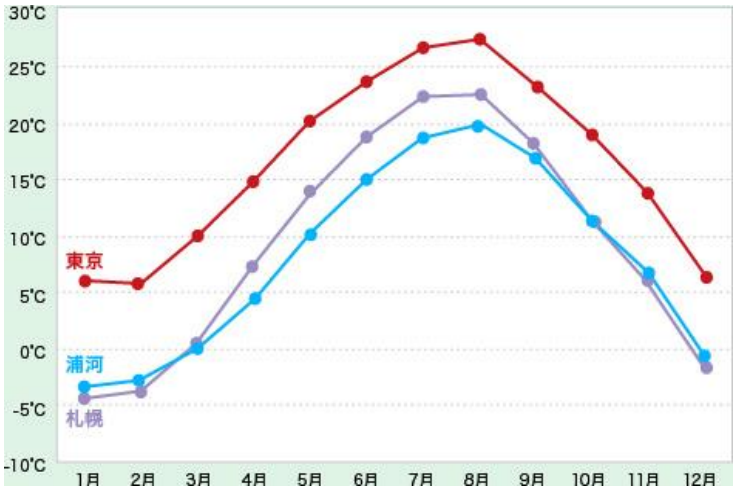
町の大部分を日高山脈とその前山が占めており、丘陵地を縦断して太平洋に注ぐ河川流域にいくつかの平野がみられ、地質は、河川流域を除き火山灰と泥岩、重粘土などの特殊土壌が多くを占めている。山岳は、神威岳（標高 1.600 メートル）、楽古岳（標高 1.472 メートル）などがあり、「日高山脈襟裳国定公園」の一角を占めている。町の総面積は、694.26 平方キロメートルでその 81%を山林が占めている。

（2）気候

浦河町は、海洋性気候の影響で夏は涼しく、冬は温暖なため「北海道の湘南地方」とも呼ばれ、豊かで住み良い自然環境に恵まれている。また、気温と日照時間の季節変化が小さく、一日の最高気温と最低気温の差も比較的小さいことから、道内でも四季を通じて温暖な地域のひとつとなっている。

市街地では、冬期間中ずっと路面が雪で覆われているということもなく、また降雪が一度に 20 センチ以上となることはめったになく、雪かきや排雪の心配も少なく、冬もすごしやすい町である。冬は、11 月上旬に初雪がみられることもあるが、例年本格的に降るのは 12 月下旬以降である。

月平均気温



〔資料〕
うらかわ移住情報ポータル
月別平均気温のデータ

赤：東京
青：浦河
紫：札幌

※2014 年の浦河の最高気温は、27.8 度(8 月) 最低気温は、 −12.4 度(2 月)

（3）交通アクセス

道内の主要空港からの移動は、新千歳空港から自動車で約 2 時間 20 分、バスで約 3 時間 45 分である。帯広空港からは自動車で約 1 時間 50 分（国道 236 号線使用）である。

また、道内主要都市からは、札幌市から自動車で約 3 時間 15 分（高速道路等を使用）、バスで約 3 時間 20 分（JR 北海道高速バス広尾～札幌間、えりも～札幌間）、苫小牧市から自動車で約 2 時間 20 分、JR で約 3 時間 00 分（各駅停車）、帯広市から自動車で約 2 時間 30 分（国道 236 号線使用）の距離にある。

（4）観光入込客数

観光客は年々、減少傾向にあり、過去 10 年の間に最も多かった平成 18 年度と平成 27 年度を比較すると約 4 万 7 千人、約 3 割減少している。訪れる観光客は道内客がほとんどであり、道外客は少ない。

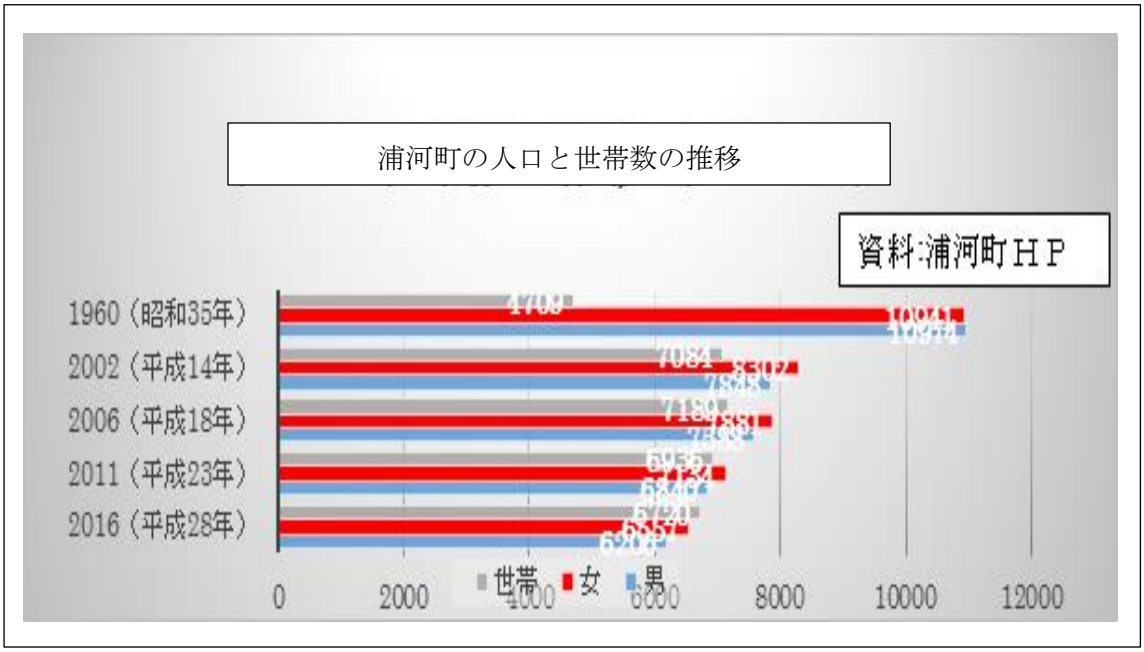
浦河町の過去 10 年間の観光客入込数　（単位：千人）

年度	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
入込数	156.8	124.8	116.0	122.9	116.2	106.3	113.4	104.7	109.0	109.0
道内客	120.5	96.7	85.0	91.5	85.6	78.2	85.4	76.4	79.0	78.8
道外客	36.3	28.1	31.0	31.4	30.6	28.1	28.0	28.3	30.0	30.2

※北海道経済部観光局調べ

（5）人口と世帯

浦河町では、人口、世帯数（平成 28 年 4 月末）は 12,860 人、男は 6,206 人、女は 6,557 人、6,720 世帯となっている（**グラフ 1**）。浦河町では、戦後、1960（昭和 35）年に最も多い 21,915 人に達して以降、現在まで、人口減 少が続いている。この数年で、人口は減少傾向の問題を踏まえ、対して世帯数は、平均1世帯当たり世帯員数は約 1.92 人である。つまり、少子化が進んでいるとみることができる。同町の人口は今後も減少傾向が続くものと推計されている。



（6）主要観光スポット

・オロマップ展望台

国道 236 号線に戻り、広尾方面に向かう途中にある展望台。日高育成牧場の眺望や日高山脈の山々の眺望が期待できる展望台。

・優俊さくらロード

優俊の里公園の入り口から、約3km、約 1,000 本のエゾヤマザクラが道路の両脇に立ち並び、毎年桜の季節になると、訪れる人々の目を楽しませてくれる。「優俊さくらロード」という名称は、この桜並木をもっと知ってもらおうと、平成 16 年(2004)4 月に町民から新しい名称を募集して名付けられた。例年見ごろは 5 月上旬から 5 月中旬にかけて。18：30～21：30 はライトアップもされる。北海道内でお花見の人気ランキング 3 位となっている。

（７） 産業

浦河町の産業構造は、農業と漁業を中心とした第一次産業が基幹産業となっており、特に農業については、軽種馬生産が5割以上を占めることになっている。また、日本一の競走馬生産数を誇る牧場が約 300 面もある。

2010（平成 22 年）の浦河町では、第一次産業が 1,834 人、第二次産業が 921 人、第三次産業が 4,353 人となっている。就業人口から見てみると、第三次産業の就業人数の比率が 6 割も超えている。この数年間で、全国的に第三次産業が増えていく傾向が見られることができて、浦河町も例外ではない。また、その近年で、米は、特別栽培米をはじめ、米産業の発展も期待されている。一方、漁業では、日高昆布・鮭・スケソウダラ・イカ等地元の新鮮な海産物を活用し、水産加工品が作られている。これから一層、加工産業の増加傾向が続けていくものと推測されている。

２　地域資源調査

浦河町のホームページや関連の資料をもとに上記のように町の概要を整理したうえで、町の自然や歴史・文化、産業などの資源を実際に現地調査した。平成28年 7 月と 10 月の二度にわたり調査したが、天候などの問題もあり写真などの撮影にあたっては必ずしも最良のものではないが、概ね予定した地域資源の確認のための実査を行うことはできた。

調査の月日や行程および参加者は、以下のとおりである。

〈1 回目〉平成 28 年 7 月 23（土）24（日）

参加者：観光学部観光ビジネス学科 3 年生　12 名（台湾、中国からの留学生 2 名を含む）　指導教員 1 名

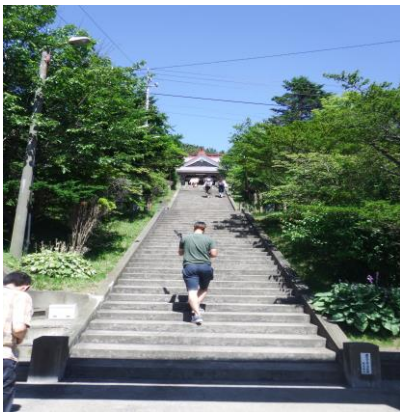
◇7 月 23 日（土）

綺羅々亭（昼食）→浦河町役場→浦河神社→ルピナスの丘→浦河港→ぱんぱかぱん（飲食店）→絵笛駅→元浦河教会→まんまるの木→優駿さくらロード→うらかわ優駿ビレッジ AERU（宿泊）

◇7 月 24 日（日）

うらかわ優駿ビレッジ　AERU→伏木田光男美術館→浦河郷土資料館・馬事資料館→大漁旗製作場見学→エヤム（昼食）→東岸海岸→浦河バスターミナル

主要ポイント（写真）



優駿の門

日高育成牧場

〈2 回目〉平成 28 年 10 月 22 日（土）、23 日（日）

参加者：観光学部観光ビジネス学科 3 年生　12 名（台湾、中国からの留学生 2 名を含む）　指導教員 1 名

◇10 月 22 日（土）

大黒座・サフランドール（昼食）→オロマップ展望台→五色渓谷→翠明橋公園→まんまるの木→絵笛駅→ぱんぱかぱん→ルピナスの丘→ホテル浦河イン（宿泊）

◇10 月 23 日（日）

ホテル浦河イン→五色渓谷→翠明橋公園→ルピナスの丘→あとりえ　ぶぅ（昼食）→浦河町商店街（ラピラータほか）→浦河バスターミナル

主要ポイント（写真）

日高～十勝・国道236号
天馬街道

えふえ
絵笛
うらかわ

うらかわ
観光協会

2　SWOT 分析

事前に調べたホームページや関連資料の内容と現地調査の結果を踏まえて、浦河町における観光による地域振興に向けた指針を模索するために SWOT 分析を行った。SWOT 分析は、企業の事業についての現状分析からビジネス機会を明らかにするために用いられる場合が多いが、観光振興の課題を検討する際に利用されるケースもある。北海道内でも天塩町や美瑛町などに関する事例報告がある。

本報告では、2 度の現地調査と事前の資料研究を併せて、観光ビジネス学科3年演習のメンバー12 名（台湾、中国からの留学生 2 名を含む）と協議した結果を次の表にまとめた。なお、学生個々が提示した内容は資料として添付した。

今後、行政や各種団体、事業者等との情報交換を通して客観的なデータに基づく精査が必要な箇所もあり、分析の深化が求められる。

SWOT 分析の結果

S（Strengths）強み	W（Weaknesses）
・夏は涼しく、冬は比較的温暖なため、北海道としては穏やかな気候である。 ・海と丘の町と言われるように、高低差が絶景につながる（ルピナスの丘、浦河神社など） ・日高山脈襟裳国定公園の一角を占めている。 ・日高地方の行政・経済の中心地である。 ・漁業と馬産業で栄えてきた町であり、現在も漁業と馬産業が主幹産業である。道内有数の馬産地である。 ・夏いちごの生産が盛んである。 ・うらかわ優駿ビレッジ AERU という宿泊施設と体験施設を併せもつ複合施設を有している。 ・天馬街道が十勝管内と日高管内のバイパスルートとなっている。 ・大規模医療施設である日赤病院がある。 ・存続が危ぶまれているが、鉄道が走っている。	・札幌市などの道内主要都市や新千歳空港からの距離が遠く、移動手段が限られている。 ・観光客の入り込みが少ない。 ・観光資源になるような地域資源が少ない。 ・認知度が低く、魅力を発信しきれていない。 ・漁業資源のブランド化が進んでいない。 ・ビジネスマンをターゲットとしたホテルしかない。 ・外国人観光客を想定した対応が足りない。 ・若者が遊んだり、楽しんだりする場所がない。 ・気温と日照時間の季節変化が小さく、北海道ならではの四季を十分に体感できない。 ・近隣町村との差別化がむずかしい。
O（Opportunities）機会	T（Treats）脅威
・健康志向が高まっている。 ・縄文文化への注目が集まっている。 ・訪日外国人観光客が急激に増加している。 ・アジアの経済成長が堅調であり、海外良好への期待が引き続き高い。 ・2020 年の東京オリンピックに向けて、アイヌ民族や文化の認知拡大が期待されている。 ・旅行形態が団体旅行から個人旅行へ転換している。 ・グリーン・ツーリズムが普及してきた。 ・帯広などの地方空港から観光客を誘致でき	・景気が低迷している。 ・観光入込客数が減少している。 ・外国人観光客が大都市に集中している。 ・情報発信力が弱い。 ・若者の関心度が低い。 ・町の人口が減少している。 ・町の財政が逼迫している。 ・観光産業を支える人材が不足している。 ・歴史・文化について語れる人が少ない。 ・地震など自然災害が比較的多い。

る環境ができつつある。 ・北海道観光はドライブ観光が中心になってきている。 ・SNS による若者への周知が簡易化している。	

SWOT 分析は、上記のフレームワークに調査した事実をまとめるだけではあくまでも情報収集レベルに終わってしまう。観光による地域振興の具体策を立案するためには、収集した情報をもとに、強みを活かして機会を勝ち取るための方策（強み×機会）や強みを活かして脅威を機会に変える差別化（強み×脅威）、弱みを補強して機会をつかむための施策（弱み×機会）、弱みから最悪のシナリオを避けるための工夫、などを探求しなければならない。

分析検討の結果は以下のとおり。

（強み×機会）

・夏は涼しく冬は比較的温暖で、穏やかな気候は以前は北海道内でも限られておりい、浦河町の強みである。浦河町では冬季でも外での運動がしやすい環境と言える。このことから通年で体を動かすことができ健康志向の強まりに繋がるのではないかと考えられる。

・ルピナスの丘や浦河神社などの高低差が絶景につながることから、浦河町は海と丘の町と呼ばれている。また、近年夏いちごの生産が盛んである。浦河で栽培されている品種「すずあかね」という夏いちごは実が硬く、日持ちもよく、香りもよく、甘酸っぱく食感がよいと評価されている。同様に、ここ数年で話題となっている「グリーン・ツーリズム」と組み合わせて体験型の観光メニューとして、たとえば、「苺狩り」、「一日楽しめる滞在型観光農園」などが実践可能な提案だろう。また、浦河町の撮影スポットを巡る「『うらたび』のスタンプラリー」がある。本研究の成果物として、AR 動画を制作したがその画像のほとんどは『うらたび』の撮影スポットで収集したものである。

（強み×脅威）

・浦河町を取り巻く脅威としてあげた外国人観光客が大都市に集中していることを紐解くと、外国人が浦河町の情報を全く把握していないという事が分かる。同町にはルピナスの丘や浦河神社、JRA 育成牧場など都会では見ることのできない景色が数多く存在する。このような浦河が本来持つ魅力の情報発信力強化（SNS やホームページ）を図るべきである。しかし、発信できる魅力のインパクトがあまりに薄い。そこで乗馬体験の様子を映した動画や最近流行の VR を使った映像があってもよいだろう。

（弱点×脅威）

・「北海道観光はドライブ観光が中心になってきている」という点と浦河町への「観光客の入

込が少ない」という点について考えてみる。道内主要都市から距離があり、移動手段が限られていることにより、観光入込客数の減少が起こっていることは間違いない。また、同町は地方交付税や補助金などの依存財源に頼り過ぎており、自主財源が安定的に確保されていない。このことは多くの地方自治体に当てはまることであるが。道内外および外国からのお客様が同町を訪れるためには、公共交通機関の利便性が乏しいためどうしても車を利用しなければ移動もできないし、じっくりと観光することが難しい。移動手段がレンタカーか自家用車である観光客に対しては浦河まで行ってみたいと思わせるには、ドライブ観光の魅力を向上させることが大切な面ではないかと考える。都市から離れている浦河で大自然を巡りながら、すぐ目の前に馬が何匹も走ったりするのを楽しめるのは固有の強みである。いくつかのドライブコースを考えておけば、さらに楽しさ倍増するのではないか。

・今現在、北海道を訪れる外国人観光客が増えているなか、浦河町はビジネスマンをターゲットにしたホテルがほとんどで、大都市に集中している外国人観光客を、少しでも地域に流れるように、外国人を想定した対応や案内、おもてなしを町全体で開発していかなければならない。たとえば、新千歳空港からの直行バスを導入するなど。

3　AR 動画の制作

本研究では、SWOT 分析に加えて AR（拡張現実、Augmented Reality）機能を活かした動画（絵葉書状のもの）を制作した。すでに指摘したように、浦河町の情報発信力の弱さは、外国人観光客の急激な増大に見られる観光の経済・社会的効果を十分に引き入れることができずにいる。インターネット上に情報を配信することも有効だが、SNS とクチコミの機能を同時に活かせる情報発信手段も効果が期待できるものと考える。今回の研究で制作した AR 動画は以下の画像を内蔵するものである。こうした最新の情報発信手法を提示し、今後の浦河町の観光による地域振興に向けての指針を提案することは本研究の目的であった。同町の役場や観光協会、主要宿泊施設に配置していただいたが、その反響などについての調査は今後の課題である。さらに、行政、各種団体、事業者との意見交換を通して、同町の観光による地域振興にかかわる問題意識の共有と課題解決に向けても方向性を確認する場を創出することも今後の課題となった。

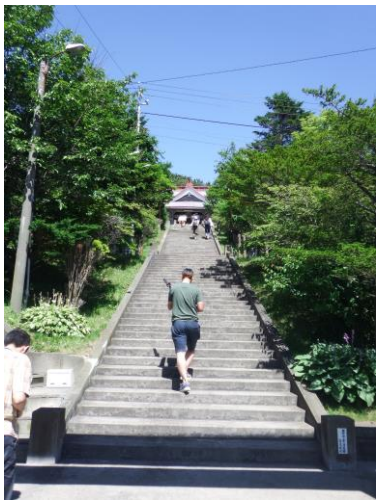
おわりに

今回、浦河町を対象に地域資源調査を実施し、SWOT 分析を通して観光資源としての可能性を検討した。同町には、地元の旅行会社が存在し、これまで着地型旅行商品を開発・実施した実績がある。人口約1万2千人の町としては、観光資源となる対象や宿泊施設も複数箇所存在し、観光対象整備の基礎的条件は備えている。今後は他の自治体と同様に観光による地域振興への全体的な合意形成を行政が中心となり進めていくことが求められる。

〈AR 動画の表紙と内蔵された画像〉

表紙

主な画像



《学生が提出した SWOT 分析の基礎資料》

S　Strength	強み

◎自然

・海がある（太平洋に面している）

・夏は涼しく、冬は比較的温暖なため、住みやすい地域。（冬の積雪量が少ない

・道内の中では日照が長い、北海道としては穏やかな気候である）

・四季を通して、北海道ならではである広大な自然景観を楽しめる。

・オオワシなどの天然記念物を見かけることが多い。

・日高山脈襟裳国定公園の一角を占めている。

・高低差が絶景につながる（ルピナスの丘、浦河神社。自然豊かな風景）

・元の町のキャッチフレーズは海と丘の町である点

・優駿桜ロード

◎歴史・文化

・アイヌの集落があった。

・開拓会社赤心社によりキリスト教信者が入植し、元浦河地区に教会を立てた。

・日高地方の行政・経済の中心地である。

・幕末には浦河場所（会所）があり、交易が盛んであった。

・漁業と馬産業で栄えてきた町であり、現在も漁業と馬産業は主幹産業である。

・戦前には浦河町まで日高本線が延伸しており、運輸運送に鉄道は大きく貢献した。

・函館から浦河までの定期船が運行されていたことがある。

・1970 年代には２万人以上の人口がある町だった。

・縄文式土器（後期）などの縄文文化

◎経済

・道内有数の馬産地である。（3000 頭以上のサラブレッドがいる、JRA 日高育成牧場がある。）

・競走馬の産地であり、初心者の方でもできる色々な乗馬メニューがあって馬と触れ合うことが出来る（乗馬などの体験観光、馬を活かしたイベントの実施）

・乗馬療育＝医療

・うらかわ優駿ビレッジアエルで日帰り入浴や乗馬体験、遊具で遊ぶことができる（子供視線）。

・日高管内では一番大きい漁港を有している。（浦河港）

・海が近いため、漁業も盛んである（豊富な海の幸、日高昆布やスルメイカなどの海産物が取れる、町の商店に地元の漁港で水揚げされた魚が売っている）
・第一次産業が基幹産業（夏いちごの生産量、新規就農者への補助金制度）
・浦河町への体験移住に力を入れており、移住滞在日数が道内３位以内に入っている。
・ふるさと納税

◎生活全般
・鉄道が通っている。
・天馬街道によって浦河町を経由する十勝管内と日高管内のバイパスルートとなっている。
・スーパーマーケットがあり、日用品に困らない。
・飲み屋街がある。
・町内の飲食店で地元の食材を使った料理を提供している。
・コンビニ（セブンイレブン）が 24 時間営業。
・日赤病院がある。
・お菓子屋さんが数店舗ある

W　Weakness	弱み

・町税が職員の給料に消えている
・馬の維持費
・観光客が極端に少ない
・ツアーのリピート率が低い（31%）
・札幌から浦河町までバスで３時間２０分という位置にあるため、気軽には行きにくい。
・比較的温暖とはいっても、海が近いのもあり、寒さはある程度感じる。
・乗馬メニューは豊富ではあるが、金額が高いので躊躇してしまう。
・飲食店などが少ないので、若者が働きたいようなところが限られ、浦河町を出て行ってしまう。
・元々観光地ではないのと、観光資源になるような地域資源が少ない。
・認知度が低く、魅力を発信しきれていない
・浦河での移動手段が少ない。
・歩いて回れる観光施設の少なさ。
・ビジネスマンをターゲットとしたホテルしかない。「ファミリー向けの観光地ではない」
・外国観光客の応対が足りない
・乗馬メニューは豊富ではあるが、金額が高いので躊躇してしまう。
・飲食店などが少ないので、若者が働きたいようなところが限られ、浦河町を出て行ってしまう。

・昆布が豊富だが、その良さを出し切れていない。
・歴史があまり深くない。
・歴史的建造物などの有名な建物が少ない。
・浦河町の観光スポットの整備不足
・施設の老朽化
・体験型ツアーのガイド不足
・町内全体が遊泳禁止である。
・若者の遊ぶ（楽しむ）場所がない。
・高齢者の買い物が困難。
・町民料金での乗馬施設がない。
・周辺町村と似たような歴史である。
・現存する歴史的建造物が少ない。
・アイヌ文化の PR 不足。
・馬の印象が強すぎて、特産品のイメージが付きにくい
・観光に重きを置いていない
・観光客にやさしくない
・どこもほとんど同じ景色
・商店街には路上駐車ばかりで通行しにくい
・気温と日照時間の季節変化が小さく、北海道ならではの四季を十分に体感できない。
・依存財源が多すぎる。
・目立った産業が漁業しかないのにも関わらず、農林水産業費が高い。
・宿泊でも浦河での滞在時間が短い。

O　Opportunity	機会

・縄文文化への注目
（新種のアンモナイトの化石が発見）
・体験観光への注目
（近年フットパスの人気拡大）（四季による風景スポット）
・発展途上国からの農業職員の受け入れ
・健康志向への関心の高まり
・環境保護運動の促進傾向
・町内の牧場で育成した競走馬の活躍
・訪日外国人観光客が増加
・北海道日本ハムファイターズ応援大使に認定（2015 年度）
（大谷翔平選手に「二刀流バースデーケーキ」をプレゼントしたお店（ラピラータ）があ

り、マスコミなどに取り上げられた。）
・2020 年の東京オリンピックによる、アイヌ民族・文化の認知拡大
・SNS による若者への周知の簡易化
・ドライブ観光の中心の北海道観光
・団体旅行から個人旅行への転換
・アジアの経済成長(経済)
・グリーン・ツーリズムの普及
・競馬による馬乗り利益の半永久化
・新たな観光地としての拡大、観光資源の新たな確立
・地方空港から観光客の誘致
・浦河町への移住サポート

T　Threat	脅威

≪観光入り込み客数≫
・観光入込客数の減少
・観光をするための余暇時間の減少
・大都市への観光客集中
・若者の旅行離れ
・リピート客の減少

≪景気・経済≫
・景気の低迷
・税収減による財政の圧迫

≪認知度・PR 方法≫
・ゆるキャラの認知度の低さ
・発信力の低さ
・若者の関心度が低い

≪人材≫
・歴史・文化を語れる者が少ない
・浦河町人口の減少（世帯数の減少)(労働人口の減少) (少子化が進んでいる)
・観光産業を支える人材不足
・若い人口が減少しており、漁業の担い手不足

≪自然・気候≫
・自然災害による浸水
・地震の震源地に近く影響を受けやすい。
・海岸部のため津波の被害を受けやすい
・野生動物による農作物への被害

≪観光・交通インフラ≫
・観光インフラの整備
・JR 線のローカル線の廃止に伴った移動可能地域の減少
・お店の営業時間が短い
・ホテル、宿泊施設の不足
・長期滞在を目的とした施設
・冬季観光資源の不足

【現地調査に参加した学生たちがまとめた事前調査の結果】

第１章　観光による地域振興に現状と課題

■地域振興とは

大都市に労働力となる若者が集中することでの地方における過疎化をはじめとした都市部と地方間での"不均衡な発展"、そして戦後驚異的な経済成長を遂げながらも実感としての"生活の豊さ"を実感できず、歴史や文化や自然環境にかこまれた地域の価値を見なおそう、ということから出てきたものである。「地域の資源を有効に活用して持続的な発展」、そして、個人が自由に表現できる地域社会へと地域住民が変化していくことが理想といえる。

■観光振興

現代の観光資源は温泉や遊園地などの行楽地だけでなく、先進医療や商業地帯が観光資源として認識される時代となっている。地域の個性と特徴をみせる、光を魅せるのが現代の観光振興へとつながる。また、その他の地域の資源や人々から発生する観光資源は地域振興と関係が深い。

■地域活性化

地域の活性化とはただ人が来ればいいというものではない。来る人たちの適した商品、客層がなければ活性化へとはつながっていかない。ゆえにその地域がどんな客層をターゲットにし、何を売るためなのかを明確にして売り出していく必要がある。そのため、お年寄りの多い地域では、若者を集めるという点では難しいと考えられる。

■観光資源としての公共施設の限界

公共施設も観光資源としては有益なのだが、資金のある大都市と比較しても、地方は整備費用と収入が比例していかないため、継続的な経営が成り立っていかない。最初は評判であったとしても、最終的に収益と維持費のおかげで地域が疲弊し、すたれていってしまうと予想される。また、成功例も少ないため公共施設だけでは息の長いものは期待できない。

■浦河町の現状と課題

１．自然環境・文化の活用と民間との協働　　日高山脈とその裾野に広がる牧場風景や太平洋など、豊かな自然に恵まれている本町は、漁 業と馬産の歴史・文化を有しています。　　しかし、乗馬や登山・自然観察、海や渓流での釣りなど、優れた素材はあるものの、そのＰ Ｒは十分とは言えず、展開も素材に頼っているだけで工夫が不足しており、魅力あるメニュー としては不十分な面があります。　　こうしたことから、乗馬や※[1]優駿さくらロードの桜並木など、他地域とは明らかに違う独自性 を積極的にＰＲするとともに、民間活力との協働により魅力ある観光メニューとしていく必要 があります。

※[1]優駿さくらロード

ストリートダンスクラブや60歳以上限定ではあるが桜餅プレゼントなど比較的に高齢者をターゲットとしている

２．独自性を活かした観光メニューづくり　本町の馬文化や乗馬体験は、他地域にはない独自性の一つです。うらかわ優駿ビレッジアエルでは、浦河の最大の特長である乗馬を体験することができます。引き馬からトレッキングと、 初心者から上級者まで楽しむことができる豊富な乗馬メニューを提供しており、毎年多くの人々 が訪れています。乗馬というある種非日常的な体験は、体験した方々から好評を得ていますが、 最近の入り込み客数は減少傾向にあります。こうしたことから、今後はより効果的なＰＲを行うことが必要です。　また、浦河での体験・滞在を更に魅力あるものとするためには、乗馬単独での取り組みでは なく、豊かな自然や地域の観光資源・文化とどのように融合させていくかが課題となっています。 地域資源を活かす視点から、浦河を訪れる観光客に対して、本町の豊富な※[2]水産物を活かした飲 食メニューの提供なども検討する必要があります。

※[2]直売店などで販売されている海産物
昆布・海藻の専門では日高昆布、ふのり、まつも、その他海藻類、
水産加工品店では干し魚、珍味、昆布
鮭の加工品店では銀聖、鮭ざんぎ、秋鮭スモークサーモン
そのほか、浦河漬け（ツブ塩辛)、燻製類、たらこなどが挙げられている。

３．観光イベントと推進体制の充実　本町では、１年を通じて様々観光イベントが開催されています。特に夏に開催される※[3]「うらかわ馬フェスタ」は※[4]馬の町ならではのイベントとなっています。今後も、これらの観光イベン トを充実させ、人と人、人と馬とのふれあいや交流の輪を広げ、町外からも広く集客できる観 光行事とすることが求められています。　また、観光パンフレットやインターネットなどを通じ観光ＰＲに努めていますが、今後も、 特徴ある観光が楽しめる町としての認知度を向上するため、うらかわ優駿ビレッジアエルを中 心とした誘客事業を推進するとともに、観光協会などとの連携により、観光振興に向けた推進 体制や受入れ体制の充実を図る必要があります。

※[3]うらかわ馬フェスタは、馬上結婚式や浦河競馬など馬にこだわった内容で、町外や道外にも広く知られる。

※[4]夏のイベント
・日高育成牧場では、総面積１，５００ヘクタールの敷地内にある広大な草原を利用し、

競走馬の調教施設を紹介する場内見学バスツアーを開催いたし「JRA 日高育成牧場の見学バスツアー」

・馬をメインとした毎年７月下旬に行われる「シンザンフェスティバル」

・八月中旬に開催される「浦河港まつり」
地元の人々を中止とした街イベント
花火やカラオケ大会など地元の幅広い年代層をターゲットとしている。

今後の方向性

１．自然環境・文化の活用と民間との協働

⑴ 豊かな自然と馬を活用した観光拠点の充実、地域の歴史や観光資源の活用などにより、個性豊かな魅力ある観光地づくりを推進します。

⑵ 海や山、動植物など、本町の豊かな自然を活かした体験型の観光を推進します。

⑶地域の歴史的な財産である「西舎桜並木(優駿さくらロード)」を保全・育成するとともに、　特色あるイベントなどの情報を積極的にＰＲし、観光資源としての活用を促進します。

２．独自性を活かした観光メニューづくり

⑴ 「サラブレッド観光と乗馬のまち」をキャッチフレーズに、うらかわ優駿ビレッジアエルを中心に、馬をテーマとした滞在・体験・交流型の観光を推進します。

⑵ 乗馬体験メニューのＰＲは、愛好者・初心者などレベルやニーズに応じたＰＲの展開を図ります。また、乗馬単独ではなく、文化や知識・技術の習得、豊かな自然の散策や鑑賞などを組み入れた、魅力あるプログラムの開発と展開を図ります。

⑶ ＪＲＡ日高育成牧場をはじめとする町内の観光拠点を結ぶ周遊性のある観光ルートの形成に努めます。

⑷ 地場産素材を利用した料理の提供など、食による観光振興を推進します。

⑸ 地元農家･漁家､事業者などと協力体制を構築し､観光と地場産品の連携を進めます。

３．観光イベントと推進体制の充実

⑴ 馬の町・海の町らしいイベントの開催を通じて、町外からも多くの人が集うにぎわいの創出を支援します。

⑵ 観光振興の中心となる観光協会の活動強化を進めます。

⑶ 観光客の利便性とイメージアップを図るため、観光案内所の点検と機能強化に努めます。

⑷ 新聞や雑誌、インターネットなどで観光情報を提供し、誘客を促進するとともに、効果

的なＰＲ方法の研究を進めます。

⑸ 町外からも浦河を応援しＰＲしていくための体制について、浦河観光大使の機能充実も含め検討を進めます。

⑺広域観光の視点から、四町広域宣伝協議会との連携を図り「えりも・天馬とんがりロード」　を中心とする広域観光事業を推進します。

・PR 可能な産物

1. ゆるキャラを打ち出していくことも重要なのではないかと感じる。どうしてもただ馬といってもインパクトや親近感のわきにくい人は多い。浦河町の「うららん・かわたん」というゆるキャラをさまざまな場所で登場させる、あるいはもっと認知しやすい登場のさせ方をそていくとよいのではないのだろうか。

2. 馬の印象が強くなりすぎて、そのほかの※[5]特産品のイメージが付きにくくなっているのが現状である。馬の町をテーマにした街づくりしているのは、個性として打ち出す分にはいいことなのだが、先の観光への対応や変化がしにくい点がネックである。

※[5]特産品

日高昆布・浦河ハム・クマイチゴジャム・鮭加工品・地酒・たらこ・ヤーコン茶・味よしの汁・勝運馬力だる馬

味よしの汁

～かつお節と宗田節でだしをとっています。そば店がつくる汁なのでしっかりとだしがとれています。用途はギョーザに冷奴、湯豆腐、焼肉、しゃぶしゃぶ、すき焼きと使い方も色々とできます。

地酒

～秘伝古酒　時代の酒

スッキリした口当たりとさわやかな 酔い心地。そんな中で感じる何とはなしの安堵感『今日も一日ご苦労さん』・・・・・と、自分で自分を慰めながらグイッと熱燗を流し込む。『明日もがんばるゾ！！』なんて心の隅で思いながら・・・・・さわやかに、明日へのやる気を起してくれる 秘伝古酒の味

と香りと酔い心地。厳選された贅沢な原料と鍛えぬかれた技術が品質の高さと酒のうまさを証明しています。

地域観光の成功例、「やねだん」（鹿児島県鹿屋市串良町柳谷集落）
「鹿児島県の大隅半島にある鹿屋市の柳谷集落、通称「やねだん」ではアイデアと工夫、そして集落をあげての結束で、「限界集落」「過疎・高齢化」の逆境をはねのけ、国や行政に頼らない地域の再生を実現させたモデル地域として全国的に注目を集めています。
14 年前、人口 300 人のうち 65 歳以上が 4 割を超す、小さな集落でした。過疎化が進み、交流も少ない限界集落という状況の中で「やねだん」がめざしたのは、行政に頼らない、地域の人たちだけの地域再生です。
自主財源の確保で最初に行ったのが、サツマイモの栽培です。土地は有志の遊休地を無償で借りたのです。最初に行動を起こした高校生が苗を植え、それを見た高齢者や農家も参加するようになりました。トラクターで耕す人、長年の経験から目分量で苗の量をそろえる高齢者も頑張りました。
サツマイモのでんぷんを業者に販売する事業の収益で、元教師だった住民による「寺子屋」授業料を無料で開設、高齢者世帯への緊急警報装置を設置、そして古民家の活用で画家や陶芸家を迎い入れました。
そしてインターネットや口コミで評判を呼ぶようになり、やがて集落出身者がUターンして戻って来る人たちも増えてきました。
土着菌を肥料として育てたサツマイモと国見山系の清らかな水を使い醸したオリジナル芋焼酎「やねだん」が大ヒットしました。
大阪の居酒屋等や韓国でも味わえるようになり、収益の拡大は、凄まじいものがありました。96 年度の 1 万円からスタートし、02 年に 122 万、05 年年度には 495 万円になりました。
住民全てへ 1 万円のボーナス給付（06 年）は、政府が行った定額給付金とは違い、誰も恥じることのない、真っ当な報酬です。昨年は収益金を住民に還元して各家庭へ 10 万円のボーナスを支給・・・・そして今では住民が 285 人から 315 人に増えているそうです。
行政に頼らないで、地域でできることは地域でやる。ということが理念となっている。
それらで自主財源の確保
人が納得して集まる。還元するためのもの。

行政の補助金に頼った地域になってしまうと、行政に地域の力をそがれてしまう。そのため地域の住民の人々が周りの観光客が納得して観光地に訪れてもらえるようにしていくことを目指すのが、地域振興や地域創生への第一歩といえる。

遊雑学ウォッチング
「http://blogs.yahoo.co.jp/joy_world7/24018112.html」
みずほ総研論集　2009Ⅳ
「http://www.mizuho-ri.co.jp/publication/research/pdf/argument/mron0912-3.pdf」
現状と課題 20　浦河町
「 https://www.town.urakawa.hokkaido.jp/chousei/keikaku/keikaku/files/6keikaku1-6.pdf」
松下政経塾　何のための地域振興か
「http://www.mskj.or.jp/report/801.html」

第2章　SWOT 分析について

・課題は何かを考える

マーケティングを進める場合、最初に取り組むべきことは課題何かを考えなければいけない。例えば、個別の地域経営主体である地域の中小企業でいうと売り上げが伸びない、利益が出ないなどがあげられる。売り上げが伸びないのは商品のライフサイクル的に衰退期に入った商品が多い、魅力的な商品がないなどが考えられる。また、利益が出ないのはマネジメントの問題でもあるが、例えば魅力的な商品などがないため値下げ販売せざるを得なくなり、他の競業商品との競争上も適切な価格設定ができないことが考えられる。この場合、魅力的な商品の開発、改善・改良・組み合わせなどによる新製品の発売、新たな分野での利用促進による需要創造などが解決策となってくる。

これを地域で置き換えてみると、人口の社会的増減において転出者が多く転入者が少ない、商店街における人通りが少ない、来訪客が減少している、イベントを実施してもあまり多くの人が集まらず、参加者の満足が高くないなどといったことが考えられる。

これらの課題を解決することが地域の発展に繋がっていく。新たな商品の開発や販売、利用者が満足するサービスの提供、地域が元気になるイベントの開催などを考えていく必要がある。

マーケティングは、顧客との支持関係を構築するための創造的に活動を行うことである。つまり、顧客である生活者、利用者、購入者の立場に立って、生活者、利用者、購入者にとって価値あるものは何か、価格、物理的提供の仕方、コミュニケーションなどを総合的な観点からとらえて活動する。創造的に諸活動を実施するのがマーケティングなのだ。

・現状を知る

課題の解決を図るためにはまず、現状を知ることだ。そのためには企業経営における戦略会議や企業診断に使われている『SWOT 分析』や、『SWOT クロス分析』、『３C 分析』使う。これらの方法は観光振興の環境や観光資源・商品に焦点をあてて考えることができる。また、地域の観光戦略の方針付け・見直しの指針にもなる。

①　SWOT 分析

SWOT 分析とは

内部環境としての　強み(Strength)、弱み(Weakness)、

外部環境としての　機会(Opportunity)、脅威(Threats)　を分析した図のことをいう。企業の事業についての現状分析からビジネス機会を明らかにするため、事業戦略やマーケティング計画を決定する際に用いられる。

＊SWOT 分析で現状と地域のビジネス機会を明らかにし、ビジネス機会をできるだけ多く獲得するための戦略や計画に落とし込む。
＊SWOT 分析におけるビジネス機会とは、SWOT 分析を通じて明らかにされた成功要因(KSF)のことで、SWOT 分析を実施することによって、この KSF を満たす事業戦略やマーケティング戦略・計画の策定につながる。

・強み(Strength)、弱み(Weakness)の例
＊資源（財務・知的財産・立地）　＊顧客サービス　＊効率性　＊競争上の優位
＊インフラ　＊品質　＊材料　＊経営管理　＊価格　＊輸送時間　＊コスト　＊容量
＊主要顧客との関係　＊市場における知名度・評判　＊地域言語の知識　＊ブランド
＊企業倫理　＊環境　…等

・機会(Opportunity)、脅威(Threat)の例
＊政治・法令　＊市場トレンド　＊経済状況　＊株主の期待　＊科学技術
＊公衆の期待　＊競合他社の行為　…等

②クロス SWOT 分析
クロス SWOT 分析とは
　前述までの SWOT 分析をベースとして　強み・弱みの内部環境と、機会・脅威の外部環境をクロスさせ、様々な戦略オプションを検討する手法である。

具体的には、

「強み(S)×機会(O)で積極的攻勢」⇒地域にとっての強みに、事業機会をぶつける
「強み(S)×脅威(T)で差別化戦略」⇒地域外にとっての脅威でも、地域の強みをぶつけて機会にする
「弱み(W)×機会(O)で弱点強化」⇒事業機会があるので、地域の弱みを改善するか大損しない
「弱み(W)×脅威(T)で防衛策」⇒業界の脅威と地域の弱みで、撤退しない為に
クロス SWOT では自社の現状分析を元に、それぞれ４つの戦略オプションが生まれる。これらの戦略オプションから自社の大きな戦略の方向性を絞り込み、次なる手を打っていく為のベースとなる。

	O：opportunities 機会	T：threats 脅威
S：strong 強み	強み×機会 強みを活かして機会を掴む	強み×脅威 脅威を機会にできないか？
W：weaknesses 弱み	弱み×機会 弱みをカバーして機会を掴む	弱み×脅威 破滅を避けるために

第3章　SWOT 分析の具体的事例

事例①：天塩町

概要：総面積 353.31k ㎡、人口約 3240 人

目的：観光振興を通じて新しい地域ブランドを確立することで、町民が希望するまちづくりの一翼を担うことを目的としている。

≪SWOT分析結果≫

	内部環境	外部環境
プラス要因	強み（Strength）　強みを最大限に活かした戦略へ ○利尻・礼文観光の際の通り道になっている立地条件 ○道内における「しじみブランド」の確立 ○北海道では稀有な「歴史」と「歴史資源（天塩川歴史資料館、川口遺跡）」 ○利尻富士の絶景 ○イトウやオオヒシクイなど絶滅危惧種が生息する自然環境 ○アジア圏における「北海道ブランド」人気 ○天塩川流域において「天塩」という名称がついていること ○北海道の「てっぺん」という名称が使えること ○ゆるキャラ「てしお仮面」のカワイサ	機会（Opportunity）　機会を生かした戦略へ ○個人型やテーマ性の高い旅行への転換 ○物見遊山型から体験型観光への転換 ○団塊世代の退職による健康志向の高まり ○自然回帰や"いやし"への関心の高まり ○外国人観光客の増加 ○北海道ブランドの認知拡大
マイナス要因	弱み（Weakness）　弱みをカバーする戦略へ ○体験型の観光コンテンツが不足しており、利尻・礼文観光客に素通りされる ○看板等が脆弱で観光客を集客拠点から町内へ誘導できない ○天塩のよさを伝えきれていない ○名産のしじみの資源量が少なく大々的に活用できない ○海の町なのに鮮魚が手に入りにくい ○宿泊施設のキャパシティ※不足	脅威（Threat）　脅威を回避する戦略へ ○天塩町人口の減少 ○しじみ資源量の減少 ○消費税や電気料金の引き上げに伴う景気減退 ○ＴＰＰによる農産物価格競争の激化 ○原油高による物流コスト増大 ○行政（サービス・インフラ）のスリム化

※キャパシティ：収容能力。客室数や宿泊可能人数。

・SWOT 分析による観光振興の課題

具体的な課題として、1 観光の動機付けが弱い 2 集客拠点からの観光導線が弱い 3 情報発信が弱いなどが挙げられる。

１、観光の動機付けが弱い

観光の現状としては、高山植物観賞と新鮮な海の幸を求めた「利尻・礼文ツアー」が最も主要な観光要素になっているが、本町に「トイレ休憩」以外で立ち寄る理由がなく“素通り”されている。

また、年に一度の大イベント「鏡沼しじみまつり」での観光客流入があり、「鏡沼しじみまつり」は前述の利尻・礼文とは違い、本町自体が観光の目的となっている主要な観光コンテンツですが、まつり以外の観光要素が少ないため（知られていないため）町内観光施設の利用につながっていない状況になっている。そのことから、今後の本町の観光振興を考えていく上で、「観光の動機付け」を強めていくことが重要な課題のひとつとなっています。

2、集客拠点からの観光導線が弱い

情報交流センターである(道の駅てしお)と(てしお温泉)の二つに多くの観光客が訪れるが、他の観光施設の利用している人は少ない。他の観光施設の導線の強化が課題となっている。

3、情報発信が弱い

絶滅危惧種や天塩川など北海道において多くの観光要素があるが、知名度が低く活かしきれていない。

・SWOT 分析から導いた課題への対応

①観光の動機付けが弱いという課題に対しては、本町の強みである「食」「歴史」「自然」を活した観光コンテンツづくりを行い、②道の駅等集客拠点からの観光導線が弱い、③情報発信力が弱いという課題に対しては、「交流・情報発信」をテーマとした新たな取組により解決を図ります。 各取組に際しては、観光振興ビジョンの基本コンセプトである“悠久の「川」、「人」、「自然」北加伊道天塩國”を軸として「一貫性」のある取組を行うことにより「てしお観光ブランド」の創出と育成・定着を図る。

・天塩町を学んで浦河町への提案

（1）天塩國の名産がぎゅっと詰まった「天塩國弁当」の商品開発 天塩川流域の特産を一度に味わうことのできるオリジナル性の高い「天塩國弁当」を企画・開発・販売し、本町単体ではなく天塩川流域の地域そのものをブランド化する取組を行っていきます。 まずは、本町民に「集まりのときは、この弁当いいね！」と言っていただけることをめざし、地元での評価を高めたのちに、町外の方に「天塩川を味わえる弁当」として認知を拡大させている。

#写真はイメージ

A、浦河町の名産品であるサケ、昆布などの豊富な海産物を使ったオリジナル性の高いお弁当を作りブランド化し、SNS や道の駅、浦河駅など観光客などが多く集まる場所で販売し浦河町のブランドとして認知を広める。

（2）「歴史」に関する観光コンテンツの開発・育成

天塩川下流域一帯を漁猟圏としていたアイヌは、天塩川を水路として海の幸と山の幸を上流部のアイヌと交易して共存共栄を図り、物資や旅客を運搬する舟運として利活用していました。 また、「明治30年代後半から40年代を天塩材時代と呼ばれた」というほど天塩の林業は隆盛を示し、水産物を抜いて輸出1位の座を占めていました。特に天塩産のアカエゾマツは天塩パインとして重宝され高級バイオリンに最良として使用されました。

この頃天塩の木材で製造した造船も盛んに行われ町内に造船所が 13 箇所あったとされています。

天塩は、北海道でも歴史の深いまちであるということを強みと捉え、歴史を観光資源とすることで「てしお観光ブランド」を作り上げていくことを提案します

・A、浦河町は馬が名産として有名であるが、そのほかの歴史を多くの人（子供）に情報発信をし、新たな観光の一つとして捉えたい。浦河町立郷土博物館は、浦河町の郷土と自然さらには歴史を学習出来る施設である。このことから、小中学生の研修など自然や馬、歴史様々な事が学べる場所、町として確立していけば新たに注目され多くの観光客を呼び込み新たな観光の資源としての活用が出来ると考える。

参考文献

http://www.teshiotown.hokkaido.jp/wp-content/uploads/2015/10/c99b14b8f16fe21740531b898980972d.pdf

事例②：美瑛町

概要：総面積 676.78 km²、人口 10,438 人

目的：北海道の中でも差別化を図り、強みである「花・丘・田園風景・雄大で多様性のある自然環境」を軸に、長期でゆっくり・年間とおして様々な四季が楽しめ、様々な体験交流を目的としている。

（２）富良野・美瑛広域の SWOT 分析

～観光の強み・弱み・機会・脅威～

富良野・美瑛広域の強み・弱み

強み （Strengths）

- ヨーロッパを思わせる自然景観・丘の風景
- 大雪山系十勝岳連峰＋日高山系などの雄大な山岳地帯と東大演習林を含む森林地帯
- 北海道のほぼ中央に位置し、札幌圏・旭川圏へのｱｸｾｽも良く、空港とも近い地理条件
- 白銀世界・良質な雪質と国際的なスキー場
- ﾗﾍﾞﾝﾀﾞｰをはじめとする花々
- 十勝岳を中心とする温泉（白金・十勝岳）
- 空が広く、空気がきれいなｲﾒｰｼﾞ
- 感動とｸﾘｰﾝなｲﾒｰｼﾞを発信した先駆者（前田真三・倉本聰・富田忠雄）
- 空知川＋かなやま湖を中心とする川・湖でのｱｸﾃｨﾋﾞﾃｨ体験が豊富
- 北の国からのﾛｹ地＋富良野塾の演劇ｿﾌﾄ
- 獲れない物はない野菜王国
- 上富良野の豚・富良野牛・ｶﾚｰの取組
- 占冠の山菜や通年型の大型ﾘｿﾞｰﾄ施設
- よそ者を受け入れる風土

弱み （Weaknesses）

- 観光客の夏期集中による渋滞
- 公共交通アクセスの不便
- 外国人対応など観光案内機能の不足
- 夜の観光の魅力不足
- 観光関係機関のﾈｯﾄﾜｰｸ不足
- ﾎｽﾋﾟﾀﾘﾃｨ不足
- 雪による冬季生活が不便
- 自然環境の破壊
- 本州と比べて歴史が薄い
- 特徴ある料理がない
- 名物となるお土産が少ない
- 歩いて回れる観光施設が少ない
- 宿泊施設料金に多様性がない
- 長期滞在用の宿泊施設が少ない
- イメージ先行

今後の想定される機会 （Opportunities）

- ｴｺﾂｰﾘｽﾞﾑ・ｽﾛｰﾂｰﾘｽﾞﾑなどの追い風
- 団塊世代の退職に伴う市場拡大
- 国のﾋﾞｼﾞｯﾄｷｬﾝﾍﾟｰﾝによる外国人観光客（東ｱｼﾞｱ）の増加
- 中国・ｵｰｽﾄﾗﾘｱをはじめとするｱｼﾞｱｵｾｱﾆｱ経済の発展にともなう観光ﾏｰｹｯﾄの拡大
- 旭川空港の国際化・韓国直行便就航
- 北の国からの台湾・韓国放送
- 高規格道路の開通による旭川圏のｱｸｾｽ拡大
- 高速道路開通による十勝圏・札幌圏のｱｸｾｽ拡大
- ｽｶｲﾏｰｸｴｱﾗｲﾝ参入による低価格化

今後の想定される脅威 （Threats）

- ﾍﾟﾝｼｮﾝ・ﾎﾃﾙ・飲食店の担い手不足
- 交通渋滞などによる住民の歓迎意識の低下
- 他の観光地との競争激化
- 十勝岳・BSE などの自然災害・風評被害
- 原油高による航空賃・ガソリンの高騰
- ｽｷｰ人口の減少
- 観光ｲﾝﾌﾗの整備
- 人口減少による旅行者減
- 若者の旅行離れ
- 高速道路開通による空洞化
- 乱開発による自然環境の破壊
- 農業の担い手不足による農地の荒廃

6

・SWOT 分析による観光復興の課題

具体的な課題として、１自然景観の保護、2観光客のニーズは「食」、3交通アクセスの改善、4体験型の修学旅行生などがあげられます。

1、自然景観の保護

本地域は、大雪山国立公園十勝岳連峰と日高山系からなる雄大な自然に囲まれ林などの広大な森と農業を基幹産業とする希少性高い自然形態を有する地域であり、それらの保全・活用が大きな課題である。

2、観光客のニーズは「食」

旬な食材を活かしきれておらず、「ここでしか食べれないもの」、「こだわり料理の創出」が課題として上げられる。

3、交通アクセスの改善

「夏のピーク」は渋滞を生み、冬は雪に閉ざされる。観光施設は郊外に多く、各観光施設間は離れており、便数も少ない。効率的な観光ができず、観光客だけではなく住民にも不便である。

・美瑛町を学んで浦河町への提案

景観を生かせる情報発信を徹底だと考える。美瑛では景観の情報を全国に発信するために「丘のまちびえい活性化協会」というのが存在する。これは平成 24 年 10 月に設立され、美瑛の全ての人・産業・地域社会に貢献する組織であり、さまざまな事業を通して、地域活性化を図ることを目指しています。主な事業は、美瑛の魅力の発掘、地域ブランディング、6次産業化支援、商品開発支援、事業家支援、情報発信、国際観光交流、公共施設運営など多岐に渡り、町民の皆さまや関係機関との連携をしながら取り組んでいます。

浦河の観光ホームページには↴↴

「四季を通して見どころがいっぱい。

浦河の絶景を探しに来てください。

春・夏・秋・冬。浦河の風景は、季節ごとに様々な彩りで、訪れる人を迎えてくれます」

景観に関しては以上のことしか記載されていない。

浦河町には以下の素晴らしい景観があり四季も味わえる唯一の町である。

以上を踏まえて、自然豊かである浦河の魅力を前面に売り出し情報発信をする必要性があると考える。

これを観光客に繋げるため、景観を生かせる情報発信を提案します。

画像

http://www.jalan.net/kankou/spt_01607ab2040005378/?screenId=OUW1701

札幌国際大学地域連携センター年報
第１号

2017(平成29)年3月　発行

編集　札幌国際大学地域連携センター

発行　札幌国際大学

〒004-8602　札幌市清田区清田4条1丁目4番1号

電話011-881-8844　FAX011-885-3370